

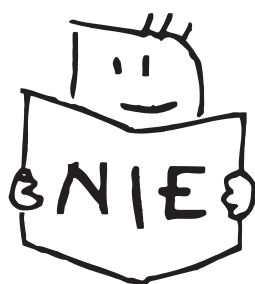
2010(平成22)年度

兵庫県

NIE

実践報告書

◇ 教育に新聞を ◇



兵庫県NIE推進協議会

はじめに

兵庫県N I E推進協議会

会長 杉本 健三

東日本大震災の深刻な被害、また、福島原子力発電所事故の切迫した状況に胸が痛みます。亡くなられた方々のご冥福とともに、被災された皆様が一日も早く安心できる暮らしを取り戻されるよう心から祈っております。

今回の大震災で、新聞とインターネットそれぞれの特性を痛感させられました。

津波の映像、その衝撃の大きさに身じろぎもできませんでした。世界中がリアルタイムで衝撃を共有し、日本に大きな援助を寄せてくれています。一方で、福島第一原子力発電所事故が報道されるや否や、成田空港は帰国する外国人でごった返しました。

インターネットの「衝撃力」と情報共有力の大きさ、そして、「事実増幅力」を改めて感じました。

「新聞の力」も発揮されました。震災報道で強く発揮された「新聞の力」について考えてみました。まず新聞の「分析・説明する力」です。東北の地図とともに各地の被害状況が定期的に伝えられています。原子力発電所の構造や現状や対応も図示とともに説明されています。これらは復興を考える際の大切な資料として生かすことができます。

次に新聞の「心を共有していく力」です。体温のある情報を継続的に伝えてくれます。八戸市の漁業阿部利雄さん（81歳）の声を紹介します。「チリ地震とは比べ物にならないほどの被害。自慢の漁船も流されちまって、どこさいったかわからねえ。でも、下ばかり向いてたって暗くなるばかりだから、とにかく明るく働くん。まあ何とかなるべなな」。人の強さ美しさを感じ、逆に勇気づけられました。

さらに新聞の「世界全体の動きを同じ紙面で同時に見せてくれる力」です。日本中が東日本大震災の痛みを息を詰めている時も、リビアで、バーレーンで、イエメンで反体制派が現政権と衝突をしていることを生々しく伝えていました。また、サプライチェーンという言葉も繰り返す目にしました。日本が、東北が、世界と直接繋がり世界経済を左右していることも知りました。

震災報道がN I Eで私たちが目指すものをはっきりと示したと感じています。インターネットには速さと衝撃力があります。ただ、強すぎる刺激は思考を奪いがちです。視覚的な刺激は一旦心に沈んでいって言葉に置き換えられて初めて、思考につながっていきます。これからの社会を生きる子供たちに世界の広さとつながりを感じさせ、感じたことを言葉に置き換えさせ考えさせる…そのツールとして新聞に勝るものはありません。N I E活動を通じて、次世代の幸福作りを進めていきましょう。

この実践報告集には次世代の幸せづくりに励む教室での営みが紹介されています。どうぞ皆さんの教室にも取り入れて、これからの日本の幸せづくりに活かして下さいますようお願いしています。

<目次>

はじめに	兵庫県N I E推進協議会会長	杉本 健三
【小学校】		
新聞づくりを通して 伝え合い 学び合う 児童の育成		
	伊丹市立笹原小学校 教諭 門間 祐二	6
新聞に親しみ、活用する子をめざして		
	明石市立花園小学校 教諭 須方 茂子、井口千代子 臨時教諭 廣瀬 雄一	10
子どもたちの「活用する力」を向上させるために		
～「N I E」実践指定校のメリットを学習に活かす～		
	たつの市立小宅小学校 教諭 石堂 裕	14
新聞を通して社会とのつながりを上げるとともに、よりよい表現力を育てる		
～楽しい新聞・広がる世界～		
	朝来市立梁瀬小学校 教諭 和田 康平	18
互いに伝えあい、認めあい、高めあう子の育成		
～新聞に親しみ、活用しながら「ことばの力」を育む～		
	篠山市立岡野小学校 教諭 崎田 真宏、山上 徳義 河南 有華、和田 聡子	22
新聞を活用して、表現力を高めよう		
～読む力・考える力・伝える力を育む～		
	淡路市立中田小学校 教諭 南 志乃婦	26
新聞活用を通して環境問題への興味・関心を広げる		
	神戸市立本山第二小学校 教諭 小川 弘	30
言語力の充実を目指して N I Eの活動から		
	尼崎市立長洲小学校 教諭 高品 玲	34
「学ぶ喜び」を味わえる授業の創造 ～教師の授業力を高めあう～		
	西宮市立南甲子園小学校 教諭 西山 祐子	38
新聞に親しもう～社会の出来事に興味を持とう～		
	小野市立下東条小学校 教諭 長谷川 多美	42
新聞に親しもう～社会とつながり、人と出会える新聞～		
	宍粟市立三方小学校 教諭 西村 一郎	46
「伝え合い 学び合い とともに伸びようとする児童の育成」		
～N I E 3年間の取組～		
	豊岡市立中筋小学校 教諭 森脇江梨子、田中 弘子、大友 公智 寺川 彰徳、清水 肇、山本 直子	50

<中学校>

社会科でのN I Eの活用～思考力を高めるための新聞の活用～

三木市立三木東中学校 教諭 前田 義典 …… 56

新聞記事で育てる言葉の力

高砂市立高砂中学校 校長 神尾 信作 …… 60

「授業における効果的な新聞の活用について」

神戸市立鈴蘭台中学校 教諭 米谷 浩実 …… 64

新聞から「なぜ」を掘り出せ ～予想－検証学習～

尼崎市立南武庫之荘中学校 教諭 尾之内 潤 … 68

「作る・読む」 新聞を活用したさまざまな取組

明石市立野々池中学校 教諭 奥内 正浩 …… 72

新聞を通して「いのちと平和」を考える

関西学院中学部 教諭・宗教主事 福島 旭 …… 76

新聞を活用した「言語活動の充実」に関する取組

～コラムや投書欄を使って～ 高砂市立荒井中学校 教諭 中野 順一 …… 80

<中学・高等学校>

N I Eを通じて、中高生の社会への興味・関心を高め、学力を身につける

武庫川女子大学附属中学・高等学校 教諭 田村 肅 …… 86

<高等学校>

「ニュースレポート」の取り組みをさらに深化させるために

県立西宮甲山高等学校 教諭 大塚 久夫 …… 92

N I Eと論作文～新聞写真を使った小論文指導～

県立柏原高等学校 教諭 島村 香苗 …… 96

N I E（教育に新聞を）事業3年目を終えて

県立星陵高等学校 教諭 高田 恭一 …… 100

新聞を読んで心を耕し、学ぶ力を育てる

県立武庫荘総合高等学校 教諭 川村 道雄 …… 104

<大学>

「高齢者のこころ」の理解 国際教育への展開

近畿医療福祉大学 教授 勝田 吉彰、講師 黒木 利作 …… 110

【2010年度兵庫県NIE実践指定校】

規定枠 19 校、奨励枠 5 校、独自枠 1 校、総計 25 校

(◆は継続校 ◇は新規校)

規定枠・小学校 11 校

- ◆伊丹市立笹原小学校
- ◆明石市立花園小学校
- ◆たつの市立小宅小学校
- ◆朝来市立梁瀬小学校
- ◆篠山市立岡野小学校
- ◆淡路市立中田小学校
- ◇神戸市立本山第二小学校
- ◇尼崎市立長洲小学校
- ◇西宮市立南甲子園小学校
- ◇小野市立下東条小学校
- ◇宍粟市立三方小学校

規定枠・中学校 5 校

- ◆三木市立三木東中学校
- ◆高砂市立高砂中学校
- ◇神戸市立鈴蘭台中学校
- ◇尼崎市立南武庫之荘中学校
- ◇明石市立野々池中学校

規定枠・中高一貫 1 校

- ◇武庫川女子大学附属中学・高等学校 (西宮市)

規定枠・高等学校 2 校

- ◆兵庫県立西宮甲山高等学校 (西宮市)
- ◇兵庫県立柏原高等学校 (丹波市)

奨励枠 5 校

- ◆豊岡市立中筋小学校
- ◆関西学院中学部 (西宮市)
- ◆高砂市立荒井中学校
- ◆兵庫県立星陵高等学校 (神戸市)
- ◇兵庫県立武庫荘総合高等学校 (尼崎市)

県独自枠 1 校

- ◆近畿医療福祉大学 (神崎郡福崎町)

【 小 学 校 】

「研究テーマ」

新聞づくりを通して

伝え合い 学び合う 児童の育成

伊丹市立笹原小学校 教諭 門間 祐二

目的

新聞に親しむ。
新聞記事を通して人の生き様を知る。
親子や友だちと感想を共有する中で学び合う。
楽しさを知る。
読解力・思考力・表現力を伸ばす。

課題

ニュース係が毎日の朝の会で「今日のニュース」を紹介する。担任が毎朝、気になる記事を紹介し子どもたちには、新聞やテレビなどで日々の出来事に興味を持ち、親子や友だちと感想を共有する中で学び合う楽しさを知ったが、読解力や表現力を伸ばすには至っていなかった。



実践

新聞記者として学校をアピールしよう。
読売新聞掲載 4月21日阪神版掲載予定

方法

5年生176名から募集し、6グループに分かれ1カ月取材活動を行う。

活動時間

業間・昼休み・春休み

グループ

- ① 校長先生インタビュー
- ② 名物先生インタビュー
- ③ 地域の方に質問
- ④ 6年生に取材
- ⑤ メイン記事担当
- ⑥ 見出し

校長先生にインタビュー

校長室にお邪魔して校長先生の素顔をみんなに紹介しようと事前に質問を考えてインタビューに臨んだ。校長先生の答えをしっかりと記録し原稿用紙にまとめることができた。



【校長先生に質問する子どもたち】

名物先生にインタビュー

自分たちで名物先生をきめる作業から始まった。①授業がおもしろいこと。②みんなから好かれていること。③個性的な先生であること。を条件にその先生の知られざる素顔を暴露しようと臨んだがうまくかわされながらも子どもたちは質問を工夫しながら楽しんで

取材することができた。

地域の方に質問

笹原小学校は地域の方とのつながりが深く4年生は毎年地域の方から「麦わら音頭」という無形文化財にも登録されている踊りを教わる。その方がどんな思いで子どもたちに踊りを教えてくださるのか質問した。地域の伝統や歴史を次世代につなぐ懸け橋になってほしいという願いを知り、自分たちにできることは何か考えるきっかけとなった。



【麦わら音頭の会長に質問しています。】

6年生に募金活動を始めたきっかけを取材

東日本大地震があり、その翌日から6年生が動きだした。毎朝校門に立ち募金を呼び掛けている6年生の姿に4年生は「すごいなあ」と感激していた。卒業式の当日に6年生に募金を始めたきっかけを質問した。6年生は「新聞を読んで自分たちにできることは何かあるか考え行動にうつした。」とはきはきと答えていた。



6年生と話したことがない4年生たちはドキドキしていたが、慣れてくると話を聞きながらメモすることができていた。3日間で集まったお金は20万9042円を伊丹市社会福祉協議会に寄付をしに行く帰りにも突撃取材を行った。



【社会福祉協議会の帰りに取材しています。】

NIEの授業の一例

授業で地震の直後の新聞を使って授業をした。内容は「みんなに伝えたい写真をグループで選び理由を発表しよう。」というテーマで展開した。各紙の新聞の中から写真を選び班で理由を考えてまとめていく中で、同じ記事を選んだ子どもたちでも理由が大きく違っていたのが面白かった。写真はデジタル黒板で映し全員がはっきり見えるように配慮した。

授業で意識していること

記事の内容を教師が紹介する形で何度かこのパターンの授業をした。1学期・2学期の「今日のニュース」で子どもたちから自分の思いを聞いているため意見交流ではたくさんの意見が出て考えを深めることができた。ただ、いい授業にはいい教材（記事）が必要になる。いい記事と出会うために教師が毎日の新聞と出会う時間を大切にしなければいけないと感じた。子どもたちは今日学んだことを家庭で話したり、新聞でふり返ったりしていた。



【テーマにあった記事を選ぶ子どもたち】

メイン記事

NIE活動2年間で1番力をつけたのは、毎日スクラップする子どもたちである。12冊を超えるスクラップ帳には自分の興味ある記事を中心に感想まできちんとまとめることができていた。係の活動の中に「ニュース係」を作り自分のスクラップ帳から気になるニュースを発表していました。スクラップを続けている子どもたちに「わからない漢字はどうするの」と聞くと「お母さんに聞いたり、辞書をひいたりする」と答えていた。親子でファミリーフォーカスができていることがうれしかったし、親の協力なしに4年生は難しいことも知った。Kさんは、宇宙飛行士になるのが夢で自分の夢のために宇宙関係の記事を集めていた。「スクラップ帳は無意識に興味ある記事を選んでいるから、自分の夢を見つける手掛かりとなる。」と担当記者にアドバイスいただき、スクラップの大切さを再認識した。

見出しをつける

記者32名が原稿用紙2枚の記事を書いたかったので編集作業が大変だったが、見出しはテーマごとに分かれていたので比較的簡単な作業であった。4年生の国語で新聞づくりがあり、何度も経験していたので上手に見出しをつけることができた。



【見出しをつけていよいよ完成】

たくさんの原稿が集まり、すべてを新聞に掲載することができなかったが、読売新聞に自分たちの記事が紹介される喜びからか、何事にも前向きな子どもたちの熱意に驚かされた。初めから、無理だと思わずにどんなことでも子どもたちにやり方を教えて任せていこうと思った。

記者活動を終えて

- いろいろな人にインタビューすることができて、それぞれの人の思いや願いがあることを知った。
- 初めはとっても緊張したが、丁寧に相手の立場になって聞くと、目を見て答えてくれてうれしかった。
- 記者の仕事は、相手の思っていることをうまく聞きだすことが難しかった。事前にしっかり質問を考えておかなければならないと感じた。
- とってもやりがいのある仕事で新聞に自分の名前が載っていて感激した。
- 多くの人に笹小の取り組みを知っていただいたし、学校のよさも再発見することができた。
- デジカメをつかっていい顔を撮るのが難しかった。

活動をふりかえって

2年間NIE活動を取り組んできたが、2年目「何をしようか」戸惑いがあった。2年目も終わりの今年の3月、読売新聞の記者から「学校紹介の記事を載せてみませんか。」と願ってもない依頼に快諾した。

4年生176名全員の前で記事の内容を記者自ら紹介していただき、32名の子ども記者が春休みにも関わらず参加してくれた。記者も10回以上学校に足を運んでくださり、1カ月間集中的に活動することができた。ス

クラブやNIEの授業がきっかけで多くの子どもたちが新聞に興味をもってくれてよかったと思っている。

課題

読売新聞の記者と協力しながらやっと思いでできた新聞を見つめる子どもたちの目は輝いていた。同時に新聞を作る苦勞を知ったのは事実である。NIEの実践校として2年を終え、これから子どもたちに新聞のおもしろさや情報の大切さを授業の中でどう展開していくのか課題である。

2011年(平成23年)4月21日(木曜日) 青森 青森 青森 青森 (朝3種郵便物認可)

わたしのまち ぼくの学校

わたしたちが取材して書いた新聞です

伊丹市立笹原小

1年生58人を迎えた「笹小」は、伊丹市で一番南の小学校です。「笹は平安の頃から「播磨野原」と呼ばれたらしく、百人一首に詠まれています。今では住宅街に囲まれています。1967年に創立された頃は田んぼばかりだったそうです。学校の誇りは「笹っ子魂」。何にでも前向きに挑戦する心です。校歌にも「笹の根のちたたくましく」とある通り、すくすく伸びていきたいです。

「阪神」の時は全国の人に助けられたことも新聞で学び、活動はさし広がります。今春に卒業した前の6年生は、「恩返し」と募金活動に取り組みました。在校生や地域の人々にも呼び掛け、卒業式前の3日間で20万9041円を集め、伊丹市社会福祉協議会に寄付し行きました。

土橋未奈さん(12)は「日に日と犠牲者が増え、何かせせこいらなかった。古川広樹君(12)も「団結力が笹小の良いところ。少しは後輩に伝えられたかな」と話しました。

授業をきっかけに、記事をフットに切り張りし始めた人も大勢います。新聞の隅々まで目を通す5年渡辺

千尋さん(10)は「絵本作家が夢で作家のインタビュー記事が面白い」と目を輝かせ、5年丸山楓加さん(10)ももうフットは12冊目。動物が好きで、震災で助けられた犬の話に感動した。スクラップは宝物や「地域との結びつきの深さも自慢です。「存馬山あな笹原 風吹けばはいてそよよを 忘れやはず」と詠まれた百人一首の大会が毎年、校内で開かれ、腕を競います。「昔の話を聞く会や冬

新聞記事エッセイクラブと伊丹市(笹原)で

初めて訪ねた時、鶴由順公校長先生が「元気なあいさつが響いているのであそぼう会」では、お年寄りや戦争のつらさを語りてくれたり、お手玉やメンコを懐かしい遊びを教えられたり、もちつきや星の観察会、夏祭りなど、地域を支えられての行事がいっぱいあります。

最後に全校児童1034人から感謝を込めて、「地域のみなさん、今後も笹小をよろしくお願いします」

カッパくん
人間界のいろんなことに興味があります

新登場
ぼくは

元気が
毎年の運
のが、地元
音頭です
れる「むぎ
人にインテ
柳田扇里さ
竹嶋 どん
うちの
年中、半給由半スポン
るて全

学不 幸わる 知る

3月の新聞は、東日本大震災でいっぱいでした。そこで、生まれる前の阪神大震災について家族に聞き、発表したりしました。5年の園田晴さん(10)は母親から「神戸や西宮の知人は家を失ったり、亡くなったたりしたのよ」と教えられ、驚いたそうです。

「阪神」の時は全国の人に助けられたことも新聞で学び、活動はさし広がります。今春に卒業した前の6年生は、「恩返し」と募金活動に取り組みました。在校生や地域の人々にも呼び掛け、卒業式前の3日間で20万9041円を集め、伊丹市社会福祉協議会に寄付し行きました。

千尋さん(10)は「絵本作家が夢で作家のインタビュー記事が面白い」と目を輝かせ、5年丸山楓加さん(10)ももうフットは12冊目。動物が好きで、震災で助けられた犬の話に感動した。スクラップは宝物や「地域との結びつきの深さも自慢です。「存馬山あな笹原 風吹けばはいてそよよを 忘れやはず」と詠まれた百人一首の大会が毎年、校内で開かれ、腕を競います。「昔の話を聞く会や冬

記者から
初めて訪ねた時、鶴由順公校長先生が「元気なあいさつが響いているのであそぼう会」では、お年寄りや戦争のつらさを語りてくれたり、お手玉やメンコを懐かしい遊びを教えられたり、もちつきや星の観察会、夏祭りなど、地域を支えられての行事がいっぱいあります。

最後に全校児童1034人から感謝を込めて、「地域のみなさん、今後も笹小をよろしくお願いします」

笹小新聞が完成しました

新聞掲載をきっかけに子どもたちは自信をつけ、スクラップや記者として校内でかつやくするようになりました。NIEの2年間でたくさんを学び、実践することができました。ありがとうございました。

新聞に親しみ、活用する子をめざして

明石市立花園小学校 教諭 須方 茂子

教諭 井口千代子

臨時講師 廣瀬 雄一

1. はじめに

本校でのN I Eの実践は今年度で2年目となる。前年度同様4年生で実践を行った。まず、新聞に親しむために新聞は身近なものであるということを認識させ、興味や関心を持たせることを目指した。そして更には、新聞を学習教材として活用することを目標とした。

今年度は4年生の近くのエレベーターホールに新聞コーナーを設けたことにより他学年の目にも留まりやすくなった。昨年度この取り組みを行った5年生や6年生が放課後に新聞を手にとっている姿を目にすることもあった。新聞の提供は5月から9月末までの4カ月間(8月は休み)、6社(2社は小学生新聞)より受けた。

り、そのような家庭の子どもたちも新聞に興味を示すようになった。彼らが最初に発見したことは、見出しの文字が大きいことと写真があつて分かりやすいことである。これは読み手を引きつけるための工夫であることを知った。さらに、新聞記事をマジックで囲む作業を進めていくと、世の中で起こった事件などの報道以外にも多様な情報があることに気付いた。これは、料理や本の紹介のような暮らしに役立つ情報や漫画やクイズなどの娯楽情報などである。このように新聞の工夫や情報の多彩さに気づき、新聞は決してとっつきにくいものではなく、自分たちにも親しみをもって読めるものであることを学んだ。特に小学生新聞を楽しんで読んでいた。

次に新聞作りに取り組むことにした。読み

2. 実践

(1) 国語科での取り組み

指導計画

①単元「新聞記者になろう」

- ・新聞を知る。
- ・新聞を作る。

②記者派遣による話

- ・新聞作りのコツを知る。

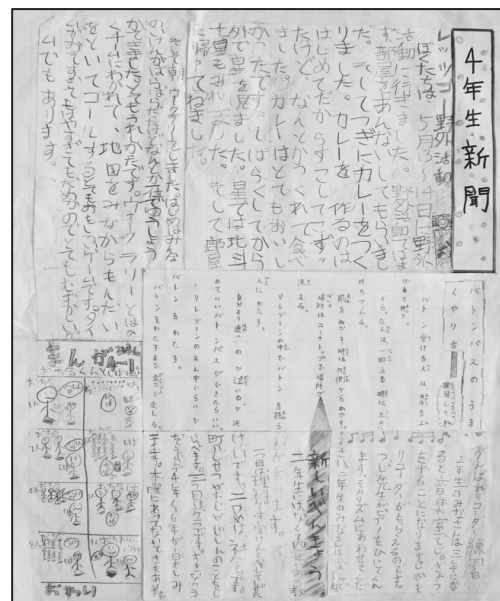
③単元「アップとルーズ」

- ・効果的な写真について知る。

①単元「新聞記者になろう」

まず、新聞そのものを知る学習を行った。初めて新聞をじっくり見た子が大半であった。なかには新聞を定期購読していない家庭もあ

班で作った新聞



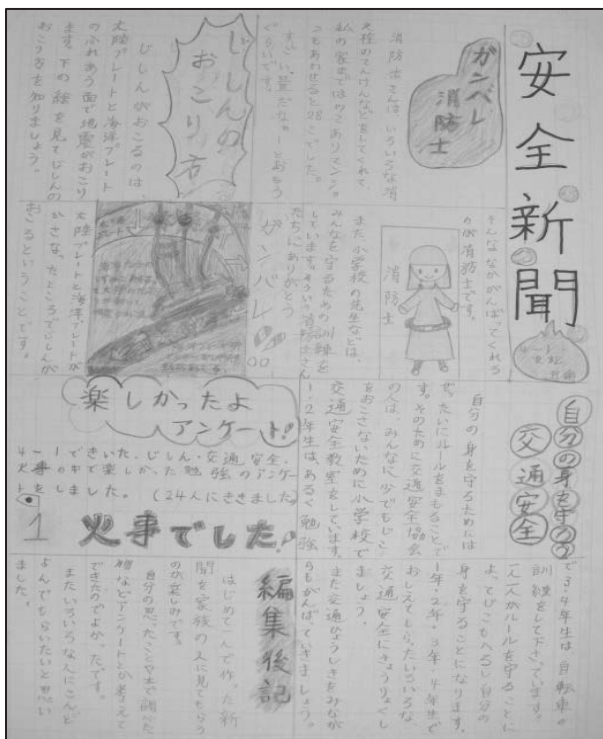
手は2年生。ひとりが1つの記事を担当して班で1つの新聞を作った。割り付けや取材方法を話し合って決めた。相手が関心のありそうな記事を選んだり、言葉やイラストを考えたりした。2年生からのお礼の手紙も来て楽しい活動になった。

②記者派遣による話

9月に行われた巡回セミナーで朝日新聞社の記者に、子ども達が作成した夏休み新聞を使って、よりよい新聞作りについての話をしてもらった。子どもの新聞の拡大したものを一緒に見ながら、良い点と改善点を具体的に教えてもらった。

- ・見出しをより工夫する。見出しの言葉・文字の形・色などを考え、読み手を引きつける。
- ・写真やイラストなどを効果的に使う。伝えたいことがより正確に伝わるようにするために大切な方法である。
- ・誤解をまねくような表現や相手を傷つけるようなことは書かない。等

社会科新聞



この後、社会科新聞、冬休み新聞、福祉新聞等の新聞作りを行った。

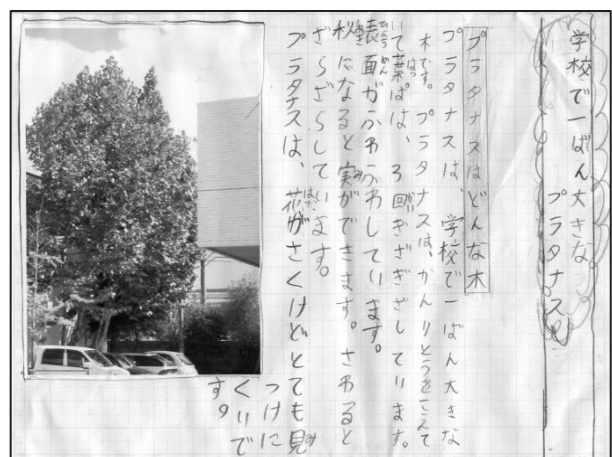
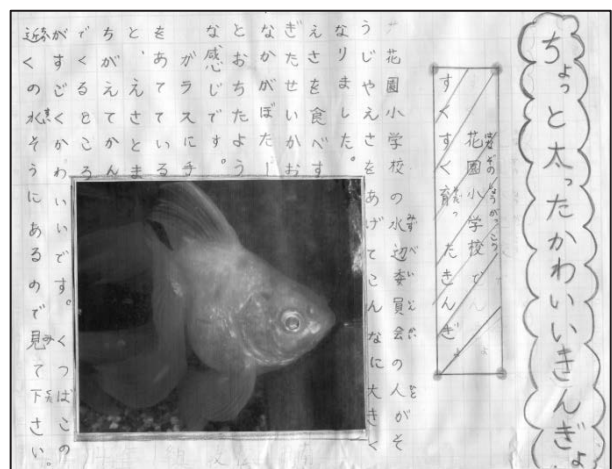
③单元「アップとルーズ」

巡回セミナーで写真の大切さを教わったことを受け、この单元では効果的な写真について学習した。

まず、一般紙から気に入った写真を切り抜き、それを見て何が伝えたいのか話し合った。その後文章を読み、記事に込められたメッセージを確かめた。

次に、自分で伝えたいことにぴったりの写真(アップかルーズを意識した写真)を撮り、記事を作ることにした。テーマは「花園小学校のおすすめ」。伝える相手は今回も2年生とした。

アップとルーズ活用の写真記事



(2) 理科での取り組み

指導計画

- ① 単元「四季の自然」
 - ・季節の変化と動植物の変化について知る。
- ② 単元「月や星」
 - ・月や星の動き方を知る。

①単元「四季の自然」

気温と動植物との関係を日々の観察を通して学習した。毎日気温を計ることと自分の木を決めてその変化を観察した。また、四季折々の花や虫・鳥も調べ、記録した。今年度の朝のスピーチは「発見したこと」をテーマとしていたので、自然の発見を話題にすることがほとんどであった。スピーチに絡ませて発展話題として、新聞に載っている季節を感じさせる記事を活用した。その結果、さらに自然を見る視点が広がり新たな発見をすることが増えていった。

②単元「月と星」

四季ごとの星座の観測や動きは星座早見を使っての学習と観望会を開いて保護者と共に観測した。月の動きは9月の中秋の名月に焦点を合わせて、1カ月間見え方と気づいたことの記録をつけた。同時に観察記録の他に新聞に掲載される月の出、月の入、月齢等のデータの切り抜きを貼っていった。子ども達は毎日取り組むことで、月の動き方や月の形によって見える時刻や方位などが違うことなどを理解することができた。授業では1カ月間の記録ではあったが、関心を持った子は8月にさかのぼって月のデータを集めたり、10月も続けてデータを取ったりと自主的に学習を継続した。また、月の出の時間も分かるので観測もしやすくなった。昼間出ている月も

よく見つけるようになり、昼間に子ども達と共に動きを観測することもできた。新聞には日の出、日の入の時刻も書いてあるので昼間の時間の長さの変化を体感と結びつけて考えることもできた。家庭で新聞を購入していない子は提供していただいている新聞を使わせた。

月の切り抜き

月の観察記録

月の観察記録を書こう(忘れないうで続けよう)							
日	9月10日	9月11日	9月12日	9月13日	9月14日	9月15日	9月16日
月名	アキ						アキ
形							
場所	家のまわり	家のまわり	外	家のまわり	家のまわり	家のまわり	家のまわり
時間	6時44分	7時11分	6時48分	6時12分	6時40分	6時41分	6時50分
感想	おもしろい	おもしろい	おもしろい	おもしろい	おもしろい	おもしろい	おもしろい
日	9月17日	9月18日	9月19日	9月20日	9月21日	9月22日	9月23日
月名							アキ
形							
場所	ベランダ	ベランダ	ベランダ	ベランダ	ベランダ	ベランダ	ベランダ
時間	6時30分	6時30分	6時45分	4時40分	6時45分	6時33分	6時50分
感想	おもしろい	おもしろい	おもしろい	おもしろい	おもしろい	おもしろい	おもしろい

新聞の切り抜きと継続観測により、月を大変身近に感じていたので、中秋の名月の新聞記事に強い関心をもって読んでいた。

6月にははやぶさが地球に戻ってきたことを子ども達も知っていたので、各紙の記事を切り抜き、宇宙の広さやや科学者の想い、はやぶさの凄さを話題にした。

(3) その他の取り組み

○道徳教材としての活用

新聞には人として逞しく生きる姿や優しさにあふれた行為などの記事がある。また、読者の投稿欄には社会のルールや家族を大切に思う話題など、心動かされたり考えさせられたりする話が多々ある。朝の時間や道徳の時間に可能な限り取り上げた。

○新聞感想文コンクールへの参加

自分が気に入った記事を選び、感想や意見を文章にまとめた。原稿用紙に書くだけで精一杯の子どもが多かったが、中には家族の意見や自分の考えを入れてまとめられた子もいた。今後は自ら調べたことを取り入れた文章を書かせたいが、今回はじっくりと一つの記事を読み、考えることができたのは良い経験になった。

3. おわりに

(1) 成果

成果の一つ目は学習したことや経験をしたことを新聞形式にまとめることに楽しく取り組めたことである。その際に、記事として組み立てる構成や見出しや写真、絵等について、読み手を意識して工夫することができるようになった。

二つ目は、家で新聞を見る機会が増えたことと答える子が出てきたことである。新聞の提供が終了したとき、子ども新聞を読み続けたいと残念がる子どももいた。また、新聞が家がない子が新聞というものに接することにより、新聞はおもしろいものだと感じてくれたことである。

そして三つ目は、新聞の記事を話題に出来るようになったことである。5年生の国語で新聞記事を元にスピーチをする単元があるが、

抵抗なく取り組めるであろう。何よりも、社会の出来事に関心を持ったことは視野の広がりになった。

(2) 課題

最も大きな課題は一般紙を読むことが苦手な子がいることである。これは漢字が難しかったり言葉が分かりにくかったりして内容が理解できないためである。教材として活用する場合は、教師が範読し、子ども達が理解できるように内容をかみ砕いて説明することができるが、一人でとなると難しい面がある。

また、今回のように子ども達が新聞を校内で自由に手に取ることが出来る状態であれば活用が継続しやすいが、家庭での自発的な活用の継続はなかなか困難である。

(3) 今後に向けて

課題はあるものの、今回の実践は新聞の教育現場での活用の可能性を広げ、子ども達の気付きや知的欲求を刺激する材料となった。また、6紙を同時に並べて見せることで、各紙ごとの視点の違いや多面的な物の見方があることに気付かせる機会にもなった。

その一方で、課題解決の方法としては教師が自ら教室に新聞を持ち込み、日常的な活用を目指すことが必要である。また、図書室に子ども新聞を置いたり、掲示したりする方法も効果的であると思われる。

「研究テーマ」

子どもたちの「活用する力」を向上させるために ～「NIE」実践指定校のメリットを学習に活かす～

たつの市立小宅小学校 教諭 石堂 裕

1 はじめに

平成19年度に実施された全国学力学習状況調査の結果を受け、「活用する力」の育成に向け、本格的に新聞を取り入れた活動に取り組んで、今年で3年目となる。昨年度までの研究の経過は下記のとおり。

【平成20年度】

県の学力向上助成金で子ども新聞を購入し、4年生以上が朝の学習タイム（活用力向上タイム）に活かす。

【平成21年度】

NIE実践校に指定され朝の学習タイム、教科学習での新聞活用について研究する。

ては、学年部の教員が交代で作成している。前年度までのモデルがあるため、若い教員でもスムーズに問題作成にあたることができている。



2 実践指定2年目の取り組み

21年度末の職員によるPDCA評価から、新聞を活用した学習について効果的であったと報告された。それをもとに、4月、学力向上委員会において、「活用する力」の向上に向けて、平成22年度の4つの柱を確認した。

- 朝学習での活用力向上タイムの継続
- 総合的な学習の時間での活用
- 新聞利用と教科内容とのスムーズな連携
- 委員会（情報委員会）での新聞の活用

（1）朝学習での活用力向上タイムの継続

週に1～2日、朝の学習タイムにおいて新聞記事をもとに文章問題を作成し、子どもたちに提示して3年目となる。問題作成に関し

設定時間 15分（8:30～8:45）

- 1、2年：月、火（読書量確保のための読書タイム）水（読み聞かせ、漢字）木、金（活用力向上タイム）
- 3年～6年：月、火（読書量確保のための読書タイム）水（音読、漢字）、木、金（活用力向上タイム）

（2）総合的な学習の時間での活用

学習指導要領改訂の柱に「学習活動における言語活動の充実」がある。NIE実践指定校になると学習活動への記者派遣していただけることを活用することで、より効果的に言語活動の充実を図る学習ができると考えた。6年生の取り組みを事例として紹介する。

地域の歴史「語り人」プロジェクト（6年生）

このプロジェクトは、小宅地区にまつわる歴史的な事柄を語り継ぐ書物、人が少ない現状を知り、市の文化財課や地域のお年寄りの協力のもと、地区に残る文化財を調査し、地域のみなさんに紹介することを通して、地域の歴史にふれることを目的としている。

では、ここからN I Eに関する内容を中心に紹介する。（全活動の記録は web にて公開中）

①取材ポイントを記者から学ぶ



この活動で、冊子づくりをすることを決めた子どもたちは、よいものをつくるため、プロの技を学ぼうと考えた。そこで、神戸新聞社N I E推進室から記者派遣していただき、記事を書き方と写真の撮り方のポイントを学習した。主なポイントは次のとおり。

『読者のことを考えてつくろう』

正確で読みやすく、分かりやすいことが大切。

『新聞づくりのポイント』

①企画：「何を」「どのように」「どこに」「どれくらいのスペース」で載せるか考える。

②原稿書き：取材の集め方が大切

『写真の撮り方』

①動きのある写真をとろう

②縦と横のむきで撮る。

③遠近法をうまく使う。

『下調べを忘れずに』

取材する相手や事柄について、事前に調べよう。

取材で何を聞くかまとめておくことが大切。

（子どもたちのまとめシートの一部より）

子どもたちは、上記の取材のポイントをもとに、地域の方への聞き取り調査をし、記事内容を集めた。数少ない資料をもとに下調べをして質問した子どもたちも多く、記者派遣による講習会が好影響をもたらした。

②小見出しのポイントを伝授していただく

原稿を書く段階で最も子どもたちが苦戦したのは、小見出しの付け方だった。



ポイントを知ることが大切だと考え、神戸新聞社たつの支局の記者さんのアドバイスを受けることにした。

小見出しづくりのポイント

- ①記事を適切に表現すること
- ②10字以内でつくること
- ③言いたいことを入れること
- ④むだを省くこと
- ⑤三段でもよいこと

まず、上記のポイントについて具体例をもとに説明を受けた後、グループごとに小見出しを考え、「〇〇について」という表記がなくなり、ポイントをおさえた小見出しになったように思う。

【主な小見出しの例】

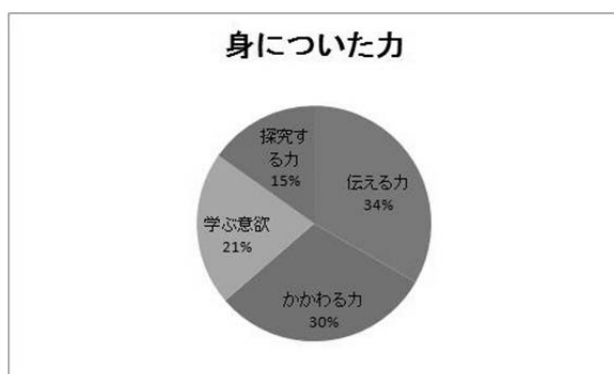
- ・ 火事！焼失をまぬがれた仏像
- ・ 播電の意外な秘密
- ・ 九州までの一本道！

【子どもたちのふり返しカードから】

小見出しの付け方がこんなふうになっていたとは知りませんでした。記者さんのおかげでいつもなら適当につける小見出しが変身できました。短い言葉で伝えたいことを書くことの難しさを実感しました。

この方法は、社会科のレポートや国語の作文にいかせそうです。最後までアドバイスをくださった記者さんに感謝しています。

上記の感想から、記者によるアドバイスが、子どもたちの心に好影響を与えたことが分かる。このような機会が子どもたちの書く力を伸ばすように思う。



上記は単元終了後にとった調査である。意欲的に伝えようとする気持ちがあることが分かる。

(3) 新聞利用と教科内容とのスムーズな連携

①新聞の読み比べによる効果

数社の新聞が同じ日に届くことは、記事の読み比べをする上で、たいへん効果的である。

(この取り組みは、4年生から行っている) 同じ記事内容でも、新聞社によって小見出しが違ったり、使用する写真が異なった角度から撮られたりしている。こういう気づきによって、子どもたちは記事が読者を意識していることを理解できた。

②自主的な辞書引きが目立つ



新聞記事は、子どもたちに読める漢字、分かる意味で構成されているわけではない。本校は3年生以上のどのクラスも教室後ろに自分の辞書を置いている。その辞書を使って自主的に言葉や漢字を調べる子が増えた。これは学習の学び方の基礎ともいえる行動である。回を重ねるごとに、辞書引きへの意識が増えていることが分かる。前学年から継続しているからこそ力となっているように思う。

③国語の教材と関連させて

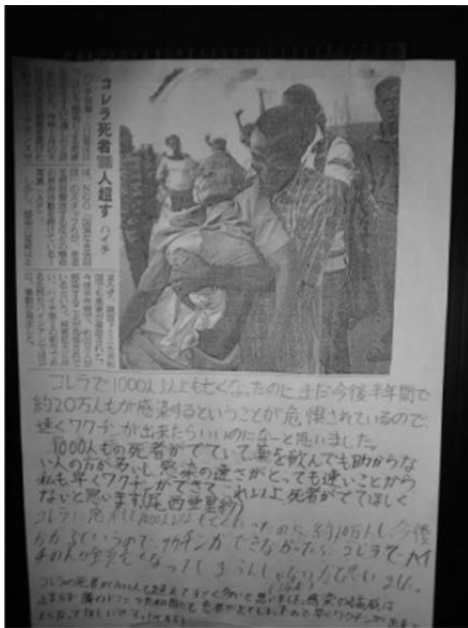


教科内容を分析すると、新聞記事をうまく扱える内容が多くみられる。例えば、6年国語「平和のとりでを築く」の発展として学習する「自分の考えを発信しよう」の単元は、それにあたる。

この単元では、平和に関する資料を集め、

自分の考えをまとめ、発信するというものである。グループごとに、平和や紛争に関する記事集めをしたところ、子どもたちは毎日のように平和や紛争に関する記事が載っていることに気づく。自分たちの生活とはかけ離れた生活をする人々の記事に戸惑いを見せる子どもたち。インターネットや図書資料とは違った「連続性」を意識させるには、新聞が効果的である。

選んだ記事をもとにコメントを書き、グループ交流をしたり、掲示板にはり、クラス全体交流をしたりすることで、子どもたちの平和に対する意識が変わってきた。また意見交流会は、新聞記事が理解しづらい子どもにとっても、友だちのコメントや発言によって理解するきっかけとなるので効果的であった。



④社会科の歴史学習と関連させて

今年は沖縄の基地問題が新聞に数多く記載された。このような歴史の学習内容と関連する記事を扱うことで、子どもたちは身近におこっている問題が授業で習う学習内容を結びつけられるようになる。意見交流会を実施したところ、日米安全保障条約と基地問題との

つながりにふれた発言が多く見られた。

(4) 委員会（情報委員会）での新聞の活用



本年度は、より多くの子どもたちに新聞記事にふれてもらおうと情報委員会での活動に新聞記事の紹介を取り入れた。子どもたちが選んだおすすめ記事にコメントをつけ、掲示板にはることで、単に新聞をはるより読み手が増えたように思う。作成する子どもたちも読んでもらえる意識から、記事を工夫するようになった。

3 おわりに

実践指定校に選ばれたことで、数社の新聞の読み比べ、記者派遣など、子どもたちのニーズに合った学習を構成することができた。この積み重ねが子どもたちの「活用する力」を伸ばすきっかけとなっている。本年度の全国学力学習状況調査のB問題も、はじめて全国平均、県平均を上回ることができ、大変喜んでいる。今後も子どもたち一人一人の「活用する力」を伸ばせるよう実践を深めたいと思う。

「研究テーマ」

新聞を通して社会とのつながりを広げるとともに、よりよい表現力を育てる ～楽しい新聞・広がる世界～

朝来市立梁瀬小学校 教諭 和田康平

1. はじめに

本校は、平成21・22年度にNIE (Newspaper in Education) 実践校となり、本年度は一般日刊紙6紙(読売・日経・産経・神戸・朝日小学生新聞・毎日小学生新聞)を、6月から10月の4カ月(8月は除く)購読した。2年目となり、子どもたちが新聞に親しむとともに、授業への活用にも力を入れ、社会とのつながりをより深く実感できるように実践を進めていった。



2. 学校・児童の様子

本校は、全校児童229名で外遊び好きの活発な児童が多い。一方で、朝読書にも取り組み、じっくりと活字と向き合うことにも慣れている。図書室前の新聞掲示も充実し、立ち止まって新聞記事や記事の内容と関連した地図などをじっくりと眺める児童も増えてきた。学校に新聞があることが当たり前となった2年目、教師も新聞をどう活かすか試行錯誤を繰り返していった。

○二年生

朝日新聞にある「しつもん! ドラえもん」のクイズの答えをみんなで探して、その答えを切り取り、クイズと答えをクラスみんなで模造紙にまとめた。クイズの裏を答えにして、みんなめくってクイズを楽しんでいた。



3. 各学年の取り組み

○一年生

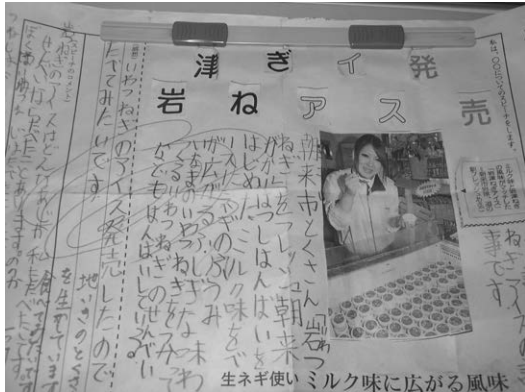
韓国の小学生と一緒に新聞を使つかぶとを折った。折り方は2年生が教えてくれた。新聞でつくと頭にかぶることができるので、韓国の子どもたちも照れ笑いしながら嬉しそうにかぶってくれた。できあがったかぶとにマジックで好きな絵をかいたり、お互いの名前を記念にかきあったりした。

これをきっかけに、クラスの児童の中には、同じように新聞からクイズを作った児童や動物の写真を集める児童、4コママンガを集める児童等、新聞に興味・関心をもった児童が増えた。また、新聞の記事で「みんなの前で読んで」と言う児童もあらわれた。

意欲的にとりくんだ児童の様子から、今後も新聞を題材にした教材を児童に提供していきたい。

○三年生

3年生の児童にとって新聞を読むという活動は未習の漢字も多く難しい。そこで、新聞の中から興味のある写真を見つけ、毎朝のスピーチの題材として取り上げる活動を行った。最初は、児童にとって身近である生き



物についての内容が多かった。しかし、活動が続けるうちに、環境のこと、但馬地方のことなどの記事にも目を向けられるようになってきた。

二学期からは、スピーチメモに意見や質問



を記入する欄を設け、話題を広げるようにしている。新聞を開き、自ら記事を探すことが視野を広げる活動として効果的だったと考える。

○四年生

新聞を手にとらない児童が多い中、まずは、4コマ漫画を読んだり、但馬欄の記事に親しんだりすることから学習を進めていった。但馬欄は地元の地名が載っているのが親しみやすい。朝の会の日直のスピーチでは、但馬欄の記事を読み、自分の感想や意見を持つ姿が増えている。

授業では、国語科、社会科、総合的な学習の時間に新聞を活用した。国語科では、学校行事を行った感想を日記にまとめるのではなく、新聞の1面を参考にまとめた。新聞の1面には、新聞社名・発行所・日付・トップ記事の見出し・リード文・写真・編集後記等がある。事実を正しく伝えるためにリード文には5W1Hが整理されていることや、写真は記事に合ったものが使われていることに気づいた。新聞記事の形式を学習した後、自分たちの新聞作りに取りかかった。5月上旬に1年生歓迎遠足を行ったので、それぞれの遠足コースのことについて、社会見学後にはそれについて記事を作成した。5W1Hに気をつけながらリード文を組み立て、本文は、さらに様子が詳しくなるように作成していた。編集後記には、「友だちの新聞を読んで、違うコースの様子がよく分かった。」「新聞記事を作る難しさが分かった。」と感想を書いていた。



社会科の授業では、新聞記事から地名を探し、地図帳で引き場所を確認する学習を行った。特に但馬欄の地名は馴染みがあり、索引を活用しなくても探し当てる子どもが多かった。この学習で、一つの面には多くの場所の情報が埋めつくされていることが分かった。また、単元「わたしたちの住んでいる県」で、兵庫県各地域の特色や気候の様子について、新聞記事から特産物や伝統工業を知り、学習を進めた。

総合的な学習の時間では、新聞は資源回収されていることから、資源として見直すことをした。新聞は、読んで捨てるのではなく、資源回収に回したり、書写の時間に活用したりとくらしの中で、別の活用もしていた。一面に大きくカラーで広告が載っている面を選び、エコバックを作成。机の横にかけ文房具を入れている児童もいる。



○五年生

新聞から自分の感動した記事やおどろいた出来事の記事を切り抜き、感想を書く活動を続けている。「〇〇なニュース」というようにテーマを決めて取り組んだり、自分なりの見出しをつけ、記事の内容をより深く読み取ったりしている。但馬地域だけではなく、日本や世界の社会の出来事を広く知ることができたり、様々な人々の苦労や努力を感じたりすることができる。新聞記事が子どもたちの日常会話の話題に挙がっていることもある。また、掲示したり友達の考えにコメントをつけたりすることにより、友達の選んだ記事や友達の考えも知ることができ、より幅広く社会を見ることができる



と考えている。さらに、どこで起こった出来事かということ把握し、日本地図に書き込むことにより、日本と世界、そして自分の住んでいる地域との位置関係も意識づけていきたいと考えている。

新聞の教材化については、社会科の授業で新聞記事を使った取り組みを行った。「農業・漁業・工業」など、テーマをしぼり学習の導入やまとめで扱うことにより、現在の社会状況を知る上で生きた教材として、また、子どもたちの身近な内容として有効に活用することができた。子どもたちの新聞の切り抜きにも、こうした社会とのつながりを自覚するような記事も増えてきている。

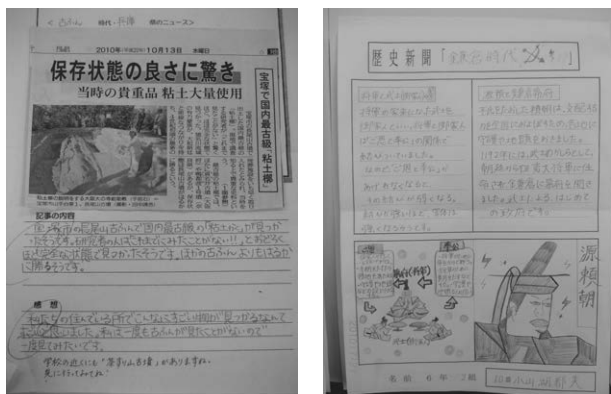


○六年生

朝の会で、新聞記事についてのスピーチをおこなった。記事を読んだのではなく、自分の言葉でかみくだいてわかりやすく説明をさせ、記事に対する感想も入れさせた。地域のニュースや、社会科や理科で学習したことに関する記事を選ぶ児童もおり、新鮮な話題がたくさん出てきた。

また、「歴史ニュース」として、歴史に関する記事探しもおこなった。発掘など地域の記事も多く、歴史を身近なこととして考える児童が増えた。また、同じ記事を見つけてきても、まとめ方の視点や感じ方が違うことを、児童自身が気づくことができた。

さらに、歴史学習で、1単元が終わるごとに1人1枚ずつ歴史新聞を作成した。5年生の時のNIE巡回セミナーで学んだことを参考に見出しや本文も工夫させた。新聞には、3つの枠を設け、物事の比較やイラストなど、児童が自由にまとめることができるようにした。イラストに説明を加えたり人物を比べたりと、学んだことを工夫してまとめる児童が増えた。



さらに新聞への関心が高まるように記事の掲示だけでなく、折り紙や画用紙で学校行事や季節などと関連がある装飾を掲示板に施した。また、新聞記事の内容からアンケートやクイズを行うことで児童も参加できる機会を作ることによって、図書室へ行く児童が増えた。



○各委員会

・保健委員会

保健委員会では、病気に関する記事や健康について書かれている記事を探し、保健室前に掲示している。例えば、睡眠についてや、マムシにかまれた時の応急手当てなど、全校生が体や心に関心をもてるように考えている。今後は、子どもたちが自ら記事を見つけ、感想なども付けて続けていきたい。

・掲示委員会

掲示委員会では、各新聞の但馬欄に注目し、地域の行事や生き物、スポーツ記事などを掲示した。委員が記事を選び、記事を要約したり見出しをつけたりと、全校生が但馬のことをもっと知ることができるように考えて続けている。

六社の新聞の中から、児童が興味を示すワールドカップなど時事的な内容やノートの正しい使い方など普段の学習に関すること、端午の節句や節分など季節の行事などジャンルを問わずに児童にとって身近な内容の記事を選んだ。

4. 成果と課題

「新聞を通して社会とのつながりを広げるとともに、よりよい表現力を育てる」をテーマに実践してきた2年間。「伝えたい」気持ちを大切に新聞記事を紹介したり、感想を交流したりする学年や、兵庫県内の記事から特産品や伝統工業を調べる学年など、多様な取り組みができた。また、地元の新聞記者の方とのつながりもでき、街で取材中の記者さんを発見し、逆に取材してくる子どももいるほどとなった。新聞そのものへの興味がわいてきた低学年、国内外の出来事と自分とをつないで考えることができるようになり、新聞から見える「現代社会」への関心が高まってきた高学年を見ると、実践の成果を感じる。

互いに伝えあい、認めあい、高めあう子の育成

～新聞に親しみ、活用しながら「ことばの力」を育む～

篠山市立岡野小学校

教諭 崎田 真宏、山上 徳義、河南 有華、和田 聡子

1. はじめに

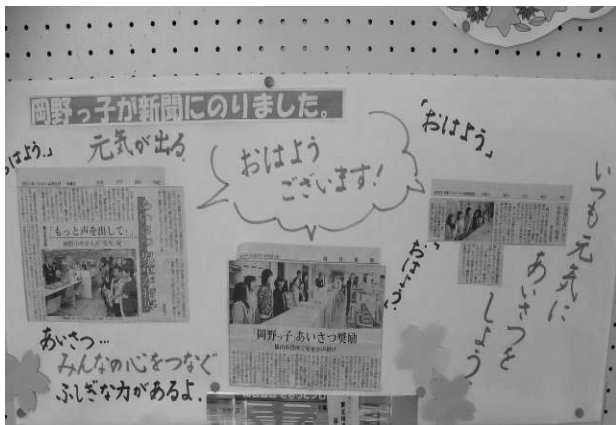
本校は「互いに伝えあい、認めあい、高めあう子の育成」を研究テーマとして、国語科を中心に研究を進めている。

その中で、NIEの取り組みとして、新聞を活用しながら、「ことばの力」を育み、研究テーマに迫っていけるような実践を目標とした。

2. 実践の内容

(1) 新聞に親しむ環境作り

○自分たちのことが載った記事コーナー



自分や友だち、知っている人が載った記事を見るのは、やはり大変興味のあるところである。学校側も何かイベントがあるごとに新聞社に報告し、よく取材に来てもらっている。

○新聞コーナー

図書室前に新聞コーナーを設けた。

今年度は、実践学年のニーズを事前に調査し、ほしい記事がたくさん載りそうな時期を選んだり、子どもにも親しみや

すい「子ども新聞」を入れてもらったりと、工夫した購読を実施した。



経済新聞などはなかなか難しく、読んでいる子は少なかったが、大きなニュースや関心のある出来事には、低学年の子でも立ち止まって読んでいる姿をよく見かけた。

また、日にちの過ぎた「子ども新聞」を3年生の教室に置くと、新聞コーナーに足を運ばなかった児童も興味深く見ていた。

(2) 4年生の実践

① 熟語集め

近頃、各新聞において、子どもが興味を持ちながら、新聞に親しめるような紙面作りが工夫されている。その中で、「ポケモンの熟語」がある。

新聞の中から「ポケモンの熟語」を見つけ、スクラップに貼っていたり、日番が毎日熟語を紹介したりしている。子どもの中には、それをノートに書き留めて熟語を覚えている子もいる。また、学習の中や日

常の会話の中でも、覚えた熟語を使っていることがよくある。ただ、ポケモンのキャラクターに気を取られ、熟語に目がいかない児童もいたが、新聞に親しむという点では、十分に意義があることだ。



②記事集め

興味のある記事の切り抜きを集めている児童がいる。それは、「四季」という毎日掲載されている記事であったり、遺跡の記事であったり、興味のあるスポーツの記事であったりといろいろである。

児童は、毎日、教室に新聞が届くのをとても楽しみにしていて、集めた記事をみん



なで読み合ったり見せ合ったりした後、とても大切に保管している。「熟語集め」から始まり、今は、日本の記事や世界の記事へと幅広く興味を持っている。

③社会科での活用

社会科で、都道府県の学習をした時に、新聞を活用して都道府県のニュースや情報を交流した。

自分で担当する都道府県の記事を見つけ、読むことで、その都道府県を身近に感じ、さらに理解を深めることができた。

そして、見つけた記事を紹介し合い、感想なども交流した。



(3) 5年生の実践

国語「ニュースを伝えあおう」

1. 実際のニュースを見て、分かったことや気がついたことをノートにメモをする。
2. その中から、聞き手に分かりやすく伝える工夫を探す。

- ・アナウンサーとキャスターの違い
- ・テロップやフリップの活用
- ・原稿の読み方や声の大きさ、スピードなど

3. 班ごとに分かれて、「運動会の組体操」や「校長室の不思議」など、聞き手に伝えたい内容を決めて取材をした。
4. 聞き手に分かりやすく発表するために、班ごとに何度も練習したが、さらに良くするためにNIEの記者派遣を依頼し、9月29日(水)、発表する内容を時事通信社の藤田記者に聞いていただいた。

5. N I Eの記者による指導

①クラス全体で、基本的なニュースの

- ・誰に聞いてもらうのかをよく考える。
- ・5W1Hを大切にしておまめする。
- ・まず、伝えたいことをはじめに話す。
- ・声の大きさ
- ・話すスピード

伝え方について話を聞く。

②班ごとに、発表する内容を藤田記者に聞いてもらいコメントをもらう。

実際に取材されている方に直接指導してもらおうことで、子どもたちはほめてもらったところはすごく喜び、訂正すべき点は話を聞きながら聞いたり、ノートに詳しくメモをしたりすることができた。

6. その後の発表会では、声の大きさや話の内容だけでなく、フリップの見せ方やアナウンサー、キャスターなどの役割分担も工夫して聞き手も集中して聞く姿が見られた。

実際に取材をしている記者の方から、プロの視点による指導は、子どもたちにとって新鮮で、素直に話を聞く姿が見ら



発表会の様子

れた。また、学んだことをいかした発表会では、各班様々な工夫が凝らされていた。

この学びを、その後の国語の授業だけでなく各教科、児童会・委員会活動などで生かすことができた。

(4) 6年生の実践

6年では、国語科や社会科、総合的な学習の時間において、新聞を活用した学習を行った。その中で、本報告には、総合的な学習の時間に行った「平和新聞づくり」を紹介する。

1. 単元の流れ

「平和新聞づくり」の学習は、平和学習の一環として、以下のような段階を経て行った。

- ① 被爆体験者の方の記事を読み、書き手が一番伝えたかったことを考え、話し合う。
- ② 被爆体験者の方の記事を読み、被爆体験者の方が一番伝えてほしいことを考え、話し合う。
- ③ メモをとりながら被爆体験者の方の講話を聞く。また、事前に聞いておきたい質問をまとめておく。
- ④ 講話メモをまとめながら、被爆体験者の方が一番伝えてほしいことや書き手として一番伝えたいことをまとめる。
- ⑤ 被爆体験者の方の記事の構成を考え、自身が書く「平和新聞」の構成にいかす。
- ⑥ 見出しを考える。
- ⑦ 記事を書く。



朝日こども新聞より

2. 成果と課題

I 成果

- 書き手は、語り手の話す言葉、そのまま伝えるだけでなく、その人の心情や生い立ちなどを考えなければならぬことに気づき、書くことに対する責任の重さを実感することができた。
- 被爆体験者の方の新聞記事をモデルとして提示することにより、子どもたちにとって工夫するポイントや構成を知ることができた。また、見出しや記事の内容、文章表現に工夫が見られた。さらに、講話を聞く視点をつくることができ、意欲の喚起にもつながった。

II 課題

- 同じ新聞記事をモデルとして取り上げたため、できあがった新聞の構成が非常によく似ていた。
- 新聞をとっていない家庭が増えてきており、各自で記事を探したり、スクラップをつくったりする活動が取り入れにくかった。



3. おわりに

今年度は、2年目ということもあり、教師も児童も新聞を意識した学習、生活ができた。

教師においては、新聞を読むたび、児童にする話の中で、また、各教科の学習で何か利用できることはないかと、意識できるようになった。4、5、6年の実践学年の教師だけではなく、低学年の教師も新聞の活用を意識できていたので、児童全体に良い影響を与えられた。

児童においては、新聞コーナーに自然と足を運び、パラパラと新聞をめくる児童が確実に増えたことがある。読む内容は、個人差はあるが、マンガ、テレビ番組、スポーツから、自分たちのことが載った記事、地域の話、そして世の中の出来事で興味のある記事へと、広がっているようである。

今年度は、子ども新聞も入れていただいたが、やはり子どもにとっては親しみやすいらしく、低学年の児童も読んでいる姿が多く見られた。また、新聞各紙の紙面が、子どもにも読みやすいように変わってきていることも、児童が新聞に親しむ大きな要因になっている。

授業での新聞の利用という点では、前記のとおり、内容の濃い実践が行われた。

23年度は、新学習指導要領の実施により、高学年の国語科において、新聞を利用する学習が正式に導入される。その意味でも、今年度の実践は有意義なものとなった。



「研究テーマ」

新聞を活用して、表現力を高めよう ～読む力・考える力・伝える力を育む～

淡路市立中田小学校 教諭 南 志乃婦

1. はじめに

昨年度は、子どもたちが新聞に親しむための場作りを中心に取り組んだ。恒常的に興味・関心を持たせるまでにはいたらなかったが、教師側の働きかけで新聞という情報源のよさは子どもたちも理解できたと考える。

今年度は新聞を活用することの楽しさ、おもしろさを体験できる授業づくりに高学年を中心にチャレンジしている。子どもたちが様々な活動を通して、表現力が高められることを願い取り組んできた。

級で管理するようにした。これでスクラップ作りなど切り抜き活用がしやすくなった。

② 広報委員会（児童会）の記事紹介

小学生新聞を購読計画に入れ、広報委員の子どもたちが交代で、気に入った記事の紹介を職員室前の掲示板で行った。小学生新聞は低学年の子どもたちにも読みやすく編集されているので、低学年にも人気があった。

2. 新聞をより身近な存在に

① 新聞閲覧コーナーの設置

新聞記事の写真や自分の好きな記事だけでも目を通せるように、4、5、6年生の教室がある3階廊下に新聞各紙が自由に閲覧できるコーナーを設置した。また、読み終わった新聞を各学年が利用できるように、4年〇〇新聞、5年□□新聞、6年△△新聞を学



③ スクラップブック作り

5、6年生は授業前の時間を利用して、週に数回スクラップブック作りに挑戦した。興味のある記事や友だちに紹介したい記事を切り抜き、コメントをつけ、ノートやファイルにとじていく。理科の授業でも自然環境に関わる記事をスクラップにした。

回数を重ねる度に、記事探しも上手になり、新聞をめくる姿も堂々としてきた。



④ 「ちょっといいお話コーナー」

今年度も学校に届いた新聞から、地域の身近な話題、他の小学校の活動紹介、生き物やスポーツ等子どもたちが興味を持てる記事を選び、そのコピーを掲示板に張り出した。淡路市内の小学校の紹介や動物、ワールドカップサッカーの記事には注目が集まった。



3. 新聞を活用した授業実践

【5年生の取組】

○新聞記者派遣事業 「取材について学ぶ」

地域の人に取材をするため、事前学習として新聞記者授業をお願いして、取材とは何なのか、どのように取材を進めるのか、取材をするときに気をつけることは何かなどの点について教えてもらった。記者自身の体験から、どのように取材をし、それがどのような記事になるのかを聞いた子どもたちは、興味を持ってその記事を読んだ。

その後、実際にいくつかの質問を考え、その場で新聞記者を相手に取材のシミュレーションを行った。子どもたちは、指導されたことをもとに堂々と取材し、それを学級新聞としてまとめた。

普段、実際に取材活動を行っている記者の方に教えてもらえるとあって、子どもたちは大いに喜んだ。そして、取材についての疑問やそれまでに書かれた新聞記事についての質問を記者の方にぶつけ、その答えから新聞記者の報道にかける熱い思いを知ることができた。

また、実際にまとめる活動では、プロの新聞記者にも読んでもらえるということで、昨年度に指導を受けた割り付けの方法や見出しの付け方を思い出しながら班で相談する様子が見られ、継続することの大切さを実感した。



「取材を体験する」

総合的な学習の時間に、子どもたちは米作りについてグループごとに調べてきた。地域で無農薬の米作りに取り組み、子どもたちにも米作りの指導をしてくださる木村氏に、それぞれのテーマに沿って取材を行った。事前に何度も練習をして、質問の意図が正確に伝わるにはどのような聞き方がいいのかを考えたり、声の大きさや話すスピードなどを考えて伝え方を工夫した。

以前に取材方法を学習したときに教えてもらった通り、自分の立場を伝え、取材の目的を明らかにし、その上で相手にわかりやすく質問をする。そして最後にお礼を言うという流れで練習を重ねるうちに、相手の目を見て話すことの大切さや礼儀を欠いてはいけないという、コミュニケーションの基本的なことをしっかりと身につけることができた。

実際の取材の際、新聞記者の方に同行してもらい、取材する上で気をつけることや取材内容を確認後、取材に立ち会ってもらった。

子どもたちは、練習とは違う相手に緊張した面持ちで取材をしていたが、その様子を見ていた記者の方に「上手に取材ができたね。」とほめてもらい自信をつけたようである。同じグループ内で、質問をする人、メモをとる人など役割分担を決めていたので、スムーズに取材ができてよかった。



質問の内容によっては、木村氏の専門外のことでわからないと言われたグループもあったが、最後まで礼儀正しく取材できたことで、身につけたコミュニケーション能力を発揮できたのではないかと思う。

取材した内容は、テーマごとに自分たちで壁新聞にまとめた。また、収穫祭の時に木村氏を教室に招いて、取材したことや自分たちが調べた内容を整理して発表会を開いた。木村氏から、「難しいことをよく調べたね。取材したことも上手にまとめられていて感心しました。」とほめられると、どの子どもも達成感と満足感にあふれた表情をしていた。

学習発表会では、総合発表「中田の米作り」と題して、自分たちの米作り体験や取材体験を元に発表の内容や方法を考え、自分たちの思いを保護者や地域の人の前で発表した。「わかりやすく伝える」という取材方法の学習で学んだことがここでも活かされていることを子どもたちは実感したようだった。



○身近にある情報を調べる

社会科の「わたしたちの暮らしと情報」の単元では、情報を伝えるための新聞の役割を考えた。一つの事件について複数の新聞を読み比べ、各新聞社がどのような視点で記事を書いているのかを探ってみた。

同じ事件を報道するにしても、統計的な視点や歴史的な視点をふまえて書かれていることなどから、その視点が少しずつ違うことを知り、読者として新聞の読み方について考えた。また、大きなニュースがない時には、各紙の扱う記事の内容やスペースの大きさに違いがあることにも気づき、全国紙と地方紙の役割について考えるきっかけとすることができた。



さらに、ふだん自分たちがよく読むスポーツ欄や地域欄以外に、新聞にはどのような内容の記事が書かれているのかを調べたところ、政治や国際、経済などについての記事にも目を留め、それらの記事が自分たちの暮らしとどのように関わっているのかなど、考えを広

げることができた。政治のニュースでは、政治家の発言が自分たちに直接関係はないようでも、それが両親の仕事にどのように影響するのか、そこから自分たちのくらしが変わるかもしれないということに気づいた。

「政治や経済はわかりにくいので放っておいたが、これからは意識して読むようにしないといけないと思った。」とか「全く関わりのなさそうなことでもどこかでつながっているかもしれないということがわかった。」という感想を述べる児童もいた。

表面的な内容を読むだけではなく自分たちのくらしとの関わりを意識して読むことで、記事の読み方が変わってくることを知り、新聞に対する見方が少し変わったようであった。特に、朝の新聞スクラップの活動では、この授業を境に経済や国際欄の記事をスクラップする児童が増えたのは、そういう意識の表れであると思う。

情報を伝える手段として、ニュース番組と比較することで新聞の良さや役割に気づくこともできた。

○子ども新聞記者として

神戸新聞社や読売新聞社の子ども新聞記者として、全員が何らかの形で取材をし、記事をまとめることができた。たくさんの記者の方から学ぶことで、より新聞を身近に感じることができたのではないかと思う。



【その他の取組】

○4年生社会では、クリーンセンターや浄水場、消防署を見学した内容を壁新聞にした。見出しや写真の使い方を子どもたちなりに新聞から学び、それを参考にグループ新聞を作成した。

○ワークシートの活用（4～6年）

「東京スカイツリー」、「エコで夏を涼しく」等子どもたちの興味関心にあわせたワークシートを活用し、総合的な時間の学習に役立てた。

○理科学習では、天気図と衛星写真、自校で継続的にとった記録温度計のデータとを組み合わせ、季節による天気図の特徴や気温変化の様子を学んだ。日々の天気図を比べられるように整理したことで、季節による天気図と特徴がつかみやすかった。

4. 終わりに

この2年できるだけ新聞そのものを子どもたちの近くに置き、記事紹介を続けた。また、新聞記者授業等を通して記者の仕事を理解し、記者本人との交流を深めていった。その取組が「新聞」という存在を身近に感じる一番の方法だったように感じる。

さらに授業を通して多くの新聞記事にふれたことで、「新聞に親しむ」という当初の目的は達成できたと考える。また本校のNIEの取組を何度も新聞記事として紹介してもらったことは、子どもたちの励みとなった。

2年間の活動により、私たち教師自身が新聞の情報源として価値を再認識し、新聞記事に関してアンテナを高くするようになったのは、今後の教育活動に大いに役立つことである。

子どもたちの記事を読む力、考える力は少しずつ育ってきている。しかし、伝える力はまだまだである。高学年中心の取組で終わっている一面もあるので、さらに全学年での取組となるよう工夫を重ねたい。

「研究テーマ」

新聞活用を通して環境問題への興味・関心を広げる

神戸市立本山第二小学校 教諭 小川 弘

1. はじめに

本校は平成22年度のNIE実践校として、1年目の活動のスタートを切った。児童数1300人足らず、普通学級36クラスに、なかよし学級2クラス、計38クラスの大規模校である。職員数が多く、様々な実践活動を行う人手が豊富である一方で、学校全体がまとまって一つの実践活動に取り組むことは難しいという面もある。

今年度はNIEの活動をしていくに当たり、高学年の子どもたちを中心に、国語や社会、総合的な学習等の時間を使って、新聞を資料として学習の中で活用した。また、新聞作りを通して他者にわかりやすく情報を伝達する能力を育てることも目指した。

本稿では6年生で取り組んだ理科・社会科の環境学習授業の実践を中心に、本校でのNIEに関わる実践の記録を表していきたい。

2. 実践の概要

(1) 新聞に親しませるための取り組み

①新聞の配置と取り扱いについて

10月から4カ月間、読売・産経・神戸・日経・朝日小学生新聞・毎日小学生新聞の6紙の提供を受けることに加え、毎日・朝日の2紙も学校予算で購入してきた。届けられたこれらの計8紙を玄関入ってすぐに位置する多目的広場に掲示した。5年生の子どもたちによる係活動として当日と前日の新聞が掲示された。

8紙の1週間分の新聞も掲示版下にストックしており、授業の資料として教員・児童がすぐに

活用ができる状態にした。

並べて掲示することによって、8紙の一面記事を一目で見比べることができる。一面の見出しを見比べただけでも、新聞社によって、記事の扱いが違うことにも気づかせることができる。子どもたちが新聞を通して、いろいろな視点から学ぶことはとても大切なことである。

また、学校便りやホームページなどで家庭に対して、新聞を通して親子で社会に関する話し合いをする機会を設けるように啓発もしてきた。



②新聞作りの学習を通して

子どもたちには、校外学習や単元のまとめなど各教科の様々な学習の場面において新聞を作る機会を持たせている。記事を書くに当たって、特に見出しについて意識をさせて新聞作成に取り組ませた。装飾と表現によって読み手の興味を引くよう工夫をさせた。グラフや絵・写真を挿入してレイアウトを考えるとともに読み手を意識した“わかりやすく興味を引く誌面”を構成する事にも留意して新聞づくりの学習をさせている。

③教科学習を通して

5年生社会科では、3学期に「情報」に関する単元がある。NIEの「記者派遣事業」を利用して実際に新聞記者から新聞記者の1日について学習した。新聞を作る際の編集の仕方や記事の書き方について、子どもたちが疑問に思っていることについて質疑応答して新聞への興味関心を深めるよい機会を持つことができた。

5年生理科の学習では、新聞の天気情報をもとに、実際の天気の移り変わりをレポートさせた。

6年生社会科では、3学期に「政治」「世界の国々」に関する単元がある。政治の世界や様々な国々の記事から取り出したニュースや資料を参照しながら、リアルタイムな出来事と教科書を結びつけながら学習を進めた。内閣改造のニュースが6年生の学習内容とタイミング良く重なり、授業に生かすことができた。

(2) 理科・社会の環境学習授業での実践

<実践の概要>

単元目標：環境に関する新聞記事を集め、分類することを通して環境問題に興味を持ち、理解を深める。

小学校の教科書には、環境学習に関わる内容が各学年、各教科に様々な単元と結び付けられながらたびたび登場する。6年生の理科や社会では、その総まとめとでも言うべき学習内容が学年末に位置付けられている。

教科書や教材を活用した、学校での環境学習や普段の生活の中で実感する環境問題に加え、児童がマスメディアの一つである「新聞」から得る最新の環境関連情報を通して環境問題について情報を得て考えを深めていくことは「いきいた教材活用」となると思われる。

新聞では話題となる環境問題が日々取り上げ

られており、近年ではCO₂削減に関連して太陽電池やエコカーの記事、今年度に関してはCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)の記事等が取り上げられることが多かった。

新聞を教材とすることによって「今」話題の環境問題を知り、具体的にどのような環境問題が存在し、新聞の中でどのように取り扱われているのかを知ることができる。「今」の問題を知ることを通して、環境問題の全体像をマクロな視点で見ることができるようになりたい。

また、本校では次年度に統計教育の兵庫県研究大会が開催される。今年度は研究大会へ向けての授業研究の取り組みもしている。統計教育の手法であるKJ法を用いて環境問題を分類することも含めて、新聞の環境関連記事を活用した授業実践に取り組んだ。

<実践の様子>

① 環境関連記事を集め、件名をカード化する

児童にはまず、新聞記事の中で現在、どのような環境関連の記事が取り扱われているのかを知るため、平成23年1月の新聞(読売・産経・



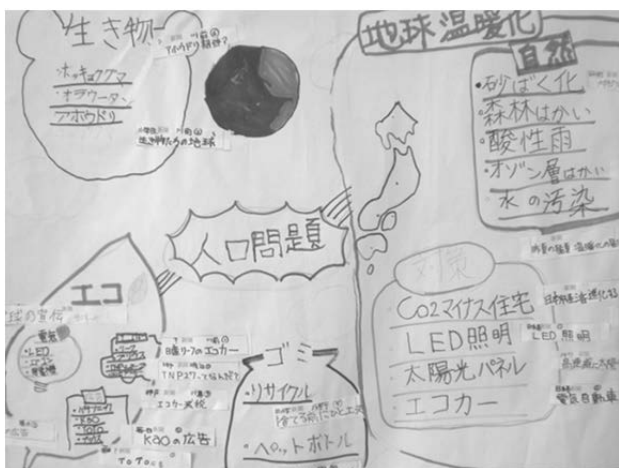
神戸・日経・毎日・朝日・朝日小学生新聞・毎日小学生新聞)の中から、環境関連の記事を切り抜かせた。切り抜いた記事は、教室の掲示板や模造紙に貼って掲示した。教室の背面と左側

面が環境記事の掲示で埋め尽くされるほどの切り抜きが集まった。毎日の新聞の中で環境記事が占める割合はそれほど多くはないが、8つの新聞から1カ月分を集めると環境問題に寄せられる関心の大きさがわかる。

次に、こうして集めた記事の見出しをカード化し、分類しやすいようにした。記事の見出しはそのまま使えるものもあるが、記事の内容を把握した上で適切な件名をつけなければならないような記事もあり、件名をつけることを通して、記事の内容を考える学習機会となった。

② 記事の件名が書かれたカードを分類する

できたカードを持ち寄って、各班ごとに分類をした。最初は各班は分類の基準を設定する事に戸惑った。子どもたちは4人で構成された各班で話し合いをしながら、分類の仕方について意見を出し合っていた。ある班は「広告」とそうでないものといった分け方をしようとした。面白い分類ではあるが、趣旨には反するので、社会の教科書に挙げられている環境問題の項目



を示唆することによって軌道修正を促した。本校が使用している6年生社会の教科書（大阪書籍）では、3学期後半の単元に環境問題が取り扱われており、「地球温暖化」「酸性雨」「オゾン層の破壊」「砂漠化」「熱帯雨林の減少」と、5つの項目を取り挙げて説明されている。

このようにして分類の仕方を考えながら、カードは班ごとに大きな用紙に貼られ、それぞれの問題の関連性を図式化する形で書き表した。このようにKJ法によってカードを活用して分類を進めていくと、環境問題全体を俯瞰することができるとともに、新聞を利用したことによって環境問題の「今」がクローズアップされる結果となった。

分類作業をした後に気付いたことを書いたワークシートには、温暖化を中心とした記事が多いことを指摘する児童が多かった。その中でも、LEDライトの記事やEV自動車の記事など、新しい技術に関する記事が多かったという意見が見られた。

分類されて模造紙に貼られたカードを俯瞰して見てみると、環境問題を引き起こしている主体は人間であることに気付く。同時に、「環境問題を解決していくのは誰？」と問いかけると、「人間」という答えが返ってきた。主に経済面や企業広告に、新しい技術が生み出されつつある記事が多数掲載されていることを子どもたちは読み取っている。また、本活動に活用した1月の8紙の新聞記事の中で、毎日小学生新聞の記事に偶然掲載されていた「人口問題」がつけられ、クラスで共有することができた。「人口問題」は環境問題の隠れた中心課題であることにも気づきを得ることができた。

③ 記事に解説と論評を加える

本学習の最後に、児童は自分たちが集めた記事の中から2つの記事を選んだ上で、大事な部分に赤線を引き、4年生に分かるぐらいの易しい文体で要約するという設定で記事を解説させた。さらに、記事に感想や批評を書き、自分の考えをまとめさせるという取り組みを行った。

小学校6年生にとっても、環境に関する記事

を読み解くことは容易ではない。読めない漢字
分かりにくい用語については辞書で調べたり、
人に聞いたりしながら解説と論評を進めた。自
分たちにとって分かりにくいことを、さらに2
つ下の学年に分かるように伝えるということを通
して、記事内容をしっかり読みとって理解する
よい学習機会となった。

3. おわりに

(1) 新聞というメディアの特徴に対する気付き

子どもたちが授業の最後に書いた「気づいた
こと」を読むと、環境に関係する記事が「多い」
と感じた子どもと、「思ったよりも少ない」と感
じた子どもがいた。「電気自動車の広告や記事に、
かなり多くの紙面が割かれていた」「太陽発電に
関する記事が多いと思った」などの意見もあつ
た。また、社会の教科書には環境問題を6つの
分類で挙げており、その中にはオゾン層の破壊
や砂漠化が取り上げられているが、1月の8紙
の記事にその2つについての記事を見つけれ
た児童はほとんどいなかった。実際、子ども
の中からも、「どうしてフロンガス問題は新聞
の中に入らないのかな」という疑問も出てきて
いた。新聞は「今」語るメディアであるため、「今」
は温暖化がクローズアップされている。

数カ月前には多く取り上げられていた生物多
様性条約（COP10）のニュースに加え、砂漠
化やオゾン層の問題もどうなっているのかをイ
ンターネットで調べてみると、ネット上にはた
くさんの情報が発信されていることが分かった。

新聞やテレビというメディアが「今」「旬」を
とらえているのに比べ、インターネットや書籍
には情報が蓄積されている。様々なメディアを
上手に利用して情報を収集し、バランスよく補
完していくことは、大切な情報活用能力のひと
つである。子どもたちが多様な情報収集の必要

性を感じることができたのはよい経験であった。

(2) メディアリテラシーの育成に関して

子どもたちは新聞・TV・インターネットな
ど、様々なメディアを通して社会の情報に接し
ている。新聞は子どもたちにとっては読解力が
必要とされて分かりにくいメディアである。今
回の取り組みで、環境関連記事を新聞から切り
取り、それをさらに分類するという「分ける」
過程を通して、子どもたちが環境に対しての情
報を新聞というメディアから得る機会になつた
のではなかと思う。「分ける」は、「分かる」の
第一歩である。メディアリテラシーの過程を【情
報の入手、理解、評価、作成、公開（活用）】と
いう段階で考えるとすれば、今回の取り組みは
入手・理解の段階が中心となった。

時間的な都合により、「2（2）③記事に解説
と論評を加え、伝える」の過程つまり、【評価、
作成、公開（活用）】は今回の取り組みの中
では弱かったように思う。全ての過程を一度の取
組みの中でこなすことは困難であるので、新聞
も含めたメディアに対するリテラシーの育成を
図っていく必要がある。情報教育の枠組みの中
で学年ごとの発達段階に適した形で教育課程に
位置付け、普段の授業の取り組みの中で、これ
からの情報社会に適応できる子どもを育ててい
かなければならない。

今年度のNIEでの取り組みを通して、学校
教育の中でメディアリテラシーを育成していく
必要性を考えさせられた。今年度より新しい学
習指導要領が実施され、国語や社会科、総合
的な学習を中心に、新聞を含めたメディアの活
用に関する取り組みはさらに重要となってくる。
今年度の反省を踏まえながら、来年度は学校全
体にNIEの実践を中心として、メディアリテ
ラシー育成の実践を広げていきたい。

言語力の充実を目指して N I E の活動から

尼崎市立長洲小学校

教諭

高品 玲

1. 基本的な考え方

本学年の児童は明るく活発であり、いろいろなことに関心を持ち進んで取り組もうとする児童が多いが、学習中の発言に関しては友達に任せてしまっている児童も多くいる。また、友達の意見を聞いたり、自分の思いを伝えたりすることができているとはいえない。このことから今年度の5年生は「話し手の意図を考えながら聞き、考えたことや伝えたいことが的確に伝わるように、話ができる子」と設定して取り組むこととした。

まず、自分の思いを表現する力を身につけさせたい。学年で毎月の詩を決めて朗読したり、教科書をみんなでそろえて読むことを繰り返したりすることで、クラスの中で声が出せる雰囲気を作る。また、朝の会でスピーチ、終わりの会では一日の振り返りを行い、人前で話をする機会を多く設定する。また質問や感想も言わせることで、楽しい雰囲気では話をすすめ、深めていくことにつながるようにしていきたいと考える。

次に、授業では、話の意図を考えながら聞き、それに対して自分の思いや考えを返していく力をつけていくために、「お話マスター」を掲示して、その都度、子どもたちに意識させるようにする。また、総合的な学習と絡めて、NIEにも取り組み、記事のまとめ方を学習し、自分の考えたことや伝えたいことをまとめることに生かしていきたい。また、語彙を増やし思いを伝える力を高めるために、朝読や図書の日、家庭での読書の宿題を多く設定し、本に触れる時間を多く設定する。

以上のような取り組みを行う中で、学年テーマを達成させたいと考える。

2. 実践記録

1 学期 声に出して伝え合おう「自分をアピールしよう」

【ねらい】

自分についてスピーチを行い、的確に伝えたり聞いたりする。

【取り組み】

自分が得意としていることで、自己アピールを行った。「初め」「中」「終わり」の構成を考えて、スピーチメモを作成し、スピーチするときの手立てとした。効果的に話すための工夫について考え、声の大きさ、速さ、間の取り方などについてお互いにアドバイスを行った。

2 学期 考えを伝え合って深めよう「どちらを選びますか ～討論会をしよう～」

【ねらい】

自分の立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合う。話し手の意図を考えながら話の内容を聞く。

【取り組み】

討論会の仕方を確認し、それぞれの役割の目的に応じて意見や考えをまとめて、討論会を行った。また、討論会に至るまで、手順を追ってワークシートに書き込みながら、根拠となる資料を準備し、テーマや立場を変えて行うようにした。子どもたちは意図的に取り組み、話し合うことを楽しいと感じていた。

3 学期 新聞記者になろう

【ねらい】

新聞の特徴を知り、記事の表現の仕方の良さを知る。伝えたいことの内容を考慮して、記事を考える。

【取り組み】

新聞の記事の中から、初めに身近な新聞を使い、新聞そのものを知るところから学習を始める。その中で、読者の引き付け方(見出し、写真など)、記事の書き方(要約、人物事例紹介など)を学習する。総合的な学習で行く社会見学をスタートにした環境問題についての学習を自分のテーマについて調べ新聞作りを行う。

(1) 学習指導案

第5学年1組 国語科学習指導案

日 時 平成23年1月26日(水) 第5校時

場 所 5年1組教室 指導者 高品 玲

1. 「新聞記者になろう」

2. 学年目標

話し手の意図を考えながら聞き、考えたことや伝えたいことが的確に伝わるように話ができる子

3. 単元目標

新聞の特徴を知り、相手や目的に合わせた新聞を作る。

新聞の記事について自分の考えを持ち、話し合う。

新聞に取り上げる話題を選んで取材し、正確に伝えるために必要な事柄を集める。

伝えたいことの内容を考慮して、取材したことを取捨選択し、記

事を書く。

内容を知らない人が読んでわかるよう、組み立てを考えて書く。

下書きを見直して、間違いを正したり、説明を加えたりする。

4. 単元の評価基準

「新聞記者になろう」という活動に興味をもち、新聞を読んだり、作ったりしようとしている。

新聞記事について、自分なりの思いを持ち、意見を交流しようとしている。

新聞に取り上げる話題を選び、観点を決めて取材している。

下書きの文章を見直し、間違いを正したり、書き加えたりしている。

5. 指導にあたって

①児童観

本学級の児童は聞くこと・話すことについては朝のスピーチを1学期から取り組んでおり、自分の頑張っていること・学校生活、関心を持った新聞記事などをテーマに続けてきた。その中で聞き手からの質問もしているが簡単な質問に終わることがほとんどであり、深めていくことが課題である。挙手による発表では、自分なりの考えをもっている、自分から進んで発表する児童は限られている。「討論会をしよう」の学習では、身近なテーマについて自分なりの根拠を持って討論会を行った。討論会の中では事前に準備をすることで多くの児童が自分なりの意見を述べることができた。

また、読むことについては、物語文の学習では登場人物の思いを読もうとする中で、叙述に即して読むのではなく、なんとなくという読み取り方や自分の思いで読み取りをする児童も多いため、書くことについては、いろいろな行事や学習のまとめとして新聞作りに取り組んできた。その中で、見出しの書き方を工夫したり、4コマ漫画で表現する児童もいた。その一方で、レイアウトの工夫や記事の書き方に意識を持つことはできていない。

②教材観

児童は二学期には「森を育てる炭作り」を学習している。また、三学期の社会では環境にかかわる学習にも取り組む。その流れの中で総合的な学習の社会見学と絡めた環境新聞を作り、読んでもらおうという単元である。

自分たちの経験を記事にしていくには、まず自分の経験を客観的に見つめなおす必要がある。このような作業を通して、その経験は意味のあるものとして蓄積するだろう。また、読者がどういふ人かを設定することによって、記事の内容・表現の仕方などにも工夫が必要となり、おのずと相手意識も育つようになる。伝え

たいことを、相手に分かりやすく正確に伝えるためには、どのようなことを考え、工夫していけばよいかを児童たちは学ぶことができるだろう。

③指導観

本教材ではまず初めに、身近な新聞を使い、新聞そのものを知るところから学習が始まっている。新聞は事実が正確に書かれていること、見出しによって読者を引き付けていること、写真などの文字以外の情報も有効に使われていること、分かりやすくするために工夫されていることなどを児童は理解できるだろう。事実を正確に述べるためには、「いつ、どこで、だれが、何を、どうした」を書かなければならないという文章の基本を学ぶことにもなる。また、記事を作っていくための取材も必要になってくる。児童が意欲的に取り組めるように関西電力の社会見学を取材活動の中に取り入れることとした。児童らは取材することによって事実を正確にとらえることができるだろう。さらに、取材したことをどのようにして記事として組み立てていくかを考えることによって、文章を構成していくための学習もすることになる。

本単元では、事実を正確に伝え、相手意識をもって、分かりやすくおもしろい記事を作り上げることがポイントである。そのためにはどんな新聞を作っていくのかを友達と話し合いながら進めていくことになる。自分のアイデアをどん出したり、友達の意見に耳を傾けたり、お互いに交流しながらの学習になる。伝え合い、理解し合いながらの創造的な学習になるだろう。

6. 全体計画 全16時間(総合的な学習10時間)

次	学習計画	指導(・)と評価(☆)
第 一 次	○単元全体の見通しをもつて、学習の計画を立てる。	・どんな記事があるか、読者を引き付けるための書き方をどのように
①	・新聞の中に掲載されているいろいろな記事	工夫しているかなどの
②	を提示し、新聞の良さをとらえる。	観点で調べさせる。
③		・気づいたことを伝え合うようにさせる。
本 時		☆活動に興味を持ち、新聞を調べているか。(学習カード)
④		
第 二 次	○どんな新聞を作るか、どんな話題を載せるかを考え取材の準備をする。	・伝える相手を意識しながら、グループごとにどのような形式や記事にするか話し合わせる。
⑤	・グループでどんな新	・紙面の具体的なイメー

⑥	聞にするか話し合う。	ジが持てるように、新聞の例を提示する。
⑦	・だれがどの話題を記事にするかを決める。 ・取材活動で大切なことを確認する。 ・取材の打ち合わせや準備をする。	☆新聞に取り上げる話題について、進んで話し合っているか。(観察・学習カード) ☆テーマに沿い、取材することをはっきりさせ、準備している。(ノート)
第三次	○新聞を作る。 ・取材活動を行う。 (社会見学、図書、インターネット)	・取材してきたものの中から、記事として取り上げるものを選ばせる。
⑧	・取材したことを選択、整理する。	・事実と意見・感想を区別して書くようにさせる。
⑬	・記事の下書きをする。 ・下書きを読みあい、推敲する。 ・記事を清書し新聞を仕上げる。	・新聞の良さや工夫を思い出し取り入れさせる。 ☆伝えたい中心に沿って取材、必要な材料を集めている(取材メモ)
第四次	○読みあって学習のまとめをする。 ・できあがった新聞を読みあい、相互評価する	・できあがった新聞を読み、記事のおもしろさやレイアウトの工夫などの良さを交流させる。 ☆交流の中で友達の作品の良さを見つけている。(学習カード)

7. 本時の学習

① 目標

数種類の記事を見比べることにより、色々な記事の手法に気づくことができる。記事の手法について自分なりの考えを話し合うことができる。

② 準備物

記事(毎日小学生新聞、産経新聞、神戸新聞)・学習カード・フラッシュカード

③ 本時の学習

子どもの活動・学習内容	指導(・)と評価(☆)
1. 見出しやキーワード、写真から今日の記事の内容を予想する。	・前時までの学習をふりかえらせながら行う。 ☆見出しやキーワードなど前

2. 毎日小学生新聞の記事を読み、その内容を読み取る。	時までの学習をふりかえっているか。(発言) ・難しい言葉を確認する。 ・記事の要旨をつかませる。 ☆見出しや5W1Hを意識しながら要約しているか。(発表、学習カード)
3. 神戸、産経新聞の同じ内容を扱った記事を読み、違いを考え話し合う。	・見出しや記事の内容の違いを考えさせる。 ☆インタビュー、見出しの数、語句や人物の説明などに気づいている。(発表、学習カード) ・その手法の効果を考えさせる。 ☆効果について考えている。(発表)
4. 学習のふりかえりをする。	

(4) 事後研究会

授業者より

・学習をスムーズに進めるという観点から社会見学を見越した新聞作りをゴールにして取り組んだ。
・新聞について学習することから単元をスタートさせた。「見出し」、「要約」、「テレビ欄」、「お気に入りのコーナー」など
・作り上げた新聞が、一人ひとりの個性のある新聞になるように、様々な新聞の手法を学ばせたかった。
・本時においては、小学生新聞の記事と一般紙の記事を比べることで、様々な手法を見つけさせたいと考えた。

研究協議

・記事は、産経新聞、神戸新聞を使っていたが、その2紙を選んだ理由は？
○リード記事が分かりやすく、詳しい地図や人物の紹介、言葉の説明があり、新聞の手法が分かりやすいものを選んだ。
・小学生新聞との違いを引き出すためにはどうすればよいか。
○やはり小学生新聞は記事の量が少なく、一般紙は情報量が多い。そこを見つけてほしい。
・記事の要約で十分に内容がつかめていない児童もいた。その都度、手を入れていく必要がある。主語、述語の関係をしっかりとさせる。
・発言のなかった児童がどの程度、新聞を読めているのか。

○記事の要約についてであるが、少し取り組みばすぐにできるものではないということを感じた。朝の会などで継続的に行うことで力が付くのではないか。

・新聞を読むにあたって、どのような学習をしてきたのか。

○光村の「新聞を読もう」という単元を活用して行った。一般紙の中から、一面で一番面積の大きい記事や身近な話題、お気に入りのコーナー（スポーツ、コラム、投稿）、テレビ欄のマークなどを学習してきた。一般紙は漢字や語句の理解が困難であり、読み取る活動まで行くことができなかった。

・読書と同じで、新聞も目に触れる機会を多く持つことが大切。新聞は情報量が多く、慣れていなければ処理しきれない。

・小学生新聞と一般紙を比較する活動の中で、何を気づかせたかったのか。

○比較の中で、インタビュー、人物の紹介、見出しの書き方、記事の中の人物や記者の思いに気づかせたかった。

・記事を選ぶときにどういう視点で選んできたのか。

○子どもたちにとって身近に感じやすい内容のもので、時事ネタのもの。

・記事の中で重要なものはやはり写真、見出し、小見出しのそれぞれのインパクト。それを見て購入者は買うかどうかを決める。子どもたちにもその重要性を教えてあげてほしい。

指導助言

・新学習指導要領には「課題解決の為の思考力・判断力」の記述がある。言語活動を高めるための一つの例として新聞を使った活動があげられている。（今回は、5年生で新聞を書いているが、4年生で新聞を書く。5年生では新聞を読むことが挙げられている。）

・新聞、インターネット、図書を使い、情報活用力を高める必要がある。その中で国語科では新聞を新たに扱っていく。

・新聞記事の読み比べを行うには、系統立てた取り組みが必要である。基礎を身につけて、学年が進んでいくにつれてステップアップしていくことが重要である。

今回の授業の改善点として

・要約の重要性。5W1Hはしっかりと押さえることは重要。

・子どもの発言に対して、教師が掘り下げる必要がある。それがなければ、ただ発表しただけでねらいに迫れない。

・国語科の授業であるならば、もっと言葉にこだわる必要がある。子どもから出た言葉をもっと大切に扱い、掘り下げる必要がある。

・授業にスピード感が足りない。手を挙げなければ指名され

ない、ではいけない。どの子どもも必死で考え、自分の思いを言えるような工夫が必要である。挙手なしの指名により、苦手な子へのフォローにもなる。

3. 成果と課題

○成果

【話すこと】

・朝の会のスピーチ、毎月の詩などにより声を出すことに慣れ、全体に話すことに抵抗を感じる児童は少なくなった。

・教室掲示や継続して指導することで、友達の考えにつなげて話すことを意識して行う児童が増えてきた。

【聞くこと】

・「最後まで聞くこと」や「話し手に体を向けて聞くこと」など、基本的な聞くスキルは身につけてきた児童が多くなっている。

【NIEについて】

・新聞の見出しや記事の書き方を知ることで、他の学習の新聞作りで見出しなどの工夫につながった。

・記事の読み取りを続けることで、読解力を育てることにつながる事が予想できる。

○課題

【話すこと】

・説明文の学習後に事実と考えを分けて話すことを指導したが、その時のスピーチでは意識できていても、その後に活かしている児童は少ない。

・単元によって発言する児童が限られてくることがある。教材研究を深め、児童が話したいと思えるような学習を設定していかなければならない。

・友達の意見や考えを比べることは少しずつできたが、深めるような話し合いにはならない。話し合いが深まるような手立てが必要である。

・特に苦手な児童に対して意識した手立てを持つ必要がある。

【聞くこと】

・友達の意見や考えにつなげることはできてきたが、更に深めていくことができていない。テーマを意識しての話し合いにつながっていない。

【NIEについて】

・家庭環境の違いにより、新聞に触れている児童と、そうでない児童の差が多い。また、そのことにより、情報ノートの学習も進めることが難しかった。

・記事の読み取りについては、朝の会などの短い時間を設定して、継続的に取り組む必要がある。

「研究テーマ」

「学ぶ喜び」を味わえる授業の創造 ～教師の授業力を高めよう～

西宮市立南甲子園小学校

教諭 西山 祐子

本校では、2010年度に初めてNIE事業に参加し、6年生児童を対象に次の2つに取り組んだ。

1つ目は、新聞スピーチである。毎朝届く新聞記事から児童が気になる記事を切り取り、それを元に新聞スピーチメモを作成し、学級で毎朝スピーチをするというものである。新聞スピーチメモには、①いつ、②どこでの出来事、③どの様な出来事（誰が何をした）、④私の感想（考えたこと・思ったこと）を書くようになっている。新聞スピーチを行い、それを継続したことで児童に主に三つの力が付いたと思われる。

第一に、社会の出来事やニュースに興味・関心を持ち、それをもとに学級や友だちと話すことができるようになった点である。新聞を活用することで、曖昧な情報ではなく、具体的な状況、数字を挙げながらイメージを持って話を進められるようになった。

第二に、スピーチをする側、聞く側、どちらもが、いつ、どこで、何があったのか、とポイントを意識して「話す・聞く」ことができるようになった点である。特に興味を持った記事になると、話をよく聞いた上で、質問をしたり、付け足しで自分の意見を言えたりする児童もでてきていた。他者とつながる力も同時に付いているように思われる。

第三に、人前で話をするのが苦手な児童でも、新聞をもとに話をすると、声が小さくても何とか話せるようになった点である。また、友だちとコミュニケーションが取りにくい児

童も、スピーチをすることで、「この子はこんなことに興味があるのか」と、子どもたち同士でつながるきっかけにもなったように思われる。

新聞スピーチは新聞の届き始めた2学期から3学期まで継続して取り組んだが、上記のような成果が得られたので、本校では、今後も続けていきたい。



2つ目は、国語の物語文の学習において、児童自らが新聞記者になりきり、物語文を取材するという授業形態を取りながら文章を読み深めていくというものである。本校の研究テーマである「学ぶ喜び」を味わえる授業の創造を目指して、子どもたちがいきいきと学べるように記者となりきり学習を深める方法を取った。以下は、その研究授業の指導案の一部である。

◎単元名 人物の生き方を考えよう

「海のいのち」立松和平 文

◎単元の目標

- ・物語を読み、登場人物の生き方を考えることができる。
- ・登場人物の会話や行動から心情や情景を読み取り、それを自分の意見として書くことができる。
- ・自分の考えを発表し、また他人の意見を聞くことで、物語をより深く読み取ることができる。

◎趣旨

○ 本学級の児童は、4月当初、特に国語科の授業において、読み取ったことをノートやワークシートには書けるのだが、それを発表するとなると手が挙がらなくなる児童が大半であった。

二学期に入り、新聞記事に親しもうと毎朝日番の新聞スピーチを始めたこと、そして、現職の新聞記者を招き記事の書き方を学んだことで、新聞に興味を持つ児童が増えた。そこで、国語科の物語文を学習する上で児童が今興味を持っている新聞の要素を取り入れることで「学ぶ喜び」や意欲が高まるのではないかと考えた。児童一人一人が記者となり、物語文自体を取材して読み取りを深める。そのためには、自分の意見をしっかりと持ち、

それを分かりやすく他者に伝える必要があることを話した。

その形態で、①「カレーライス」重松清、②「桃花片」岡野薫子を行ったところ、学級の約半数が自分の意見を進んで発表できるようになった。また、他者の意見が良いと思った時には、その意見のどういうところが良かったのかを発言すれば、自分の新聞にのせることができるという方法をとったことで、自分の意見を言葉で表現しづらかった児童も発言できるようになってきた。自分の意見を認められる喜びや、他者の意見を知る喜びを感じている児童が増えつつあるように思う。

しかし、まだ自分の意見に自信を持たず、発表ができない児童も数名いる。また、自分の意見と他者の意見とを比較し、その共通点や違いまで意識して発表できる児童が少ないのが本学級の課題であると考えている。

○ 「海のいのち」というこの教材は、主人公太一を取り巻く父、与吉じいさん、母の生き方を考え、読み取っていく中で、太一自身の心の成長や生き方を追うものである。そして、それぞれの海への思いを読み解いていくことで、自然に人間が生かされているということ、いのちはどれも尊いということを改めて考えることができる教材である。

太一の父や与吉じいさんは、海で生きるとはどういうことかを自分自身の態度・行動で太一に示していく。それぞれの言葉や行動に注目しながら、それらは太一に何を伝えたいのかを児童に考えさせることで物語を深く読み取る力を付けられる教材であると考えている。

また、太一が追い求めてきた「瀬の主」との出会いの場面では、太一の心が徐々に変化していくのがわかる。この変化の部分は、その変化するに至った理由に迫ることで多種多

様な児童の意見が予想される。文章に忠実に解釈していきながらも自由な発想を出させることで、自分の考えの幅を広げ、様々な視点から考えられる力を付けさせたい。

自分の周りにいる様々な人から生き方を学び、自分さえよければよいというのではなく、自然との調和までも考えて生きることの大切さ、すばらしさを学ぶことができる教材である。

○ 新聞の要素を取り入れて授業を進めるに当たり、現職記者から学んだ次の三つのポイントを特に児童に意識させた。一つ目は、正しい記事を書くためには記事にのせる以上の情報を収集しておくこと。二つ目は、広い視点で物事を見られるように多くの人の話を聞いて取材すること。三つ目は、誰が読んでも分かる文章にするために言葉を選び、文の構成を考えることである。物語文の文章自体が取材元であるから、音読の宿題によりカギ括弧や言葉の一つ一つを大切にしながら文章を読むように指導してきた。発表の際には、自分の意見の根拠として必ず文章中の言葉に戻らせ、全員で確認しながら授業を進めたい。また、意見を出し合い、交流することで考えを深めていけるようにするため、発表のできる環境作りに努めてきた。前述したように良い意見を認め合う時間を設定したり、直した方がよい場合は新たな提案をしながらより良いものに自分たちで変えていけるように指導したい。

自分の意見を未だに発表しづらい児童に対しては、机間巡視によりつまずきの場所を確認し、個々に応じた指導をしていきたい。また、本学級の課題でもある「自分の意見をしっかりと持ち、他者の意見と比較しながら発表する力」を付けるために、自分の意見との

違いに注目しながら他者の意見を聞くことを意識させたい。そして、友達の見解から、自分の意見を付け足したり反論をしたりするなど、他者とつながる力もつけさせたい。また、考えを揺さぶる発問をすることにより、もう一度深く考える機会を与え、自分の意見を確かなものにして意見交流させていきたい。

「カレーライス」「桃花片」、そして今回の「海のいのち」と、児童が記者になりきって学習を進めてきた。毎回、記事の書き方、編集後記を評価し、新聞大賞を決めて発表することで、児童は文章を丁寧に書くこと、友達の意見をよく聞く大切さ、発表する良さを身につけつつある。児童の関心を高め、学ぶ喜びのある授業を目指したい。

◎記者になりきって学習するため設定したきまり

1 心得

- 1条：新聞記者たるものは「他の人に伝える」ということを1番に考えなければならない。
- 2条：新聞の材料である文章は暗記するほど読まなくてはならない。
- 3条：文章の中で少しでも分からない語句があれば、徹底して調べなくてはならない。
- 4条：新聞紙上に空欄があってはならない。空欄は記者の恥である。
- 5条：良い記事は遠慮なく他の記者からもらうべき（読者のために）、しかし、記事をもたらす時には必ず他の記者に了解を得るようにする。
- 6条：書いた記事に、間違い、勘違い（他の記者からの指摘）があればただちに修正しなければいけない。自分の記事を必ず他の記者に見せて賛同を得なければいけない。（間違い、勘違いをそのまま記事にしてしまうことを防ぐため）

7条：良い新聞は編集長から表彰状と10部印刷の権利をもらうこととなるので、それを目指してすばらしい新聞にきなさい。

2 進め方

8条：新聞を何箇所かの部分に分けて、編集長の質問や説明を聞きながら進めていく。

9条：新聞の記事については、心得にも記したように必ず他の記者の同意が必要なので、お互いの記事を発表し合いながら進めます。良い記事については、しっかり褒めてあげます。

10条：他の記者の記事を頂く場合は、もらいたい理由をはっきり伝えてもらいながら進める。

(例) 私は〇〇さんの記事がほしいです。理由は〇〇についての記事が文章の〇〇の部分の分かりやすく説明されているからです。私は〇〇さんの記事を一部もらいたいです。理由は、〇〇さんの記事はとってもいいこと書いているのですが、私としてはもう少し説明を加えて記事にしたいと考えているからです。

11条：記事を書く場合、文章中からぬき書きする場合、文章から登場人物の考えを記事にする場合、記者の普段の経験や考えを書く場合などをきっちり意識し、分類して記事にしながら進める。

12条：他の記者の間違い、勘違いに気がついたら、すみやかに発言して意見交換のもと、正して進める。

(例) 〇〇さんの記事は、文章の中だけでは言えない内容だと思えるので書きなおす必要があると思います。

〇〇さんの記事では、理解しづらい箇所があるので、もう少し説明をつけたしたらいいと思います。

3 その他

13条：新聞の文字の大きさをそろえて書くと読みやすい新聞になります。

14条：編集後記は、記者にとって最も大切です。それは、記者の考えが最も現れる箇所だからで、よく考えて書く必要があります。記者の能力が問われる箇所です。

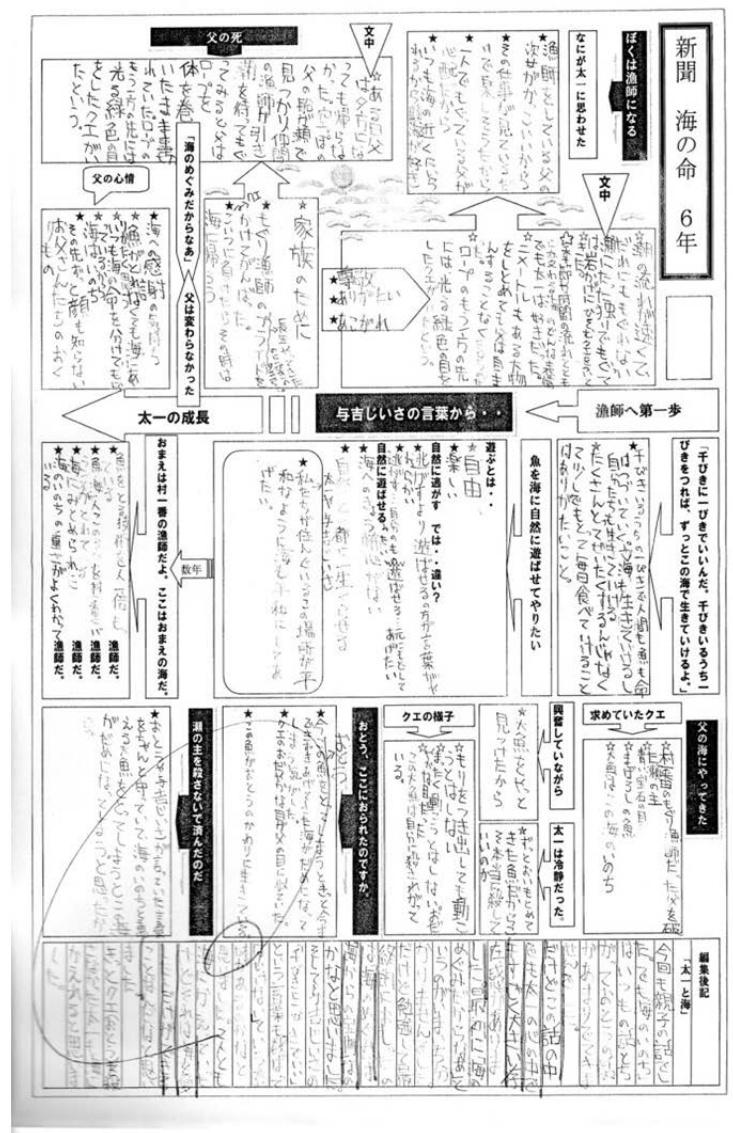
第一に、扱った文章についての記者の考えを書きます。

第二に、他の記者の意見で賛同できた記者について褒めた記事を書きます。

第三に、新聞を完成させるまでの過程や完成させた感想を書いて、締めくくります。

もちろん、空欄がないようにします。

◎実際の児童の新聞



新聞に親しもう

～社会の出来事に興味を持とう～

小野市立下東条小学校 教諭 長谷川 多美

1. はじめに

本校は初めてN I E活動に取り組むにあたり、4年生で重点的に取り組むことにした。その理由として、4年生の学習では、新聞を取り扱った教材が多い。国語の「新聞記者になろう」「アップとルーズで伝える」(光村図書)で読み手に分かりやすく伝えることを学ぶ。また、その学びを生かして、社会見学のまとめを新聞形式で発表することも多い。このようにN I E活動と国語や社会などの教科とつながる学習内容が多いので、4年生で重点的に取り組むことにした。

4年生の児童は、低学年の頃から朝の読書に取り組んできた。そのため、本を読むことに抵抗を感じておらず、進んで本を選んで読むことができる。ただ、本を選ぶ際に、物語から絵本まで個人差がある。語彙力にも個人差があるため、読み取る力にも多少は影響していると考えられる。日記などを読むと、段落構成を考えて書くことは、難しい児童もいる。3年生でも、総合的な学習の時間や社会科において新聞形式で発表する機会があり、児童は意欲的に取り組んでいた。記事を書くにあたり、適切な字数にまとめきれずに困ることもあった。

新聞離れがささやかれている今日、テーマ設定に当たって、どの程度、子どもたちが新聞を手にとっているのか、子

もの関心のある記事内容、また、家庭での購読状況等について、児童の実態を把握する必要があったため事前アンケートを行った。調査対象は、4年生43名で、結果は、以下の通りである。

質問①

お家で新聞をとっていますか。

はい…57%

いいえ…43%

質問①-2

とっている人の中で、家で新聞を読んでいますか。

読んでいる…25%

少し読んでいる…59%

読んでいない…16%

質問②

新聞の記事についてだれかと話したことがありますか。

ある…22%

ない…78%

誰と…家族や友達

どんな話…動物、スポーツ、天気、交通事故、病気、交通渋滞等

質問③

社会の出来事(ニュース)を新聞以外では、何を見て知りますか。

- パソコン… 54%
- 携帯 … 17%
- ラジオ … 9%
- 家の人 … 9%
- 友達 … 7%
- 近所の人… 2%
- その他 … 2%

質問④

総合的な学習の時間で新聞を読んでみて、どう思いましたか。

- おもしろい記事が見つかった… 81%
- おもしろい記事が見つからない
… 19%

質問④-2

新聞を読んでみて、記事の内容がわかりましたか。

- だいたいわかった … 53%
- 大人が説明してくれたらわかった
… 42%
- 説明されてもあまりわからなかった
… 5%

質問⑤

新聞でどんな記事が読みたいですか。

(重複回答あり)

- ・スポーツ… 37%
- ・動物 … 34%
- ・世界 … 10%
- ・その他（自然、政治、事件、身近に興味のあるもの、恐竜、テレビ、科学、医学、4コマ漫画）… 19%

質問⑥

総合学習でテーマをしばって新聞記事集めをします。どんなテーマにしようと思

いますか。(重複回答あり)

- ・環境（自然、エネルギー、動物、科学）
… 27%
- ・兵庫県 … 21%
- ・世界 … 18%
- ・小野市 … 13%
- ・福祉 … 7%
- ・食と健康… 7%
- ・その他（スポーツ、北海道、料理、ゲーム、コラム）… 7%

アンケート結果より、家庭で新聞をとっている児童の約8割は新聞に目を通していているが、記事の内容について話す児童は約2割と少ない。新聞以外で情報を得る手段はパソコンや携帯などが7割と多いが、人からの情報は2割弱と少なかった。新聞を読んでみると、8割の児童が面白い記事に出会うことができ、興味のある分野もある。しかし、一人で記事の内容がある程度分かる児童は約半数であり、手助けが必要な児童が多いことが分かった。

このことから、写真を見たり、記事を読んだりして社会の出来事に関心を持ち、新聞に慣れ親しんだりすることを目標にした。その際に、漢字や難易語句の手助けが必要であるので、配慮したい。また、新聞記事を介して自分の考えや思ったことを話し合ったり、感想を書く活動を取り入れることで、より社会の出来事に関心を持たせていきたい。さらに、地域や日本、世界で起こっている出来事について興味を持ち、自ら調べようとする態度を育てたいと考えて、取り組むことにした。

2. 実践の概要

(1) 新聞の配置とNIEコーナー

9月～2月の6カ月間、6社からの新聞提供を受けた。学校の郵便受けの横にNIE専用の新聞受けを用意し、販売員の方には、NIE用の新聞をそこに入れていただくようにした。休日を挟んだりすると配達される新聞は膨大な量になるので、大きめの専用新聞受けは必要である。

配達された新聞は、図書室に新たにNIEコーナーを設置し、常時4紙が、2日～3日分児童が自由に手にとって見ることができるようにした。またバックナンバーの新聞も新聞社ごとに一月分まとめて図書室の棚に保管し、全学年で調べ学習に利用できるようにした。



(2) 新聞を読んでみよう

テレビ欄や4コマ漫画など限られた記事しか見たことのない子、まったく家庭に新聞がなく手に取ることのない子多くいたので、いっしょに新聞を見ることから始めた。友達と話しながら読むことで、わからない言葉の意味を調べたり、記事の内容について確認したりできた。家庭学習で新聞の切り抜きをして、子どもの感想とそれに対する保護者のコメントをもらうことで、社会の出来事について家族で話し合う機会を設けることができた。



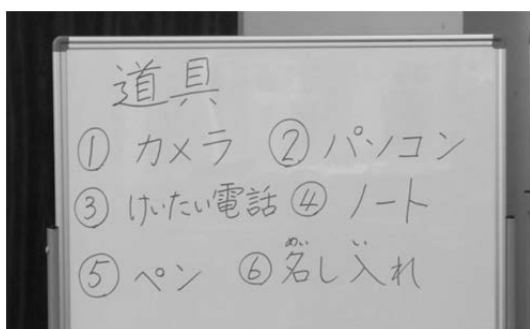
(3) 新聞記者の仕事を知ろう (記者派遣事業)

新聞社の記者の方に来ていただいて、新聞記者の仕事や、記事が新聞に載るまでの工程などを教えていただいた。教えていただいたことをスライドや資料を用いて、学習発表会で全校生に発信することができた。

～児童の感想～

ぼくは、新聞記者の方のお話を聞いて、いろいろ勉強になりました。特にびっくりしたことは、いつも携帯電話を近くに置いていることです。事件の連絡をすぐ受けるために、肌身離さずもっているそうです。初めて知った事は、一つの記事に何百枚も写真を撮って、実際に使うの

は1～2枚だということです。これからも、お仕事を頑張ってください。



(4) 新聞づくり

社会見学で学んだことを見学新聞にしたり、兵庫県の学習として、地域の特色を新聞としてまとめたりした。見出し書きや割り付け、写真選びなどの学習を行うことができた。実際の新聞を見て書くことで、記事の見出しをよりわかりやすく表現することができた。



3. 成果と課題

1年間、N I E活動に取り組んだ結果、以下のことが成果として挙げられる。

- ・自分から新聞を読もうとする児童が増え、1面のトップニュースに興味を持つようになった。
- ・辞書で意味のわからない言葉を調べようとする児童が増えた。
- ・新聞の切り抜き活動を継続したことで、家族で新聞記事の内容について話し合う機会が増えた。
- ・興味のある分野について、より深く知ろうとするようになった。連載記事を興味深く読む児童も出てきた。
- ・自分達の活動や学校が記事として載ったので、より親しみを持って活動することができた。

課題としては、以下の2点である。

- ・依然として個人差があり、大人の手助けが必要な児童がいた。
 - ・進んで興味のある記事を探しにくい児童に対して、教師が記事をピックアップする作業に労力を費やした。
- どの学習でもそうだが、個人差を埋める手立てに苦慮した。そのような児童については、子ども新聞をうまく活用したり、グループ活動で手助けをしたりすることが有効だと感じた。

また、社会の出来事に興味を持つために新聞を用いることは、大変有効だった。これからも、新聞を身近な存在にするために、図書館での新聞コーナーを継続したい。さらに、新聞の切り抜き紹介を充実することで、自分の考えをまとめたり、その考えを友達や異学年と交流することで、コミュニケーションの力を高めさせていきたい。

新聞に親しもう

～社会とつながり，人と出会える新聞～

宍粟市立 三方小学校 教諭 西村一郎

－ はじめに －

NIE 実践の1年目にあたる今年度、心がけたことは、標題にあるように「新聞っておもしろいやん」や「いろんなことが書いてあるなあ」などに気づき、「こんな使い方もできるんやなあ」という“新聞おもしろ再発見”を体験させることだった。

どちらかといえば、児童にとって身近とはいえない存在の新聞である。その新聞を身近に引き寄せるためには、「興味関心の喚起」と「慣れ(日常化)」を意識しながら指導していく必要があると考え、高学年を軸にして実践に取り組んだ。手法については、それぞれの教師が、クラスの実態や伸ばしたい力などを考慮しながら、進めていくこととした。

■ 3年生の取り組み ■

昨年夏、チリ鉱山の地下から作業員が救出されたニュースがテレビ中継された。それを見た後、翌日の新聞記事(6社分)の関係記事を切り抜き、2階の廊下に掲示した。

テレビ中継を通して見たニュースが、新聞記事になっていることで児



童の興味関心がかき立てられたようで、食い入るように新聞記事を見ていた。

昔のことを調べる学習で新聞づくりに取り組んだ際には、冬休みを利用して祖父母や地域の人に取材し、教科書の見本を参考にして新聞づくりに挑戦した。



それが、神戸新聞の“週刊まなびー”コーナーに掲載されることになり、新聞記者の取材を受けるなど、新聞への興味関心を高めることのできた1年間になった。

■ 4年生の取り組み ■

年間を通して、前日の新聞の中から気になる記事を選び、自分の感想や意見を交えてスピーチする時間を“朝の学習タイム”に設定して取り組んだ。

それまで真剣に新聞を読んだことのない児童は、“選んだ記事を紹介する”ために、写真だけでなく、記事そのものを読もうと努力する必要に迫られることになる。この朝のスピ

一は、記事を紹介する児童（1名/日）だけでなく、聞き手の児童にとっても、間接的に新聞に接する時間となったことはいうまでもない。「それ知ってる！」という声や「えー、知らなかった〜」という反応が、新聞を読みたいという意欲につながっていったことは間違いなかった。時には、同じ芸能ニュースを取り上げることが続いたため、教師の指導が必要になることもあった。



児童のスピーチ後には、聞き手児童が感想を言い、担任が補足することで、新聞記事がより身近なものになっていっただけでなく、日本や世界の出来事に目を向けていくきっかけになったといえる。

■ 5年生の取り組み ■

「新聞コラージュ」づくりが、新聞への興味関心を高める学習活動となった。新聞1日分の中から写真をランダムに選び、構図を楽しんで配置する児童や自分が選んだ写真に関係している写真を他の新聞から集め、レイアウトしながら、全体として統一テーマ（秋の自然・世界の人々）を作り上げている児童など、多彩な表現活動に取り組むことができた。

レイアウト後には、写真からイメージした言葉や文章を書き込んで、作品をさらに豊かにすることができた。

新聞には、カメラマンが意図を持って一瞬をとらえて撮った写真が掲載されており、児

童にも写真を通して何かしらのメッセージを受け取っている気持ちになることがある。新聞コラージュづくりを通して、新聞の楽しみ方を1つ増やすことができた。



■ 6年生の取り組み ■

“新聞を毎日読んでいる児童がいない”状態からスタートすることになった。まずは、新聞記事に“慣れる”ことからスタート。総合的な学習の時間の中で、じっくり新聞を読むことのできる時間を設定した。最初は、写真を眺めたりスポーツ面だけ読んでいた児童も、時間がたくさんあるので、徐々に地域のページや社会・政治・国際面なども読むようになっていった。

【新聞寄せ書きスクラップ】



10月から、学校に新聞6紙が毎日届くことになったので、新聞記事を切り抜いて色画用紙に貼り、コメントを付箋に書き込んで貼り付けた。それを他の友だちも読んで、さら

にコメントを書き加えることを繰り返していく学習を重ねた。



出来上がったスクラップは、他学年の児童にも興味関心を持ってもらえるようにと思い、廊下に掲示した。

【新出漢字連想探し】

意外に盛り上がったのが「新出漢字探し」…習った新出漢字を新聞1枚の中から見つけようという学習活動であった。

(学級通信より)

漢字ドリルから新出漢字を20字くらい選び、その漢字を新聞から見つけるという学習です。誰か1人でも見つけたら消していく方法をとりました。

「党」「閣」や「済」なんて漢字は、政治・経済に関係する言葉なので、わりと早く見つけられました。けど「仁」などはなかなか見つけられません。残り5分くらいになってやっと見つけられました。野球チームの選手名にあったのです。結局、最後まで見つけなかった漢字が1つだけありました。それは「蚕」。

「蚕」という漢字は、どんな記事の中で見つけることができると思う?と投げかけ、蚕→絹(シルク)→衣服→繊維関係の記事(経済面のページ)や絹織物の広告、というように連想させることができた。その日、自宅の新聞記事の中に「蚕」を見つけた児童がいたが、それはシルク素材にこだわった高級下着の広告記事であった。これだけ盛り上がったのは、新聞を使った漢字探しに推理という楽しい要素が加わった効果のためだと感じた。

【新聞記者派遣授業】

3学期になって、朝日新聞相生支局長の茂

山記者をゲストティーチャーとして招くことができた。せっかく“本物”の記者に教えてもらえるチャンスなので、事前に考えてみたある新聞記事の見出しをチェックしてもらうことにした。その中で、「見出しの基本は“本文中の言葉”を使うこと」「見て“思わず読みたくなる言葉”がよい」という基本を教えてもらうことができた。「読者は、見出しにある言葉を確認めたくて、本文を読むんですね。だから、見出しに選ぶ言葉が本文中の中でちゃんと書かれてあることが大事なんです。」という茂山記者の言葉に児童全員が、なるほどと納得していたのが印象的だった。



授業後半は、「記者の皆さんは、どうやって情報を得ているのですか?」という質問に対する答えを教えてもらった。それは「たくさん友だちがいれば、そのネットワークでどんどん情報は入ってきます。記者としての自分を信用してもらって、人とつながりを作っていくと、自然に情報が入ってくるようになります。」ということだった。こんな情報ネットワークの発達した時代でも、一番確かなのは“人と人のつながり”というネットワークなのだと改めて教わった気がした。

茂山記者の「新聞記事は疑って読むことが大事です。真実ばかりが書かれてあるわけではありません。本当はどうなんだろうと自分

「伝え合い 学び合い ともに伸びようとする児童の育成」

～ N I E 3年間の取組 ～

豊岡市立中筋小学校 森脇 江梨子 田中 弘子 大友 公智
寺川 彰徳 清水 肇 山本 直子

I はじめに

本校は、20年度より2年間のNIE実践校の認定、22年度は特別奨励枠をいただき、3年目の取り組みを始めた。「伝え合い、学び合う児童の育成」をめざして、「話す・聞く・書く力」を育成する手立てとしてNIEを取り入れてきた。

この3年間「新聞に慣れ親しむこと」「読み取る力 考える力 書く力を鍛えること」をねらいとして、新聞を学習材として活かす「NIEを活かした授業づくり」を進めてきた。そして、22年度は、これまでの実践に併せて、神戸新聞社・読売新聞社の新聞記者さんたちと一緒に紙面作りをする機会をいただき、自分たちの思いを多くの人に発信することができた。

II 実践内容

○新聞に親しむ学習

☆絵や工作に使う ☆言葉さがし・カタカナさがし
漢字さがし・熟語さがし ☆世界の国さがし
☆写真で季節見つけ・好きな写真見つけ

○新聞から学ぶ学習

☆テーマを見つけて記事をさがす
☆スクラップして考える 読んで考えよう
「命の記事」「戦争に関わる記事」「職業さがし」
「ヒーロー見つけ」「記者が伝えたかったこと」
☆記事から学ぼう 写真から学ぼう
「投稿記事・新聞広告・コピーから学ぼう」
「天気調べ(理科)」「グラフや表(算数)」

「災害・地震」(防災)「人の生き方(道徳)」

☆新聞記事スピーチ・討論会・ディベート

○新聞をつくる 仕組みを知る学習

☆見出しみつけ「見出しから学ぼう」
☆調べたことを新聞でまとめよう
☆新聞をつくろう 「新聞を分解してみよう」
☆新聞記者に聞いてみよう なりきって書こう
☆記事・社説を見比べよう
☆写真の撮り方、選び方を知ろう 等
子どもたちの発達段階に合わせて、行事・教科学習・総合的な学習等の中で取り組んできた。

III NIEを活かした授業づくり

(1) 新聞が活きる教科単元を見つけ授業づくりを行い実践した。

1年 生活科「夏がきたよ」国語科「くじらぐも」
2年 図工科「すんでみたいなこんな町」
国語科「かたかなで書くことば」
3年 社会科「わたしたちの町ってどんな町」
「店で働く人々」
4年 国語科「新聞記者になろう」
国語科「アップとルーズで伝える」
社会科「わたしたちの住んでいる県」
5年 国語科「言葉の研究レポート」
社会科「自動車づくりのさかんな地域」
6年 国語科「学級討論会をしよう」
「やまなし・輝く人を見つけよう」

(2) 新聞記者派遣 10月25日

読売新聞豊岡支局松田聡記者から新聞づくりについての話を聞く。



成果

- 新聞記者という仕事や経験、新聞づくりへの思いを聞く中で、子どもたちの興味関心が増した。
- 新聞作りについて教えてもらうことで、取材の方法や紙面づくりを学ぶことができた。
- コツコツと聞いた話を積み重ねる訓練が、内容を充実させ、読者にわかりやすく伝える記事を書くために必要であることを教えてもらった。
- 取材相手とふだんから付き合いを大切にし、信頼関係を築くことが独自の記事を書くことにつながることを子どもたちに話し、コミュニケーションの大切さも知ることができた。

IV 新聞記者さんと記事・紙面づくり

①神戸新聞社 ジュニア記者として新聞づくり

- ・世界地質遺産ジオパークについて
- ・玄武洞キャラクター「玄さん」について

活動 テーマ探し・編集会議

市役所での取材活動

天然記念物「玄武洞」調べ活動

新聞は足で書け!



(ジオパーク認定までの取り組みを聞く)

玄さんへのインタビュー取材



(ジュニア記者として玄さんの願いを聞く)

取材をもとにして、記事を書く



新聞発行された! (2010年9月30日)

②読売新聞社 教育企画「学ぶ 教わる 知る」

但馬丹波版「中筋小学校」学校新聞づくり

- ・伝えたいテーマを決める 編集会議

「学校の芝生化」「大師山」「中筋春名物のいちご」

- ・祭りやイベントに参加し、取材する

自分の足で歩き、目と耳で直接体験し、取材をして、記事内容を豊かにふくらませていった。



(いちご名人にインタビュー)

- ・新聞記事・紙面づくり



(松田記者さんに記事の書き方を学ぶ)

- ・見出しのつけ方 ・本文記事の書き方
- ・題字・見出し・カットの決定・製作
- ・記事に合う写真選び・記事のレイアウト決めをする。
- ・記事と写真の最終点検

(私たちの作った中筋小学校新聞が発行された!)



自分たちが作った紙面を手にとった子どもたちの笑顔は輝いていた。新聞記者さんと一緒に記事づくりについて学んだり、記事を書き、紙面を作ったりする活動を通して、分かりやすい文章を書くことを意識し、言葉へのこだわりや語彙の広がりが見られるようになった。そして、取材を通して、子どもたちは、多くの人々と出会い話をし、いろいろな体験をすることができた。自分の街や地域を見つめ直し、深く知ることができ、改めて、自分たちの故郷のよさについて実感していた。発信することの難しさと大きな喜びを知り、とても貴重な経験をする事ができた。NIE実践校ならではの経験であり、今後の新聞づくりに活かしていきたい。

V 終わりに ～3年間の実践を振り返って～

(1) NIEの成果

○興味・関心の高まり 新聞に親しむ態度の育成

○新聞を読む 読み取る力の育成

○情報・知識の収集と活用（情報を受け取る）

情報を豊かに書いて伝える（情報を発信する）

- ・目的やテーマに合わせた情報収集、情報の取捨選択ができるようになった。

○書いて伝えることの面白さに気づく

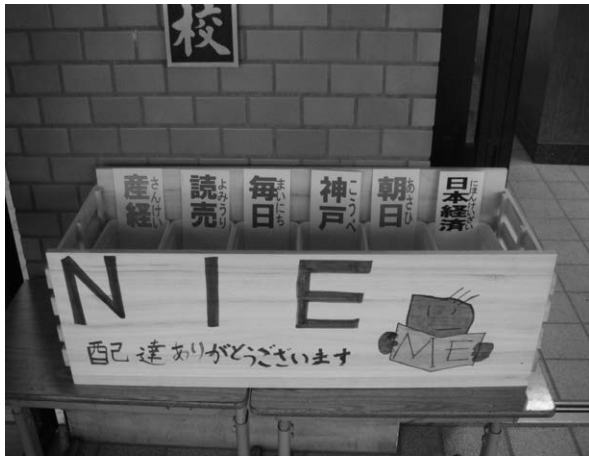
○視野の広がり自分への振り返り

○コミュニケーション力 伝え合う力の育成

- ・自分の考え・思いをもち、それを伝え合った。
- ・親子で新聞に親しみ、同じテーマについて考え、話すことができた。

○教科学習を豊かにするNIE

○新聞が学校を豊かな言語環境にする



（新聞が届く4カ月間 学校が活気づいた）

(2) これからの課題

○「読む力」「考える力」をさらに広げ深める

- ・学校や教室の中に、日々のニュースを取り入れて、話題を広げていく時間や場の設定を心が

ける。

- ・記事を要約したり、まとめたりする練習をする。
- ・メディアリテラシーの眼を育むことの必要性。

○「話す・聞く力」「書く力」さらなる育成へ

- ・ふさわしいニュース等を選び、自分の思いや考えを書く活動や話し合う場面を設定して、伝え合い学び合いのよさを感じさせる。

○新聞活用のための教師のねらいと準備

- ・教師自身も新聞を読み、社会に生きる一人として、情報を活用したり、心を磨いたりすること。また、記事が活きるための教材研究を工夫をすること。

○NIEのさらなる可能性の追求

本年度から施行された新学習指導要領にも、言語活動の充実をめざし、新聞の活用が提示されている。3年間の実践や研究してきたことをもとにして、さらに研修をしていきたい。



【 中 学 校 】

社会科でのN I Eの活用 ～思考力を高めるための新聞の活用～

三木市立三木東中学校 教諭 前田 義典

1. 本年度の取り組みについて

本年度はN I E実践校として2年目の取り組みとなりました。昨年度の新新聞購読が終わったときに、「もう、新聞は来ないんですか」と言う生徒の声を聞いてから、早くも本年度9月の新聞購読が始まりました。昨年度と同じく学年の廊下に新聞を配置したので、さっそく新聞を手にとっている生徒の姿が見られました。

また、本年度は平成22年度東播磨・北播磨地区の中学校社会科教育研究大会が本校で行われ、そのテーマが、

「思考力を高める社会科教育の創造」

～多様な言語活動を通して～

となっており、N I Eでの本校の研究テーマ

「社会科でのN I Eの活用」

～思考力を高めるための新聞の活用～

と両者のテーマが重なる部分が多く、新聞の活用を、上記研究大会の取り組みに生かそうと考えました。

そして、昨年度と同じくN I Eの様々な手法をN I E兵庫セミナーや、実践校の発表を通じて教えてもらいながら本校での実践を進めていくことにしました。



2. 取り組みの内容

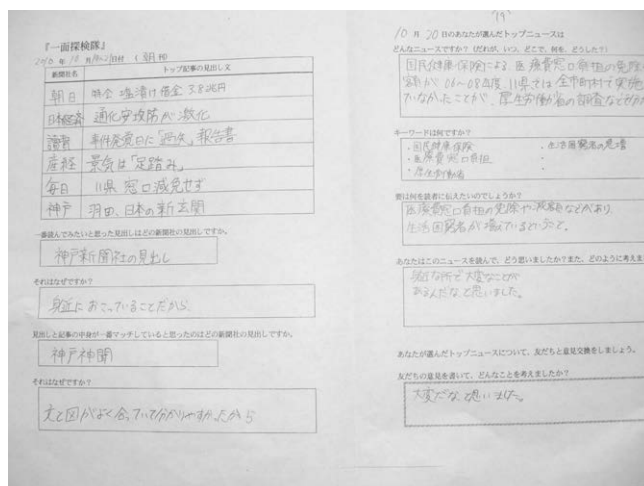
(1) 「一面探検隊」

2010年度N I E兵庫セミナーで宝塚市立宝梅中学校の岡本光子教頭先生によるワークショップにて様々なN I E学習の手法について、「読む」「書く」「話す」「聞く」力を育む実践事例を挙げて熱心に教えていただきました。

この時に紹介された、「一面探検隊」の手法をさっそく本校でも行いました。新聞6社の各見出しを比べて一番読んでみたいものを選ぶことにより、同じ日付でも各社によって違いがあることを知り、同じニュースに対する視点のちがいのあることを学びました。

また、新聞社の社名の字体が普段使わないものがあることに気付くなど、小さなことですがますます新聞への興味が高まりました。

この授業では、教室に持ち込んだ6紙から同じ日付の新聞を選ぶことから始めたので、協力しながら新聞をそろえる作業によって活発な学習活動につながりました。



さらに、「トップニュース選び」も行いました。この取り組みは、生徒はニュースを選び、内容を要約し、自分の考えを記入するというなかなか難しい活動となり、短い時間の中で思考力をフル回転させてがんばっている生徒もたくさんいました。

興味を高めながら、思考力を養うという目標に少しでも近づけたかなと思います。

(2) 「ニュースウォッチング」

この実践も上記(1)のNIE兵庫セミナーで教えていただいたものです。これは、新聞記事から、とっておきのニュースを1つ選んで、家族や親戚の人、先輩や友だち先生などにインタビューして、ちがった意見を聞きだそうという取り組みです。

新聞への興味関心を高めるのはもちろん、インタビューすることにより聞く力、書く力、伝え合う力を伸ばすことを目標とした。

実際に家族などにインタビューし意見を記入したプリントを見ると、家族全員に意見を求めたものや、家族の方の意見もボリュームがあってよくそこまで考えてくださったというものもあり、大変協力的にみなさん取り組んでいただきました。

〈ワークシートより〉

・『姫路城「平成の大修理」』の記事に対して。

「たくさんの記事の中からこの身近な世界遺産の記事を選んだのは、らしいと思います。なかなか機会がないですが、実際に自分の目で見たら、記事から受ける印象との比較が出来てさらにいいと思います。」(母)

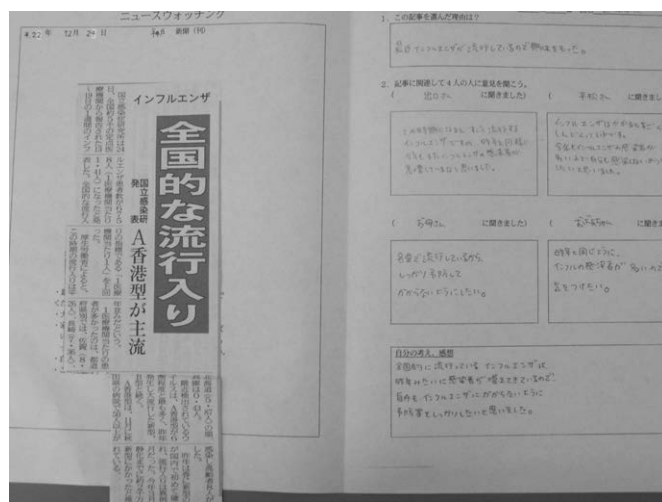
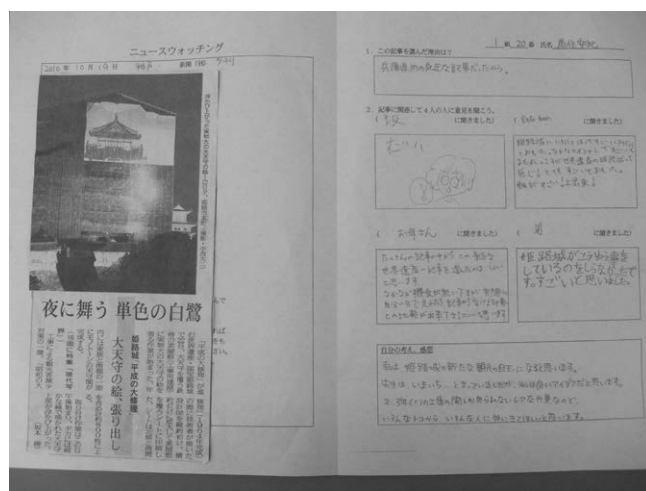
「私は、姫路城の新たな観光の目玉になると思います。先生は“いまいち”と言っていました、私は良いアイデアだと思います。」工事の間しか見られないレアな光景なので、いろんなトコから、いろんな人に見に来てほしいと思います。」(自分の考え、感想)

・『皆既月食』の記事に対して。

「よく2人で星や月を見ることがあります。皆既月食も見てみたかったですね。月食のメカニズムが大変興味深いです。」(母)

「皆既月食があってすごいと思った。神秘的だと思った。皆既月食についてよく分かったのでよかった。」(自分の考え、感想)

など、保護者の方の感想や、自分の意見をはっきりと書いたり、親子の普段からの共通した興味関心が相互に表れている記入など、家庭とのつながりで実践ができたことが大変よかったです。



(3) 平成22年度東播磨・北播磨地区中学校社会科教育研究大会での取り組み

○研究テーマ 「思考力を高める社会科教育の創造」～多様な言語活動を通じて～

ア 設定理由 『中教審の答申や新学習指導要領の告示を踏まえて、基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得させ、多様な言語活動をとおして、課題解決に必要な思考力や判断力、表現力を育てることを研究の基本としました。生徒たちには社会的事象や問題点を単に知る・わかるだけでなく、その背景を熟考し、自分なりの意見や考えを持って表現できる力、さらに、自分がどのように社会に参加・参画していくかを考えられる力が求められている。さらに、学校教育は生涯学習の基盤づくりの場であり、そのために必要な力として、「思考力・判断力・表現力」が位置づけられている。』という設定理由です。

8 指導過程		
学習内容(分)	主な発問及び生徒の活動	指導上の留意点・評価の視点
1 本時の学習 課題の確認 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 新聞の構成を理解する。 教科書でテーマにそったキーワードを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・NIEについて確認する。 ・新聞からテーマにそった記事を探すことを知らせる。 ・テーマは自然環境、人口、地域間の結びつき、生活・文化、資源・産業。 ・新聞の取り扱いについて説明する。
2 思考① 新聞記事をさがす (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・各班で新聞をそろえる。 ・記事を探す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備した新聞の配置・ワークシートの記入について説明する。 ・ワークシート名の「みんなの意見と私の考え」にそって説明する。 ・例を示す。 ・テーマを幅広く捉えさせる。
新聞からテーマに関連した記事をさがそう		
3 思考② 学習ワークシートに記事を貼り、記入を行う (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・記事を切り取り、ワークシートに貼る。 ・記事の概要をまとめる。 ・記事に対して意見を考え、記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間巡視を行い記事探しが適切にできるようアドバイスする。 ・適切に記事を探させる。 評価①<観察> ・記事に対して返事を書くようなつもりで意見を書かせる。 ・記事の論点をとらえ、意見を記述させる。 評価②<ワークシート、観察>
グループで意見を交換しよう		
4 思考③ グループで意見交換を行う (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・感想を書く。 ・班員相互にワークシートを見合う。 ・各班で発表者を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・班員の感想はメモ用紙に書かせる。 ・記事に対して様々な意見があることに注目させる。
5 発表を行う (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・簡潔に説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各班からの意見の発表を行わせる。 ・出された意見の共有化をすすめる。 ・事象の補足説明を加える。
6 本時のまとめ (3分)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の感想を書く。 ・新聞の返却 	<ul style="list-style-type: none"> ・班員の意見をもとに感想を書かせる。 評価②<ワークシート>
7 次時の予告 (2分)	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的に新聞を読むことを心がける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を活用し探求することが、考える力を伸ばすことを話す。

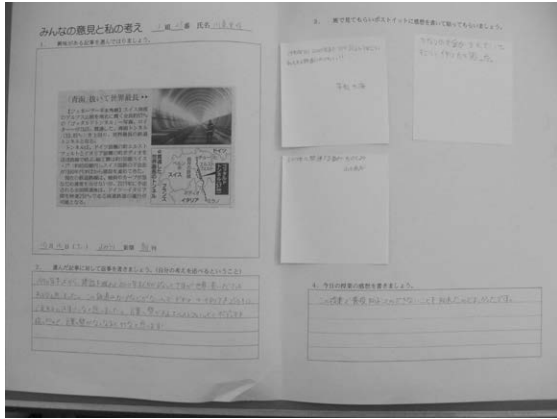
イ 公開授業

この授業では日本の地域的特色や、世界の人の多様な生活が理解できる単元となっている。このなかで、「自然環境」「人口」「地域間の結びつき」「生活・文化」「資源・産業」など様々な視点から学習することになっている。これらの事項は日ごろから一つ一つ取りあげられて学習していますが、この授業では教科書を離れ、新聞記事によって実際の社会的事象のなかから関連したできごとを取り上げてその意味・意義を考察させることが狙いです。

上に掲載した学習指導案では、班ごとに新聞をそろえ、社会科のテーマに関連した記事をさがすことから始まっています。そして、記事を切り取ってその概要をまとめ、記事に対して意見を考え、ワークシートにその意見を記入していきます。また、その記事を貼ったワークシートを班員相互にみてもらい、それぞれ感想を記入してもらいます。

このように、テーマにそった記事を探す技能や、それを読みとる力、記事を考察し意見を持ち、さらに班員の意見を参考に幅広く社会的事象を探究していく態度を養いたいと考えました。





ウ 生徒が選んだ記事

- ・「青函」抜いて世界最長。アルプス「ゴッタルドトンネル」

(地域間の結びつき)

感想 「言葉の壁があるエルストフェルトとボディオを結んだので、言葉の壁がなくなるといいなと思います。」「1990年から2010年までかかるなんてすごい、私もその鉄道に乗りたい!!」

- ・さんご白化過去最大級

(自然環境)

感想 「私たち人間が海をよごしてサンゴを殺していることを始めて知りました。」「海の生き物たちにも影響があつてだめだなと思いました。」

- ・世界を魅了、播州織伝承者

(資源・産業)

感想 「和をイメージしていてとてもいいなと思いました。」「伝統を受け継ぐ人がいることがいいことだと思いました。」

- ・「赤とんぼ」の原点 三木露風の生家内部初公開

(生活・文化)

感想 「同じ兵庫県で初公開でキレイな部屋だと思います。歌の背景にも興味をもてました。」「昔の家などは貴重なので大切に残してほしいです。」

エ 公開授業にも関わらず生徒たちは、リラックスして課題に取り組んだ。これは、今までにも新聞を活用した授業を形態は違うがいくつかやってきていて慣れているということもあると思う。そして、1時間の授業のなかで、短時間に記事を探し、読み、中身について考えることの訓練となって、思考力につながっているのではないかと思います。

3. 最後に

NIE実践校の2年目となった今年度は、いろいろと取り組みを行うことができました。実は社会科以外でも道德の授業で新聞記事を用いて行ったこともありました。1年目はどう取り組んでよいのか分からなかったこともありましたが、様々な手法を教えてもらい、肩肘張らずに実践することをお話されていた実践者が多く、私もそのような気持ちで2年目は取り組みました。

生徒も最初はどんな風に勉強するのだろうととまどっていたこともありましたが、新聞について学習し、前向きに作業に取り組み、自分の意見を考えるということにも積極的になってきました。よりよい新聞の読者となり、しっかりとした意見を持つ人として成長してくれそうです。



「研究テーマ」

新聞記事で育てる言葉の力

兵庫県高砂市立高砂中学校 校長 神尾信作

1 はじめに

本校は1学年2学級、特別支援学級2クラス、生徒数223名の小規模校である。NIE実践指定校としての活動は3年目である。今年度の取組は過去2年間の活動内容をしっかりと検証し、その上に立ったより効果的で実践的な取組になるように考察・工夫しながら始めた。

まず、本年度の校内の研究課題を「言語力の向上・育成」に設定した。そして、生徒数2百人余りの小規模校であることを本校の特色・長所と考え、その中にNIEの実践をどのように組み込んでいけば、より効果的で実践的な活動ができるのか考えながらスタートした。

2 具体的な実践内容

(1) 読み取りシートで読解力の育成

毎朝10分間の「読書タイム」を数年前から実施していたが、NIE実践指定校となった一昨年度から毎週1回「読み取りシートの日」を設けた。実施内容は以下のとおりである。

[ねらい]

- ・文章を読み取る力や表現する力をつける。
- ・身近な存在である新聞コラムにふれ、要約文や感想文を書くコツを知る。

[学習の流れ]

- ①毎週火曜日の15分間を使い「読み取りシート」に記入する。
- ②その日の内に提出し、国語科教師がチェッ

クする。

- ③良く書けている生徒の「読み取りシート」は校内に掲示する。
- ④学期ごとに全生徒の「読み取りシート」のファイルを点検し、優秀者を表彰する。

[工夫など]

- ・記事内容の読解を主たる目的と考えたので「要約」は全員が完成させるように指導した。
- ・全学年共通の「読み取りシート」であるが、1年生の1学期は「感想」を書くことを努力目標とした。2,3年生は全員が必ず書き上げるように指示した。
- ・「一日一語」の欄を設け、言葉に対する興味・関心が高まるようにした。

[生徒の声]

- ・はじめの方は何を書けばよいのか戸惑いましたが、毎週やっていく内にしっかりと読み取り、要約することができるようになりました。他の教科の理解にも役立ったように思います。社会の動きも分かって一石二鳥だと思いました。



(2)スクラップブック作成で表現力の育成

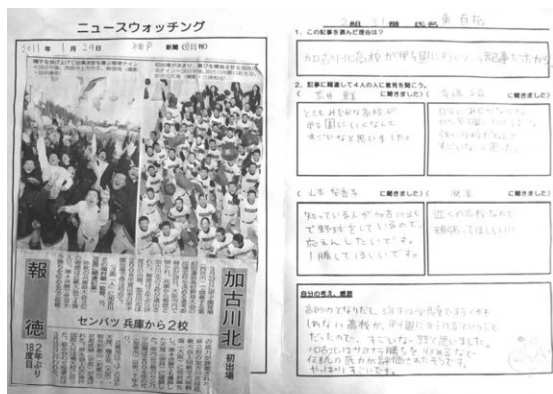
4ヶ月間の新聞購読期間を10月から翌年の1月までに設定し、月ごとにテーマや新聞社を変えて、「表現力、伝える力」の基礎作りに励んだ。

[ねらい]

- ・新聞記事を媒体として、友だちと意見交換する中で表現力の向上を図る。

[学習の流れ]

- ①文化委員が正門に届けられた新聞を教室に持ってくる。
- ②スクラップ当番は新聞を読み、その中からテーマにあった記事を探しだしスクラップブックに切り貼りをする。そして、その記事を選んだ理由を記入し、4人から意見を聞く。最後に、自分の意見と感想を書いてまとめとする。
- ③スクラップ当番は完成したスクラップブックを職員室に持って行く。
- ④クラス担任はその日の内にチェックする。



[工夫など]

- ・月ごとにテーマを変える
- 10月…各自が興味を持った内容
- 11月…学年別テーマ
 - 1年：福祉、環境、健康
 - 2年：職業、進路
 - 3年：政治、経済
- 12月…6紙のトップ記事の違いを知る
 - (各紙の特色、取組の違いを知るた

めに、トップ記事を生徒玄関に張り出す)

1月…ハッピーニュースを探す

- ・新聞割り当てをローテーションで行う

[新聞割り当て表]

	10月	11月	12月	1月
1-1	読売	毎日	神戸	産経
1-2	毎日	読売	産経	神戸
2-1	朝日	神戸	日経	読売
2-2	神戸	朝日	読売	日経
3-1	日経	産経	朝日	毎日
3-2	産経	日経	毎日	朝日

(3)新聞作りで情報発信

①家庭科の「保育新聞」

保育の授業の一環として、自分の成長をテーマにして個人新聞を作った。自分自身の生育歴を記事にした生徒は、乳幼児の頃のことを両親をはじめ家族から聞き取り調査。育児手帳や写真アルバムなどを見ながら幼い頃のことを少しずつ思い出してもらった。できあがるにつれて、保護者に対する感謝の念を感じる生徒が多くなった。

また、トライやる・ウィークで保育園や幼稚園に行っていた生徒は、幼い頃の自分と比較しながら記事を完成させていった。ゲーム世代を反映して、「ゲーム遊び」を記事にする生徒も多かった。その中には「もっと外遊びをするべきだ」という生徒もいた。

下はこの新聞を取り上げた神戸新聞『週間まなび』に掲載された保育新聞である。



②保健体育科の「環境新聞」

環境学習の中で生徒一人ひとりが A 4 サイズの「環境新聞」を作成した。地球温暖化、酸性雨、ゴミ処理、オゾン層の破壊、汚染など実にたくさんの課題・問題が取り上げられた。リユース、リデュース、リサイクルの取組やエコキャップ運動への参加も書かれていた。作成後には下記のような感想があった。

- ・この新聞を作ったことで、私は地球のためにどんなことができるのか少し分かった気がします。今からストップ地球温暖化を合い言葉として、CO₂削減に貢献したいと思っています。
- ・僕はいろんな環境問題を知って驚きました。多くの環境が破壊されていることに気づきました。そして、小さなことに気をつけることで、少しずつだけでも環境を良くすることができることも分かりました。
- ・日本にはきれいな自然がいっぱいあるのに人間のせいでなくなっていくのは悲しいことだと思いました。

③校外学習実施後の「個人新聞」

1年生の野外活動終了後や3年生の修学旅行終了後に個人新聞を作っている。野外活動では責任感や仲間意識の確認を、修学旅行では平和学習の定着を目的としている。

④部活動新聞

中体連主催の新人戦と総体の活躍ぶりを新聞にしている。普段の学習ではあまり注目が

れない生徒でも、得意な部活動ではおおいにその存在感を発揮することが少なくない。毎日部活動に熱心に取り組んでいる生徒や顧問の活動に焦点を当てる新聞である。

(4)「ひょうご新聞感想文コンクール」への参加

神戸新聞社主催の標記コンクールに全校生で参加することにした。このコンクールは今回が第1回目で「小中高生が生きた社会教材として新聞を読み、情報を知り、考えたことを自分の言葉で伝えること」を目的としている。従って、このコンクールに全校生で取り組むことで社会への関心を高め、文章を読み解く力、ものごとを深く考える力、その思いを伝える力を育てたいと考えた。

本校では1学期末の三者面談は3日間の予定を組む。3日間とも授業を3時間行い、その後には面談を行っている。その2日間、各2時間を使い「ひょうご新聞感想文コンクール」に取り組んだ。その日までに国語の授業や学活を通じて、参加の趣旨を生徒に伝え、適当な新聞記事を選んでおくように指示しておいた。各自がそれぞれのペースで選んだ記事をもとに、400字詰め原稿用紙3枚以内に感想をまとめた。予定の時間内に完成しなかった生徒には居残り学習させ、副担任が指導した。その結果、全校生が感想文を書き上げることができた。

また、「思いを伝える力」をより定着させるために、各学年から優秀作品1点を選び、全校集会の場で朗読発表させた。発表経験者を増やすために、新聞記事を読む生徒と感想文を朗読する生徒に分けた。

これらの取組が評価され、3校が対象となった『学校賞』に選ばれたことも追記しておきたい。



(5) 「HAPPY NEWS コンクール」の取組

新聞を読んでいた、心があたたかくなったり、勇気がふっとわいてきたりするようないろいろな記事を見つける『HAPPY NEWS キャンペーン』に取り組んだのは、3学期だった。受験勉強に集中している3年生は除外し、1、2年生全員で活動した。

活動時間は「国語の授業」とし、学校にある新聞や自宅から持ち寄った新聞を広げ、「HAPPY な気持ちにしてくれる」記事を探した。最初はスポーツ記事に目がいきがちだったが、社会面や地域版等の普段はあまり目を通さない記事を熱心に呼んでいる生徒の姿が印象的だった。

新聞記事の最も大きな役目は、読者に事実を伝えることにあることは当然だが、読者の心を明るく、ホッと和ませる記事の存在感・必要性を改めて実感した実践となった。3月には「HAPPY NEWS 特別賞」受賞の通知もいただき、学校をあげて再度 HAPPY な気持ちにさせてもらった。

(6) 学校だよりの裏面活用

私は学校だより『STAFF TAKASAGO』を毎週水曜日に発行している。その裏面には、雑誌や新聞の切り抜き、研修会での資料等、様々な情報を載せるようにしている。学校からの情報発信に学校だよりを活用し、活性化させたいという思いがあるからだ。新聞記事は主にコラムを利用させてもらっている。大きな出来事があった時には各紙とも同様のテーマで書いているのだが、その切り口は各紙それぞれの持ち味があり、比較することによって表現の学習にも繋がっていると思う。

(7) 新聞記者派遣事業

NIE 記者派遣講演会は11月19日に行った。

学校の研究課題が『言語力の育成・向上』だったこともあり、演題を『文字で表現・伝える力について』とし、共同通信社の女性記者に講演していただいた。

[生徒の声]

- ・「起承転結」という文章の作り方とてもよく分かりました。
- ・新聞記者は記事を作り上げていくという大変な仕事だなあと思っていましたが、「大変だ」の一言で表せないほどの困難があることを知り、とても関心が持てました。
- ・短い文章にも、記者一人ひとりの思いがたくさん詰まっていることを知り、今まで以上に新聞をじっくりと読みたいと思いました。



3 まとめ

来年度から実施される新学習指導要領の中心的な課題は「全ての教科・領域で取り組む言語力の向上」である。私はその課題を解決に導く一つの大きなツールが「新聞」にあると思っている。過去2年間のNIEの取組がその思いをますます強くしている。

ある調査によると、朝刊1部に使われている文字は15万字程度とか、聞いたことがある。我々読者はいったいその内のどれほどを読んでいるのだろうか。まだまだ、新聞には大きな可能性・広がりを感じる。今年度は更に新聞の持つ力を掘り起こす活動にしたいと思っている。

「授業における効果的な新聞の活用について」

神戸市立鈴蘭台中学校 教諭 米谷浩実

1、学校の概要

神戸市立鈴蘭台中学校（こうべしりつすずらんだいちゅうがっこう）は、神戸市北区北五葉にある公立中学校。

鈴蘭台の住宅地造成による人口・生徒数増加により、1969年4月1日神戸市立山田中学校から分離し、開校した。通称は「鈴中」。

2、学校・生徒の様子

平成22年度在籍生徒数は、1年5学級186名、2年5学級188名、3年5学級174名、特別支援学級1学級3名の合計538名である。明るく素直で、自己表現の豊かな生徒が多く、毎日の授業や特別活動などに意欲的・積極的に取り組んでいる。



3、研究目標および研究計画

NIE実践1年目の本校では、第1学年の社会科の授業を中心に活動を行なった。

本校1学年社会科では、今回の学習指導要領の改訂で言語活動の充実と関連して重視されている「適切に表現する能力」を育成するための学習指導の充実を目指しているところ

だが、その能力を育てるために「自分の意見・感想を書く」という活動を可能な限り取り入れてきた。以下、研究計画の概略を示す。

(1) テーマ

「授業における効果的な新聞活用」

(2) 目標

- ①多くの生徒に新聞に触れる機会を設けることによって、新聞の楽しさや面白さに気付かせる。
- ②授業で新聞記事を資料として活用することによって、教科書の内容をより実社会とのつながりの中で理解させる。
生きて働く知識の習得に努めさせる。
- ③保護者にもNIE活動への理解を深める。

(3) 対象生徒

第1学年186名

(4) 計画内容

①新聞配達予定表

	9月	10月	11月	12月	1月	2月
朝日	○	○	○	○	/	/
毎日	/	/	○	○	○	○
読売	/	/	○	○	○	○
産経	/	/	○	○	○	○
神戸	○	○	○	○	/	/
日経	/	/	○	○	○	○

②新聞コーナーの設置

北校舎4階および北校舎3階1年生教室廊下前



③授業の実践

期間：5月～翌年2月までの9ヶ月間

教科：国語科・社会科・総合的な学習の時間

内容：野外活動新聞・自分新聞・地理新聞の作成や新聞感想文コンクールへの応募ほか

④新聞記者の話聞く

時間：総合的な学習の時間

目的：新聞作りの第一線で活躍する記者の話聞き、新聞への関心を高める。

4、本校での取り組み

(1) 国語科での実践例

<自分新聞づくり>

国語の教科書に記載されている取り組みを

授業中に取り上げて実践。

(2) 社会科での実践例

<地理新聞づくり>

夏季休業中の宿題として、教科書では取り扱わない、南半球に属する国の中から好きな国を1つ選んで、その国を紹介する新聞づくりを課題とした。

<ひょうご新聞感想文コンクールへの応募>

夏季休業中の宿題として、神戸新聞社主催の「新聞感想文コンクール」に1年生186名が応募した。結果、校内優秀賞2名、その内1名が佳作を受賞。

<MOTTO調べたい(隊)>

- ①新聞記事を選ぶ。
- ②記事を選んだ理由を記入。
- ③説明ができるように辞書等を活用し調べる。
- ④記事に関するインタビューを行なう。
- ⑤自分の意見をまとめ、感想を記入

<WAKUWAKU探検したい(隊)>

- ①同じ日の一面の中から各社のトップ記事を選ぶ。
- ②トップ記事の見出しを書き出す。
- ③一番読んでみたいと思った新聞社の見出しを選ぶ。
- ④その記事を選んだ理由を記入。
- ⑤見出しと記事の内容があっていると思った新聞社の見出しを選ぶ。
- ⑥その新聞社を選んだ理由を記入。

<IKIKIKI調査したい(隊)>

- ①自分が分かりやすいと感じた資料の添付している新聞記事を選ぶ。
- ②記事や出来事の内容をまとめる。
(誰が・いつ・どこで・何を・どうした等)
- ③資料があることによって、どのような点が分かりやすくなったのかを記入。
- ④資料の工夫されている点を記入。

<DOKIDOKI 感じたい (隊) >

- ①各生徒が最も関心のある新聞記事を選ぶ。
- ②記事や出来事の主な内容をまとめる。
(誰が・いつ・どこで・何を・どうした等)
- ③内容のキーワードを記入。
- ④読者に伝えたい内容をまとめる。
- ⑤感想を記入
- ⑥記事に関する意見交換を行なう。



(3) 総合的な学習の時間での実践例

<野外活動新聞づくり>

5月18日～19日に行なった野外活動での取り組みを事後学習として、各自がテーマを設定し、新聞という形式で実践。

<新聞記者を招いての取材と新聞編集についての講話>

1月下旬に、産経新聞社神戸総局の安東義隆総局長を招いて、取材の仕方やまとめ方について講話をしていただいた。実際に新聞記事になったものをもとに、取材のポイントを具体的に話してくださったので、生徒も真剣にメモをとっていた。

(4) 文化祭での展示・発表

例年10月下旬に行なわれる文化祭において、提出者全員の「自分新聞」および「野外活動新聞」の代表作品は文化祭でも展示し、来校された方にも見ていただくことができた。

(5) 生徒の感想

- ・難しい。言葉の意味が分からなくなるときがある。
- ・環境の記事から発見することがあり、興味が持てた。
- ・中学入学前より、新聞を読む習慣が付き、世の中の事が少し分かるようになってきた。
- ・新聞を自宅で取っていないので、正直つらいと感じたこともあった。
- ・思ったよりも分かりやすく記事が書かれていることに気付いた。新聞を読むことを習慣にしたい。
- ・読んでも全く分からない記事があり、大変だった。
- ・日頃読まない経済面や政治面にも目を通すことができた。
- ・正直面倒だと思えることがあった。

5、成果と課題

(1) 成果

- ①生徒が新聞をより身近なものと感じることが出来、興味を持つことが出来るようになった。
- ②新聞づくりを通して、自ら進んで考え、行動する様子が見られた。
- ③普段、新聞をあまり読まない生徒も新聞に興味を持ち、積極的に記事を読んでいた。
- ④おそらく、今まであまり目を通すことのなかったであろう新聞を隅々まで目を通すことができ、「こんなことが載っているんだ」という発見をした生徒が多かった。

(2) 課題

- ①今回のNIEの実践により、取り組んでいる期間は新聞を読む時間が多くなったが、全員の生徒が自発的に新聞を読むようになったかという点、断言できない。

- ②生徒は自分が決めたテーマの内容ばかりに目がいってしまい、書いている内容まで理解をしていない場合が見られた。
- ③記事の読解の点で、個々に指導・援助が必要であると感じた。
- ④今後も新聞を読ませるには、学校で必要部数を確保し、適切に配置しなければならないなど、物理的な問題がある。
- ⑤新聞を読みなれていないため、1つの記事の範囲がどこまでかなどが分からなかったりしたので、指導する必要があると感じた。



(3) 考察・感想

- ①将来、生徒が自ら進んで新聞を楽しむことができるように、今後も引き続き今回の社会科のみにとどまらず、多くの教科や総合的な学習の時間で新聞を取り入れていきたい。
- ②人前で自分意見や感想を言うことが苦手な生徒が多かったので、作成した新聞を用いて、発表できたことは大いに自信になったと思う。
- ③学年全体で学習活動することができ、生徒のふだん見られない様子を見ることができ、とてもよかった。しかしながら、NIEの活動に取り組む時間を持つには、他の学年行事との時間的な調整が必要であり、実施には更に検討と計画が必要である。
- ④生徒が新聞に目を通す機会が設けられたこ

とは大変良かったと思う。

- ⑤新聞を活用した授業に好印象を持つ生徒も多いと感じた。
- ⑥「難しい」「面倒」「大変」と感じた生徒も少なくなかった。生徒の理解を助け、楽しく授業ができる工夫が必要だと考える。
- ⑦多くの生徒は新聞の有用性に気付いている。その気付きを学習活動に反映させて、自己学習能力を高めてほしいと願う。



6、おわりに

本校は、平成22年度から初めてNIEの実践に取り組んだが、生徒のみならず我々教員も、とても勉強になる場面が多かった。授業は主に教科書を使った展開であったが、新聞を活用することにより、生徒に幅広い知識や教養を身に付けさせることが可能なことが分かった。

また、そういう新聞活用で、生徒は授業の内容を身近なものとして考えるようになり、普段の授業とは違った形の取り組みができたのではないかと考えている。次年度については、今回のNIEの実践を活かして、兵庫県下の中学生に新聞を読むことの大切さや必要性を伝えていきたい。

最後に、今回このような素晴らしい実践機会を与えてくださった兵庫県NIE推進協議会の方々にお礼を申し上げ、報告とします。

新聞から「なぜ」を掘り出せ ～予想－検証学習～

尼崎市立南武庫之荘中学校 教諭 尾之内 潤

1 実践の概要

本校は2010年度、初めてNIE実践校に指定され、国語科、社会科、学級活動などで積極的に新聞を活用している。本稿では、第2学年の社会科で行っている「予想－検証学習」を紹介する。

「予想－検証学習」とは、①「なぜ」から始まるテーマ（問い）を設定し、②まずは資料を見ずに答えを予想する（仮説を立てる）。そして③教科書、資料集などを用いて、予想が合っていたかどうか検証する――。という流れの学習活動である。

例えば「なぜ、江戸幕府は鎖国を行ったのか？」というテーマを設定し、答えを予想させる。その予想が合っているかどうか、資料を使って検証する。そこから「キリスト教の禁止を徹底するため」「幕府が貿易の利益を独占するため」という2つの結論を導き出す。

「予想－検証学習」では、生徒は多くの情報から有用なものを取捨選択する場面に立たされ、現代の情報化社会で不可欠な力を養うことができる。何より、従来の知識注入型の授業とは異なり、生徒が主体的に探究でき、新指導要領が重視している「思考力」「判断力」「表現力」の育成にもつながる。兵庫教育大学大学院の米田豊先生の理論をヒントにさせていただき、実践している。

NIE実践校に指定されたことをチャンスに、テーマ設定のきっかけに新聞記事を使うことを思い立った。題して「新聞からなぜを掘り出せ」。興味のある新聞記事を抜き出し、

その記事をもとに「なぜ」から始まるテーマを設定する。そのテーマに対する答えを新聞やインターネット上の情報などを用いて、導き出していく。最後は、その内容を新聞の形にしてまとめる。

「なぜ」から始まるテーマを意識させることで、漠然と新聞に目を通すのではなく、「自分が何を知りたいのか?」「何に興味があるのか?」という問題意識を明確化させることができる。

2 本学習のねらい

新聞に触れることをきっかけとして、

①情報を取捨選択し、

②分かりやすく加工し、

③表現する力を養うことを目的としている。

3 生徒の様子

この学習は2年生を対象に行った。毎日、新聞を手取る生徒が、各クラスで1割程度しかいない。新聞を定期購読している家庭も6割程度と、新聞へのなじみが非常に薄い。それと同時に、「難しい」という抵抗感も持っている。そのことから、分かりやすく、身近な話題の記事を選ぶようにとアドバイスした。

4 学習の過程（計5時間）

① 準備（1時間）

ワークシートを配布し、新聞から興味のある記事を探す。その記事をもとに、「なぜ」から始まるテーマを設定する。

テーマに対し、記事を熟読しないうちに、
答えの「予想」を立てる。

② 情報収集（1時間）

新聞記事や、インターネット上の情報から自分が立てた「予想」が正しいかどうか、検証できる情報を集める。

③ 情報の加工（2時間）

集めた情報を取捨選択し、分かりやすく、
新聞の形にしてまとめる。

④ 新聞コンテスト（1時間）

まとめた新聞をクラスで発表する。クラスメートの作品を評価しあう。

5 実践の内容

① 練習

今年話題になった新聞記事を班ごとに配り、その記事をもとに「なぜ」から始まるテーマを考える。



話題を4つほどあげ、班ごとで考える。チリの鉱山の落盤事故で作業員が救出された記事をもとに話し合った班は、「なぜ、作業員は地下に閉じ込められたのか?」「なぜ、作業員は生きのびることができたのか?」というテーマを設定した。尖閣諸島問題に関連した「神戸海上保安部職員『映像を投稿』」、ロシア大統領の北方領土訪問など、大きく話題になったものや、これまでの社会科で学んだ内容に関連するような記事で、テーマ設定の練習を

した。



② 気になる記事探し

次は個人で、新聞記事に目を通して、気になる記事を探す。新聞を手にする経験が少ない生徒が多いため、「社会」「政治」「経済」「スポーツ」など、ページによって掲載されている内容がまとまっていることや、その中でも大きなニュースだと編集局会議で判断されたものが、1面に掲載されることを伝える。



③ テーマ設定

膨大な情報量が詰まる新聞。その中から、自分の興味のある記事を探し出すのも一苦労だ。その上、興味を持った記事についての感想をただ書くのではなく、その新聞から、新たな課題を見つける、いわば「思考の連続」を、この学習の主眼に置いている。「なぜ」から始まるテーマ設定は日ごろの授業から意識して行っている。

④ コンピューター教室へ

興味のある新聞記事を見つけ、そこから自分なりのテーマを設定する。テーマに対する予想ができれば、パソコン教室へ。もちろん

新聞記事の中に、検証できる資料が隠されているケースもあるが、キーワードによる検索を行い、予想した内容を検証できる資料へと迫っていく。



⑤ いよいよ新聞作り

これまで集めた情報をもとに、新聞製作にとりかかる。テーマに対する答えが導けなくても、問題はない。新聞記事を通して、新たな疑問を持ち、その答えを導こうと努力したプロセスを新聞にまとめれば十分だと、アドバイスする。新聞を手にとることさえ少ない生徒たちにとって、新聞に触れ、考え、新たな疑問を持つこと自体、新鮮なことだからだ。新聞には社会につながる「扉」がたくさん詰まっていることを感じてもらえれば、と思う。

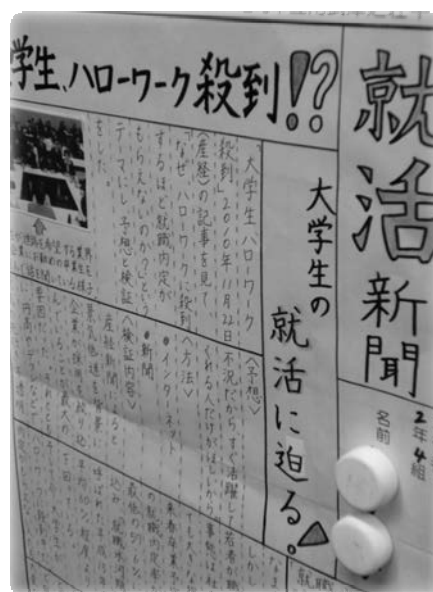


⑥ 新聞コンテスト

作品が完成し、クラス内で回し読みして、優秀な作品を選ぶ「なるほどコンテスト」を実施。「見た目」「見出し」「内容」の3項目の

30点満点で評価し、最も「なるほど」と思える作品に、「なるほど賞」を贈る。「なるほど賞」の作品の1部を紹介する。

(a) 「なぜハローワークに大学生？」



Hさんは「大学生 ハローワークに殺到」（2010年11月22日付産経新聞）を見て「なぜ、大学生がハローワークに殺到するほど就職内定がもらえないのか？」というテーマを設定した。Hさんは「不況だからすぐに活躍してくれる人だけが欲しいから」と予想する。検証方法はその産経新聞の記事で、「景気低迷を背景に企業が採用を絞り込んでいることが最大の要因」とし、「就職内定率が過去最低の57.6%に落ち込み」「ハローワークを訪れた大学生が1カ月で3万人を超えている」と具体的な数字をあげ、まとめている。感想では「私たちが就職するときどうなっているだろう。勉強も大変だけど、就職するのはもっと大変だなと思った」と、「大学生の就職難」を自分自身の問題としてとらえている。

(b) 「PISAの目的は？」

Fさんは「日本の読解力が急回復」（2010年12月8日付朝日新聞）を取り上げ、「なぜ、国際学力調査（PISA）が始まったの

か？」というテーマにした。



予想は「世界的に学力が落ちてきていることを知った人が、どうすれば学力が上がるか考え、まずは各国の学力を調査してみようというのがきっかけになり始まった」とした。検証は新聞のほか、インターネットを使い、「OECDが15歳の生徒を対象に、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーなどを調査し、国際比較により教育方法を改善し、標準化する観点から生徒の成績を研究することを目的としている」ことを導き出した。しかし「なぜ始まったかということは分からなかった」と検証しきれなかったことを明記している。その上で「読解力をつけるには読書はとても大切。私は3学期から図書委員長になるが、そこでも多くの人にたくさんの本を読んでほしいと思った」と締めくくり、PISAのニュースと自身の生徒会活動をリンクさせている。

(c)「なぜ米軍基地は沖縄にある？」



Kさんは2010年11月、沖縄県知事の選挙で仲井真知事が再選した記事から、最大の争点となった「米軍普天間飛行場の移設問

題」を取り上げ、テーマを「そもそもなぜ米軍の基地が沖縄におかれているのか」とした。

「沖縄は本土と離れていて小さく、アメリカに攻められたから」と予想した。

インターネットで検証し、「1945年の沖縄戦の最中、現在の普天間基地のある宜野湾一帯が米軍の支配下に置かれた。そして、米軍上陸と同時に普天間飛行場が建設され、2800メートルにもなる滑走路ができた」という歴史的事実を導きだし、「戦争で強制的におかれたなんて知らなかった。今もまだ問題となるのはよほど深刻な問題だからだと思います」と感想を述べている。具体的な沖縄県民の思いまでにはたどり着いていないが、県知事選の争点から、米軍基地の歴史を探究したことで、Kさんの沖縄基地問題への意識が急速に高まったことは想像に難くない。

6 成果と課題

いくつか紹介した作品からも分かるように、新聞をきっかけに、社会問題と、自分自身をつなぎ合わせている生徒が少なくなく、一定の成果があったといえる。一方で、テーマを設定できない生徒や、設定できても検証につながる情報にたどりつけず、情報の波におぼれてしまう生徒もいた。そういった生徒への手立てをどうすべきかは、今後の大きな課題の1つである。

また、新たな課題として、「そもそも新聞の情報は正しいのか」という問題がある。今回の学習では、新聞記事の内容は正しいという前提で進めているが、情報が正しいかどうかは、不確かな面もある。事実、誤報のあとに小さな「おわびと訂正」が掲載されているケースもある。インターネットの情報はいわずもがなである。情報が正しいのかどうかを、どう見極めたらいいのか、「メディアリテラシー」の教育も、今後必要であると考えている。

「作る・読む」 新聞を活用したさまざまな取組

明石市立野々池中学校 教諭 奥内 正浩

はじめに

生徒に学校行事ごとに作文などを課題として出しているが、読み手を意識した作文が少なく、とりあえず課せられた文字数の作文を完成させた生徒が最近特に多いように感じる。読書感想文や人権作文など同様である。生徒が書く作文は、本人と担当の教師など、多くても数名の人にしか読まれない実態がありある意味仕方がないのかと感じる。自分の体験や感動を文字として残し、また、他人にわかりやすく正確に伝える手段を学ばせたいと考えるようになった。そこで、個人新聞や、班新聞を作成し、廊下や教室など、さまざまな場所で展示したり配布したりすることで、読み手を意識したよりわかりやすい文書を意識して書くのではと考え、本校では数年前より、総合的な学習の時間や国語科などの教科の時間で、学校行事、自分史、環境などのテーマで新聞作りに取り組んでいる。

行事ごとの新聞作成

方針や取組時間によって内容が、学年によって多少異なるが、スキー実習や、校外学習では、新聞を作成している。本格的な新聞が作成できるフリーソフト（朝刊太郎）を利用して、班新聞を作成したり、B4サイズの新聞用の原稿用紙に個人新聞を作成したりした。新聞の基本的な用語を教えたり、効果的なタイトルなどを考えさせ、文字や見出しの配置などの指導をした。フリーソフトを活用した新聞作成では、班員全員にコピーを配布することなどを伝え、1枚の新聞を完成させた。個人新聞では、廊下などに掲示するということを

伝えた。



スキー実習の班新聞作成



修学旅行の個人新聞

3年生総合的な学習の時間でのN I Eの取組

平成20年度より、総合的な学習の時間（野々池タイム）のテーマを、「環境」に設定して学校で学習に取り組んでいる。平成20年度にG8首脳会議が北海道で、環境大臣会合が兵庫県で開催されたことがきっかけである。当時は化石燃料価格が高騰し、資源の大切さ、自然環境を保護について考えた。それから2年が経過し、化石燃料も当時ほど高騰しておらず、また、環境保護の意識も薄れつつある。

また、昨年度、JICA主催の中華人民共和国の内モンゴル地区への研修に参加する機会をいただいた。訪問前に自分が中国に持っていたイメージと実際に訪問した中国とでは大きな違いが見られた。それは急速に国が発展しているのに、自分の見方が変わっていないことと、日本のメディアの中国の捉え方にも原因があるのではと考えた。近年、ICTの発達に伴い、テレビ、インターネット、雑誌、新聞など非常に多くの情報があふれている。対中国に対してもいろいろなニュースが氾濫しているが、どちらかといえば、マイナスイメージを与えるものが多いように思われる。それは、人々の関心が、とりわけマイナス的な題材に対して関心が強いため、そのような出来事ばかりが起こっているわけでもないと思う。

そのような理由から、昨年度の総合的な学習の時間では、新聞紙を活用して、環境について学習することにした。教師や講師提示した資料だけでなく、新聞、インターネット、書籍なども活用し、情報化社会で生きる人間として、うわさや偏見で物事を見ず、様々な情報に対して批判的に見つめ、科学的に正しい知識を得る手段を身につけさせたいと考えた。また、プレゼンテーション力を身につけさせ、他人に自分の思いを正しく正確に伝えさせる技術と態度を養いたい。特に今回の学習では、学級単位でテーマを設定しているので、他のクラスは、このテーマでは学習しておらず、他に

クラスの生徒に、自分たちが学んだことをICT機器などを活用しながら、わかりやすくプレゼンテーションし、学びを共有させたいと考えた。

内モンゴル地区の環境問題と情報収集の学習

海外研修の訪問先である、内モンゴル地区の砂漠化の様子を紹介した。ヤギや羊の過放牧が砂漠化が進む一因であることを伝えた。日本でも好まれるカシミヤのセーターは1着作るのに何頭ものヤギが必要なことを説明した。また、日本でも見られる黄砂は中国から飛んできていることも伝え一国の問題ではないことを確認した。そして、日本からも多くの技術者や青年海外協力隊やボランティアが植林事業や砂漠化を防ぐ支援を行っていることを伝えた。

その後、班単位で環境問題についてインターネットで検索をさせた。最初に全員で「風が吹けば桶屋がもうかる」ということわざの意味を調べさせた。生徒はなぜ地環境学習にこのことわざを調べるのか困惑気味でしたが、ほとんど正解の答えを見つけてきた。その後、他の意味も掲載されていないか調べさせた。そして、インターネットの情報は常に正しいとは限らず、掲載日、出所などを確認する必要があることを伝えた。



インターネット検索の様子

授業の最後に、環境問題はこのことわざのように、間接的に影響を与える。自分に直接関係ないからと放っておいてはいけないんだと授業の感

想を書いた生徒がおり、こちらの意図に気づいてくれた生徒がいた。

実験から事実を正確に記録する取組

前時の内モンゴル地区の環境学習の中で紹介された、太陽光を使った調理器を実際に使って、自然エネルギーの貴重さを体験してもらった。



ソーラークッカーでポップコーン作成

予定した日、あいにくの曇り空で、実験を延期することになった。そのことも自然エネルギーの特徴を知る機会になったと思う。実際にポップコーンが数分ではじけてくる様子を見て自然エネルギーの威力に驚いていた。実際に試食して普通に食べられることにも感動していた。電気がガスの整備されていない地域や、災害時に有効だと感じた生徒が多かった。それらのことを記録し、後で行うプレゼンテーションの資料とした。

新聞スクラップの取組

本校で購読させていただいているすべての新聞を、3年生の校舎の一角に新聞コーナーを設置した。毎日休み時間になると、新聞を読みに来る生徒が多くいた。中にはテレビ欄しか見に来ない生徒もいたが、スクラップのための記事を探す生徒、スポーツの結果を確認する生徒、入試情報を確認する生徒などがいた。

環境をテーマに設定したクラスでは、3枚のスクラップ用の用紙を配布し、環境に関する記事を選択させ、その内容を数行に要約させ、自分の感想などを書かせた。それを、廊下に掲示し、実物

投影機で大画面テレビに映し出し、学級内で発表会を行った。



新聞記事の説明をする生徒

新聞は、学校、自宅どちらで購読しているものでもかまわないというルールにした（ただし当日の新聞を切り抜くのは×）。新聞を購読していない家庭も年々増えているということなので課題ができない生徒がいるのではと心配したが、ほぼ全員提出することができた。生徒の感想の中に、「新聞の中にこれだけたくさんの情報が毎日載っていることに驚いた。できるだけ毎日読むようにしよう。」と書いている生徒が数名いた。新聞記事を数行に要約させることは、国語の学力をつける上でも重要だと感じた。また、別の場面でもやらせたいと思った。



廊下に掲示した新聞スクラップ

新聞記者の出前授業（記者の視点から環境を考える）

共同通信社の松井記者に、来校していただき授業を実施していただき、記事から自然保護と開発について考え、後半では、プレゼンテーションの

作成のポイントについて教えていただいた。



授業の様子

■内容

- ・共同通信社とは
- ・香川県高松支社勤務時代から
高知県にある早明浦ダムの貯水率が新聞の天気欄に毎日掲載されている。(香川県には大きな河川がなく早明浦ダムに依存している。) 渇水時に人口降雨実験を実施しようとしたが、塩害など被害を心配してダム周辺の人は賛成でない(高知県は5%しか同ダムに依存していない)。
- ・バイオディーゼル(北条鉄道)の記事から
- ・プレゼンテーションの作成

シート見出しの工夫(①記事、②見出しの順に)

原稿5W1Hが入っているか確認

情報の出所を明らかに



授業中記事を探す生徒

生徒たちは、地域によって読者の必要としている情報が異なることを学んだ。また、記事を作成するにあたって、HP等に掲載されていることでもきちんと、電話や取材をして情報を確認してから記事にするという話を聞いて、新聞記事の正確さを感じていた。

他のクラスへのプレゼンテーション

この学習の最終課題は、他のクラスへのプレゼンテーションである。1、2年と個人新聞や壁新聞を作成したが、今回は自分の言葉で相手に伝えるという目的で実施した。松井記者から教えていただいた内容を盛り込みプレゼンテーションを完成させた。時間の都合で、パソコンを利用せず、A4のコピー用紙に手書きでプレゼンシートを描かせ、スキャナーで取り込み大きく映し出した。



生徒の作成したプレゼンシート

まず、クラス内で発表会を行い、その中から代表者を決定し、体育館で他のクラスの生徒へ発表した。原稿を見ず、わかりやすい表現を使って、ゆっくりと話している生徒が多く、他者に伝えようとする気持ちが伝わってきた。



プレゼンテーションの様子

まとめ

ICTなどの情報機器や手段が急速に発達する中で、生徒はたくさんの情報から正しいものを選択する技術を身につける必要がある。そのためにもメディアリテラシーを高める教育がますます重要になると感じた。自分の書いた作文が他の人に読まれることは、生徒にとっては大きな励みであり、学習の意欲を高めることを実感した。

「研究テーマ」

新聞を通して「いのちと平和」を考える

関西学院中学部 教諭・宗教主事 福島 旭

はじめに

関西学院中学部は特色ある授業として「土曜日自由研究・選択講座」と呼ばれている選択制の授業を展開している。2008年度から2010年度の3カ年にわたって、その選択授業の一つである「ライフ&ピース～いのちと平和を考える」で展開した取り組みを中心に、生徒たちの声を掲載しながら、教育の場における新聞の活用の可能性についてまとめてみたい。一回の授業時間は90分である。本校の通常の45分の授業とは異なり、毎回、設定されたテーマにゆとりをもって取り組むことができる時間が約束されている。年度の14回の講座のうちの数回を、NIEの授業実践に割り当てた。時期は10月から11月であった。

新聞を読み比べることによって、出来事の解釈の違いや偏った報道を見出すこともでき、結果的に情報メディアを主体的に読み解いて必要な情報を引き出し、その真偽を見抜き、活用する能力であるメディア・リテラシーを習得することにつながっていく。

まずは関心を持つことに始まり、知ることによって理解を深め、それを動機に行動を起こしていく、そういった形のきっかけの部分に、この作業がうまく取り入れられたならば豊かな展開が可能となるだろう。

新聞活用という形は生徒たちには新鮮なものに映ったようで、まずは新聞に親しむという作業から導入した。その上で以下に挙げる

各プロジェクトを展開した。日常的に新聞に親しんだ経験がない生徒ほど、時間が経つのも忘れて記事の切り抜き作業に熱中し、結果的には時間切れで毎日が終わるといった形になった。各プロジェクトの概要と生徒たちの声を紹介してみたい。プロジェクトに用いたものは朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞、産経新聞、神戸新聞の6紙である。

I 新聞記事比較研究プロジェクト

- 1 第一面記事の比較
- 2 スポーツ欄の比較
- 3 社説の比較
- 4 投稿欄の比較
- 5 四コマまんがの比較
- 6 広告欄の比較
- 7 文字数・文字の大きさ・広告の面積・テレビ欄の詳しさ等の比較

以上の7部門別に、各2～3名に分かれて作業をした。

II 新聞記事テーマ研究プロジェクト

- 1 いのちに関わる記事
- 2 平和に関わる記事
- 3 教育に関わる記事
- 4 凶悪事件・死亡事件に関わる記事
- 5 海外の記事
- 6 ローカル（地域）に関わる記事
- 7 芸能に関する記事
- 8 衣食住に関する記事
- 9 健康に関する記事

以上の9部門別に、1人が1つのテーマを

選んで、そのテーマに関係する記事を切り抜く作業をした。

Ⅲ 新聞記事オリジナル研究プロジェクト

- 1 「私のトップ記事・ベスト記事」による新聞の再編成
- 2 読者投稿の傾向（テーマ、年齢、職業等）を探る
- 3 第一面記事に取り上げられたテーマの分類
- 4 各紙の傾向と特徴の比較研究
- 5 知らなかったことば探し
- 6 記事からヒーロー・ヒロインを見つける
- 7 こころ温まる記事を探す
- 8 記事に登場する名前ベスト10
- 9 写真だけを切り抜いてグラビア新聞の再編成
- 10 びっくり仰天する記事を探す
- 11 同じ日の新聞記事の比較
- 12 各社の新聞発行号数、ページ数、版、月額定価の比較

以上の12部門のうち、自分が関心のあるテーマを選んで、そのテーマに関係する研究を行う作業をした。

Ⅳ 生徒独自の企画によるプロジェクト

1. 全面広告の比較研究
全面広告のページを並べて、その共通する特徴やレイアウトのオリジナルな工夫を比較研究する。
2. びっくり仰天した記事を見つける
自分が読んで初めて知る知識やエピソードを中心に、何に驚き、何に関心を抱いたかをまとめる。
3. スポーツの写真を集める
生徒たちに特に関心が高いスポーツ欄に掲載されている写真の撮影角度や撮影シーンなどの特徴を比較、研究する。
4. スポーツ欄の見出しを比較する

生徒たちに特に関心が高いスポーツ欄に掲載されている見出し語の特徴を比較、研究する。

5. スポーツ記事を比較する

生徒たちに特に関心が高いスポーツ記事の内容を比較、研究する。

6. ビッグニュースから考える

世界中で有名になった衝撃的な事件を取り上げ、どういう点が世界的に注目されるのかを分析する。その出来事をどのようなことばと写真で取り上げているのかを研究した。チリでの鉱山落盤事故からの救出のニュースを取り上げる生徒が多かった。

7. ある日の一面記事の写真や見出し語を比較する

ある日の一面の最も大きな写真や見出し語を比較して気付くことをまとめる。チリでの鉱山落盤事故からの救出のニュースを取り上げる生徒が多かった。

8. 決定的場面の写真の比較

一見してインパクトのある報道写真をさがして切り抜いて、貼り出し、比較し感想を述べるというもの。

Ⅴ GOOD NEWSプロジェクト

夏休みの課題として全校生を対象に「GOOD NEWSレポート～新聞から見つけた心温まるホットなニュース」を募集した。まず校内コンクールで優秀作品を選び、またその中から日本新聞協会が企画されている「HAPPY NEWS 2010」に応募した。その結果、本校生徒の作品が一編は日本新聞協会のホームページに紹介され、一編は入選という栄誉をいただき、学内で大騒ぎとなったことは嬉しい出来事だった。

生徒たちは一つの記事を通して、さまざまな思いを抱き、時間をおいて再び感想を書き直すことでより多くの感動を発見することが

できた。新聞記事は読後の第一印象が大切であるが、しばらく時間がたってから読み直すという作業によって、その後起こった出来事や事件との連関での新たな発見があり、読み直すことで感想に広がりがあることがわかった。新聞記事を読みきるのではなく、寝かせていることで熟したものを再検討していく読み方があることを教えられた。

VI N I E巡回セミナー（記者派遣）プロジェクト～新聞記者をお招きして

S新聞のA・Y記者が90分間の授業を担当してくださった。実は本来は他の記者が派遣される予定であったが、前日に西宮で殺人事件が起こり、予定されていた記者が、本校に来ることが不可能という事態にあつて、ピンチヒッターとして急きよ来てくださった。そのこともあり、事前の打ち合わせは一切なしで、予定していた内容ではないものとなった。

前半は最近のニュースの紹介と特に海上保安庁の職員によるビデオ流出事件の報道の経過をリアルに話された。新聞記者が入社後、どのような仕事を体験していくのかをご自身の経験を通して教えてくださった。新任記者が主に「社会部」に入り、体験していくことは、他の職業とも共通して、その後の自分の適性や希望する道を選択していく試金石になっていくこともわかりやすく話された。携帯メールの普及により、記事の集約が携帯電話によってなされている状況や朝刊、夕刊の原稿締め切り時刻に合わせて記者が取材していることなど、表には表れない新聞記者の日常を垣間見ることができた。

後半は生徒たちからの質問を受けて答えるという時間を持った。主な質疑を以下に掲げると、

Q「記事にするのがつらいのに仕方なく載

せる記事はありますか？」

A「被害者や遺族の方々への取材はつらいことが多い」

Q「これまでで一番印象に残っている事件は？」

A「自分がチーフとしてかかわった臓器移植の問題。そして、京都支局にいた時、「宗教記者クラブ」という世界ではバチカンにしかないと言われている取材にかかわったこと」

Q「誤報を出してしまった時はどうするのか？」

A「すぐに訂正を掲載する。特に電話番号を間違った場合は苦情が多い。風評による被害が起こらないようにも気を付けている」

90分間途切れることなく話されたが、生徒たちは飽きることなく、聞き続けることができた。

VII A新聞「ののちゃんの自由研究」を教材とした研究

テーマ「核兵器ってなくせるの?～冷戦下で増え、現在2万3千発 広がる保有国、野放しなら危険」のテーマで新聞記事を通して意見交換をした。生徒たちの主な意見を掲載する。
◎今、世界には2万3千発も核兵器があるという。これには驚きだ。これを使用すると、人類を滅亡させても余るほどだという。こんなことにどうしてなったのだろうか。それは、昔、「もしも核で攻撃されたら、それ以上の数の核で報復するぞ」と脅し合っていたら、実際には核兵器は使えないので平和が保たれるという理屈の「抑止論」というもので増えてしまったらしい。今、すぐに使える核兵器は8千発もあるという。こんな核兵器をなくすことはできるのだろうか。この世界に「抑止論」は合わなくなっている。まず、核兵器をなくすには、大国のロシアやアメリカからなくすると「あの大国が一核兵器をなくし

たんだから…」と他の国もなくし始めるのではないだろうか。その国の国民が核兵器のない世界を望まない限り、なくなることはないだろう。◎「核不拡散条約」や「包括的核実験禁止条約」が締結されても実際に核はなくなっていない。核保有国が核を持っていない国に「核を持つな」と言っても自分たちが持っているのに意味がない。核保有国を減らしていくことから始めないといけない。◎原爆を経験した人がまだ生きている今だからこそできることがある。核兵器で脅し合ってしまった「偽りの平和」など無意味だ。将来、核兵器がいつどこから落ちてくるのかわからない不安と恐怖にとらわれた絶望の世界になるか、人種や宗教など関係なくみんなが手を取り合い、笑っていられる希望の世界になるかは、今を生きる私たちに責任があると思う。いま世界では「核不拡散条約(NPT)」や「包括的核実験禁止条約(CTBT)」などが作られているが、なかなか核爆弾が処理できないというようなことになり、まだまだ問題点は多い。◎広島と長崎に原爆が落とされたということは知っていたが、日本が世界で唯一核爆弾を落とされた国だということは知らなかった。広島と長崎で20万人以上のいのちを奪ったのだ。20万人という数は信じられない数だ。そんな破壊力を見た人類はいまだに核兵器をなくすことができていないのはなぜなのか。世界中で同時に核兵器の廃止ができないものだろうか。◎核爆弾の保有数の多さに大変驚かされた。難民問題を抱える南アフリカやリビア等が過去に核開発していたことも初めて知った。◎オバマ大統領が核のない世界にすると言っていたが、大幅に減らしたとしてもまだ核を作っているのならば、無駄なことではないか。また、抑止論も成り立たなくなると思うと、とても不安になる。

おわりに

最初は取っ付き難いと愚痴を漏らしていた生徒がみるみるうちに熱心に時間を忘れて切り抜き作業をしている様子を見て、新聞が持つ不思議な魅力を改めて感じた。驚きは新たな関心を引き起こし、それは違う意欲へと結び付くのである。あえて「大きな文字」と「大きな写真」を切り抜くことから取り組んだ。それは入り口としては正解であったと思う。生徒たちが持っている先入観、そこには活字が列挙されているだけの読む気にならない新聞というイメージがあるに違いない。先入観が砕かれれば、ぐんと新聞の魅力の本質へと近づいていける、そう実感しつつ取り組んだ。しかし、どうしても時間の制約があり、「ゆとり(遊び)」をもって取り組むことができなかったのは残念である。しかし、この体験が契機となって、次の何かのステップに結びついていくに違いないとひしひしと感じる。

情報にあふれる現代社会を生きる青少年たちが多種多様の情報の中から、その真偽を見分けながら、自分自身の人生や生活にいかにか活かしていけるのかを支援することが教育の緊急の課題である。批判的な判断能力と能動的な適応力を養い、蓄えた知識を相互補填しながら、その知識を生きたものとして生活化させていくための教育はこの時代に欠くことができないものとなっている。これからは自分たちが生きている世界、社会の実態をしつかりと分析し、よい方向へと変革していくための生き方を行動として示すための力、自分の価値観を打ち破る力、いのちと平和を新たに創造していく力を生徒たちが養っていくための教育が大切である。三年間の実践は教育の将来の方向性を見いだすためにとっても意義あるものであったことを感謝したい。

新聞を活用した「言語活動の充実」に関する取組

～ コラムや投書欄を使って ～

高砂市立荒井中学校 教諭 中野順一

1 はじめに

新学習指導要領には、応用力（思考力・判断力・表現力等）を育てるために、生徒の発達段階を考慮した「言語活動の充実」が明記されている。そこで今、「言語活動の充実」の手段の一つとして、新聞の活用に注目が集まっている。

本校では、4年前からコラムや投書欄を使った取組を実施し、現在、全校体制で「言語活動の充実」を目指している。

ここでは、これまでの取組を振り返ることによって、他校での実践も参考にしながら、これからの方向性を探っていききたい。

2 コラムや投書欄を使った取組

（1）これまでの経過

1年目（平成19年）は、10月から1年生のみで16回実施

2年目（平成20年）は、年間を通して2年生のみで35回実施

3年目（平成21年）は、年間を通して全学年で24回実施 ※1年生のみ9月から
--

4年目（平成22年）は、年間を通して全学年で23回実施 ※1年生のみ9月から
--

1年目から全校的な取り組みをすることができればよかったが、校内でのPRもかねて、あえて2年間は担当学年のみでの実施とした。

（2）実施の方法

本校は、毎日8時25分から40分までの15分間、朝の読書タイムの時間を設けているが、金曜日のみコラムの要約や投書欄への意見のまとめをワークシートで行っている。

（3）ワークシートの内容

当初、コラムの要約（100字）と漢字の書き取り（5種類の漢字を5回ずつ）を行っていた。しかし、字数が少ないと要約は難しいと考え、200字程度に変更した。あわせて思考力育成のため、タイトルを付けさせてもいる。

また、身近なテーマについて若者（中学生や高校生）が書いた投書に対する感想をまとめることも行った。

これらはいずれも指導する側が、コラムや投書の内容を吟味して、中学生に理解できるものを選んでいく。

（4）ワークシートの作成方法

生徒に配布するワークシートについては、国語科の協力を得て、

①「生徒が要約しやすいようにキーワードを入れたもの」と、

②「要約のできたもの」の2種類を作成している。これをA4用紙の両面に印刷するのだが、関連する新聞記事があれば裏面に掲載している。【次ページ参照】

【コラムの要約用ワークシート(表)】

(神戸) 新聞 (2011年 3月16日(水)曜)

「一剎も早く終息してほしい。福島第一原発の冷却作業イメージ」

「一剎も早く終息してほしい。福島第一原発の冷却作業イメージ」

「一剎も早く終息してほしい。福島第一原発の冷却作業イメージ」


(No. 23) コラムを読んで脳トレ

3月18日(金) 曜

組 番 氏 名

【コラムの要約用ワークシート(裏)】

福島第1原発の冷却作業イメージ



3号機 4号機

原子炉圧力容器

凝縮器

冷却水

蒸気

原子炉

「一剎も早く終息してほしい。福島第一原発の冷却作業イメージ」

「一剎も早く終息してほしい。福島第一原発の冷却作業イメージ」

「一剎も早く終息してほしい。福島第一原発の冷却作業イメージ」

【投書に対する感想用ワークシート(表)】

(神戸) 新聞 (2010年 12月1日(水)曜)

「電子書籍普及加速へ」

「電子書籍普及加速へ」

「電子書籍普及加速へ」

(No. 17) 私の考え

12月17日(金) 曜

組 番 氏 名

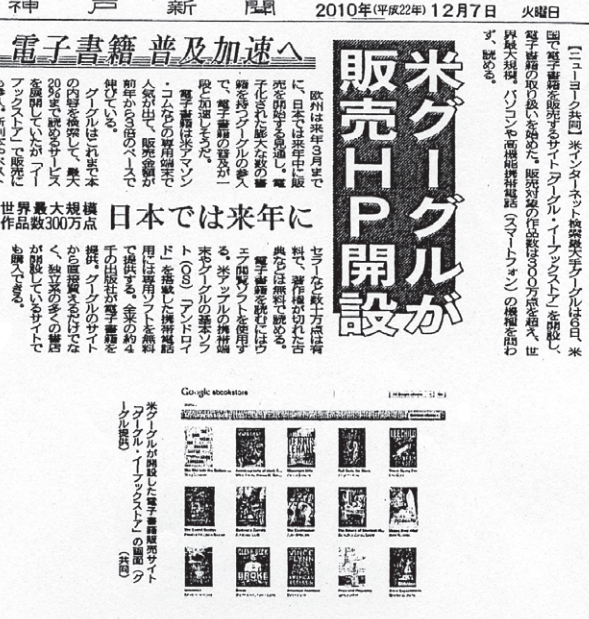
【投書に対する感想用ワークシート(裏)】

電子書籍普及加速へ

販売HP開設が

米グーグル

日本では来年に



電子書籍

販売HP

開設が

米グーグル

日本では来年に

「電子書籍普及加速へ」

「電子書籍普及加速へ」

「電子書籍普及加速へ」

「電子書籍普及加速へ」

3 コラム活用の可能性

コラムを教育現場に生かすために、一般的には、次のようなことが行われている。

①読む。
②漢字を確認する。
③関連記事を調べる。
④要旨をまとめる。
⑤タイトルをつける。
⑥全文を写す。
⑦自分の考えを書く。
⑧自分の考えを発表する。
⑨各社同じテーマを取り上げている場合、読み比べる。

(「読売ワークシート通信 vol.1」参照)

その他、全国の実践例をみると、アイデアあふれる取組があるので、紹介しておきたい。

(1) コラム朗読コンテスト

(福井県：勝山北部中学校)

コラム朗読コンクールを開催し、各クラスの代表が全校生徒の前で、声の大きさや速さ、説得力などを競い、成績優秀者を表彰する。

(2) コラム学習 (熊本県：天草中学校)

毎週1回、コラムのワークシートを使い、言語力を磨いている。

①文中の10か所の空欄にどのような語句が当てはまるかを文脈から予想する。
②放送を聴き、空欄に入る語句を書き込む。
③書き終わったら、裏面のコラム(全文)を見ながら採点をする。
④コラムにタイトルをつける。
⑤全員で音読する。

また、優秀なタイトルや平均点は学年ごとに発表(NIEコーナー)し、生徒の意欲を高めている。

ここで紹介したものは、一例に過ぎない。全国では様々な実践が行われている。各校の実情に合わせて、良いところはどんどん導入すべきである。

※全国の実践集は、NIE全国大会(今年は、7月25、26日に青森市で開催)に参加すると無料で入手できる。

4 効果的な取組への課題

(1) 組織の構築

教育活動は、継続してこそ、その効果をあげるものである。特にコラムや投書欄を使った取組はそのことがいえる。そこで、担当者が異動となってもNIE活動を継続していくために、職員の理解を得て、機能的な組織にしていく必要がある。

具体的には、NIEをテーマにした職員研修を校内は勿論のこと、他校との連携も視野に入れて進めていきたい。

(2) 指導内容の検討

教師が、コラムや投書欄等の新聞を使ったNIE活動を行うからには、生徒の興味・関心・意欲を引き出すものでなければならない。つまり、「言語活動の充実」につながっていくよう、全国の実践例を参考にしながら指導内容の改善を図っていきたい。

(3) 効果の客観的検証

今行っている取組が、本当に教育的な効果をあげているのかを検証しておくことも必要であろう。生徒・教師向けのアンケートや学力テストの結果を客観的に分析し、この取組にフィードバックしていきたい。

5 最後に

生徒に「言語活動の充実」を実感させるには、新聞を読む習慣を身に付けさせることも、その一つであろう。そこで、生徒の実態を把握するために、「日本新聞教育文化財団」が作成した「N I E 効果測定調査」を参考にしてアンケート調査を行った。

(1) 調査対象

- ・ 1年生:142人 (男:67、女:75) ※現2年
- ・ 調査時期:平成23年1月

(2) 調査結果

【質問1】新聞をどの程度読むか。

毎日読む。	22人	15.5%
ときどき読む。	55人	38.7%
ほとんど読まない。	61人	43.0%
無回答	4人	2.8%

【質問2】新聞を1日にどのくらい読むか。

60分以上	2人	1.4%
30~60分	3人	2.1%
15~30分	10人	7.0%
5~15分	43人	30.3%
5分未満	81人	57.1%
無回答	3人	2.1%

【質問3】新聞をどのように読むか。

興味のある記事以外も、目を通す。	16人	11.3%
興味をひかれた見出しは記事も読む。	59人	41.6%
テレビ・ラジオ欄以外も興味をひかれた見出しだけは読む。	31人	21.8%
ラジオ・テレビ欄以外ほとんど読まない。	30人	21.1%
無回答	6人	4.2%

【質問4】どの記事をよく読むか。

(1人5つ以内で回答)

ラジオ・テレビ欄	78人	54.9%
マンガ	73人	51.4%
スポーツ	67人	47.2%
事件や事故	60人	42.3%
芸能欄	38人	26.8%
天気予報	37人	26.1%
地域	35人	24.6%
社会	20人	14.1%
政治	12人	8.5%
科学	12人	8.5%

今回の調査結果を見ると、新聞に限ったことではあるが、言語活動が充実しているとは言いがたい。

「言語活動の充実」を目指すには、当然のことながら、日常の言語環境を整えておく必要がある。新聞を例に挙げれば、次のようなことが考えられるであろう。

- | |
|---------------------------------|
| ①新聞を廊下等に掲示する。 |
| ②新聞を授業の導入に使う。 |
| ③関心のある記事を切り抜きさせる。 |
| ④教科に限らず、道徳や福祉・環境・平和学習等に新聞を活用する。 |

素材の良さを最大限に生かしきる料理人のごとく、新聞の最大の魅力である「活字の鮮度」を生かした教育活動を基本に、これからもN I E活動を続けていきたい。

【 中学・高等学校 】

N I Eを通じて、中高生の社会への興味・関心を高め、学力を身につける

武庫川女子大学附属中学・高等学校 社会科教諭 田村 肅

1. はじめに

本校は、平成22年度からN I E実践校の指定を受けた。以下に、社会科を中心とした1年目の取り組みと2年目への課題についてまとめる。

2. 学校全体としての取り組み ～N I Eコーナー（新聞閲覧室）の開設～

平成22年2学期～ 新聞購読開始
(6紙；朝日・読売・毎日・産経・神戸・日経)

購読開始と同時に、食堂の一角を利用し、「新聞閲覧室」を開設

(目的)生徒が集まり易い食堂に設置することで、新聞に親しむ機会を増やしていく

(現状)閲覧室に入る生徒が増えない

* 閲覧室活性化の活動・計画

- ・日経写真ニュースの掲示
(写真で生徒の注意・関心をひく)
- ・放送部の協力のもと、昼休みに全校放送で宣伝
- ・興味深い記事の特集をつくって掲示
(例：尖閣諸島漁船衝突事故)
- ・新聞の多様化
(中学生新聞や英字新聞などを、新年度より導入予定)
- ・生徒に募集をかけ、応じた生徒の手でN I Eコーナーをより充実させる
(新年度より実施予定)

本校のN I Eコーナー



3. N I E実践校の指定を受けるメリット

①無料で新聞が購読できる（原則2年間）

A型…教師が1人、もしくは2人で実践
新聞1銘柄につき1部を延べ2カ月

B型…3人以上の教師による実践
(本校が該当)

新聞1銘柄につき1部を延べ4カ月

新規校の場合は、指定を受けた年の9月から実施可能

継続校の場合は、4月から実施可能

本校は、生徒数が多く、中高一貫校でもある。社会科の教員全員で取り組むため、B型で申し込んだ。

②新聞記者の派遣

注意事項

- (1) 派遣要請は希望日の1カ月前までに
- (2) 派遣希望日は第1希望から第3希望まで伝え、新聞社に選択の幅を
- (3) 希望する話のテーマと目的を明確に

- (4) 授業の時間、児童・生徒の人数、場所を明確に
- (5) 授業する場所でパワーポイント、ビデオ（DVD）が使用可能かどうかを明らかに

③「めぐる君」をよぶことができる

「めぐる君」とは、取材・編集・印刷機能を備えた「新聞製作カー」のことで、マイクロバスなどを改造し、パソコン・プリンター・コピー機・自家発電機・デジタルカメラ・通信設備などを搭載している。

神戸新聞「めぐる君」は、A3判で毎時2000枚印刷可能な高速カラープリンターを車載しており、NIE活動や各地のイベント現場を駆けめぐっている。

本年度は、準備の時間が非常に限られていたため、「めぐる君」をよぶ機会はなかった。来年度は本校の「体育大会」や「文化部発表会」などの学校行事に来てもらい、生徒が取材した記事を新聞にしてもらい配布するなど、色々と検討していきたい。

④. その他

「ジュニア神戸新聞」別刷特集のお誘い

4. 中学3年生の取り組み～公民・LHRの授業を通して～

①公民の授業において

(1)スクラップブックの作成

毎週新聞スクラップブックの提出を義務づけ、定期的に新聞に触れる機会をつかった。

<新聞スクラップの概要>

- ・毎週、気になった記事を1週間ごとに1つ選びスクラップさせる。また、自分な

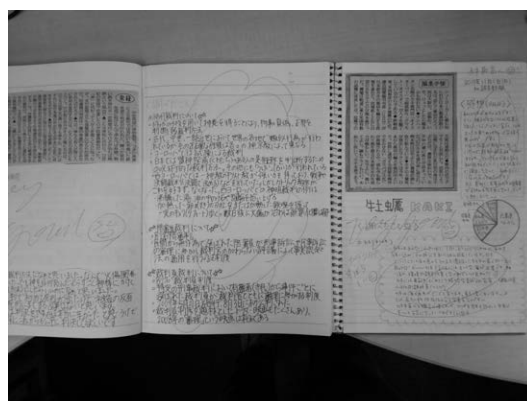
りに補足することなどを調べさせ、まとめを書かせる。

- ・学期ごとにスクラップする記事のテーマを決める

- (例) 1学期；自分の気になった記事
2学期；各新聞のコラム・社説
3学期；経済に関する記事

なお、3学期の「経済に関する記事」は、実践後の生徒の反応を見る限り、少々難しいと思われたため、途中で「自分の気になった記事」に戻した。

生徒の作成したスクラップブック



教師側の気になる記事や、授業に関わる内容の記事なども配布し、生徒の興味・関心を促した。

(2) 朝日新聞スクラップコンクールへの応募

1学期に培ったスクラップブック作りのノウハウをもとに、夏休みの宿題として、1つのテーマに沿った7日分の記事をまとめたスクラップブックを作成させた。(結果 → 佳作4名)

(3) 各新聞社の新聞比較

6紙の各一面やコラムの内容を班ごと

に分析し、その内容を比較、クラス全体で発表した。

コラムの分析では、そのコラムにふさわしいタイトルも考えた。各新聞社によって比重を置く内容や、同じ事件でも見解が異なることに気づかせることができた。

例えば、尖閣諸島沖漁船衝突ビデオの流出に関するコラムを比較した。

当初は作業に時間がかかっていたが、しばらくすると慣れてきたため、比較的短時間でも同じ作業が出来るようになってきた。

コラムの比較中



② LHRの授業において

(1) 派遣記者による授業

読売新聞社の澤野未来記者をお迎えし、新聞記者の一日や、印象に残った記事、新聞記者になったいきさつなどについて興味深い話を伺った。生徒達からも、「現役の女性記者の方から具体的な話を聞いて大変参考になった」、との声が聞かれた。

澤野記者による講演会



(2) 修学旅行のまとめを新聞形式で作成

3泊4日の熊本・長崎への修学旅行について、新聞形式でまとめた。

なお、この新聞は「全国小・中学校・PTA新聞コンクール」に応募した。

(応募の結果、学校として「特別賞」を受賞)

生徒の作成した修学旅行新聞



5. その他の学年の取り組み

- ・ 中学1年…地理の授業で新聞記事を紹介、夏休みの課題で、興味のある外国についての新聞作成 (作成した新聞は、本校の文化部発表会で展示)
- ・ 中学2年…2010年度HAPPY NEWSへの応募、読売新聞社の見学、1学期の合宿研修のまとめを新聞形式で作成 (「全国小・中学校・PTA新聞コンクール」へ応募)
- ・ 高校1年…世界史の授業で、歴史に関する新聞記事をスクラップさせて提出 (夏・冬休みの課題)

- ・ 高校 2 年…日本史 A の授業で、生徒が授業進度に合った新聞記事を提出
教員が全員に授業内容に沿った記事を配布し、生徒は自主的に新聞のまとめや感想等を提出
- ・ 高校 3 年…政治経済の授業で、新聞記事をスクラップして意見発表
SE (スーパーイングリッシュ) コースは、英字新聞を使用して意見発表

して社会の出来事に興味・関心を持たせることを目標においた。その点では、中学 3 年生は毎週のスクラップの宿題や、折にふれて新聞を使った授業の取り組みをしていたので、ある程度は達成できたのではないかと考える。例えば、社会科の授業で時事問題を話題にする際も、生徒から活発な意見が出るようになった。

2 年目の目標は、この取り組みを中学 3 年生以外の他学年にも広げ、中高一貫校として中学 1 年から高校 3 年まで 6 年間を通じて系統的な取り組みを考えていきたい。また、社会科だけではなく、他教科とも連携して取り組んでいきたい。

6. ジュニア記者の派遣

本校の生徒 2 名 (高校 2 年、鹿井りお・中学 3 年、佐古田まい) が、「ジュニア神戸新聞」の記者として、神戸市商工会議所の水越浩士 (元) 会頭のもとを訪問し、取材した。

この取材内容は新聞記事となり、別刷で発行された。

生徒による取材の様子



7. おわりに

今年度は、生徒たちが新聞に定期的に触れることで、新聞を身近に感じ、新聞を通

【 高 等 学 校 】

「研究テーマ」

「ニュースレポート」の取り組みをさらに深化させるために

兵庫県立西宮甲山高等学校 教諭 大塚久夫

1、はじめに

本校では「総合的な学習の時間」を、各学年1時間ずつ実施している。そして、第1学年の「総合的な学習の時間」において、「ニュースレポート」の形で、年間35時間のうち、約半分以上の20時間程度で実施している。

この「ニュースレポート」は、新聞記事を利用して社会的なことを生徒に考えさせるために重要な取り組みであるとして、この10年ほど実施しており、本校ではほぼ定着した形になってきている。

平成21年度と22年度、NIEの実践指定を受け、多くの新聞紙を図書室に配置し、生徒たちが日常的により多くの新聞記事に触れる環境を整備した。

新聞紙は、約1週間分程度を図書室の入口に一番近いテーブルに置き、常時生徒たちが読める形にした。第1学年担任団は、図書室保管期間の過ぎた新聞紙を職員室に保管して、いつでも生徒たちに「ニュースレポート」作成の資料を提供できるよう心がけた。



図書室での配置

また、第1学年の「総合的な学習の時間」だけではなく、第1学年の「現代社会」、第3学年の選択「現代社会」でも新聞記事を利用した同様の取り組みを実施した。

実践指定を受けて、多くの新聞を購入し生徒たちが新聞に触れる環境を整えることが出来た事は大変重要なことであり、各担当者からも好評であった。

2、ニュースレポートの実施

第1学年の「総合的な学習の時間」の構成は、「ニュースレポート」と「職業インタビュー」である。「ニュースレポート」は新聞記事を使って社会的な事を考える力をつけ、「職業インタビュー」で自分の進路のことを考える事を柱としたものである。

平成22年度も、従来と同じように、1年間、実時間約30時間ほどのうち、「ニュースレポート」を約20時間実施し、進路を考える取り組みとしての「職業インタビュー」で残りの10時間ほどを実施した。

「ニュースレポート」の実施の仕方は、4月の最初の時間に、報告書と前年度のレポートの中から見本になるものを印刷して配布し、レポートのまとめ方と授業の進め方を説明し、発表順などを決めた。そして、2～3週間の準備期間を置いて順に発表を実施していった。

発表者は毎回3名、それぞれが新聞記事のうち自分が興味を持ったものを切り取り、レポートの左側に貼り、右側に①テーマ設定の理由、②ニュース内容の説明、③自分の意

見・感想、④自分で調べた事)などを記入してそれを持って前に出て報告する。そして、時間の発表者がそれを聞いて、質問をする形で授業を進めるのである。

1クラスは40名であるので、順調に進めば14週で完了するのであるが、第1回目の取り組みの説明や、欠席者が出たり、新聞記者さんをお呼びして講演をしていただいたりする機会があるので、少しずつずれていって年間授業数の6割程度になる。

3、生徒同士の議論を進めるために

ニュースを読んでイメージを膨らませ、自分の意見を客観的なものにしていく事は、大変重要な事である。

生徒の発表は、報告書の棒読みになってしまうものが多い。そのため、この取り組みにおいては、生徒たちが意見を交換し合うことが少しでも活発になるように、まず、事前にレポートに担任が目を通し、事前指導をしておくことが必要である。

そして、授業においては、次回の報告者(3名)が質問をするように義務付けている。また、先生が2人ずつ入るようになってるので、先生が生徒たちの間から質問したりして、聞いている生徒がイメージを膨らませることが出来るよう配慮している。

学年を通しての取り組みとしては、10年間ほどのノウハウの蓄積があり、各クラスとも同じような流れの中でほぼそろって進行できるようにってきている。そのような意味では、「ニュースレポート」の取り組みは、ほぼ形として成り立ち、校内で認められるようになってきていると思われる。

ただ、この数年間実施してきた教師の側から考えると、もう少し生徒たちが積極的に取り組み、社会問題について考え、身についた

取り組みとなるような、深まりを迫及していきたいと考える面がある。

4、アンケート結果から

NIE実践指定を終えるにあたって、簡単なアンケートを第1学年生徒に実施した。その中で、本校でのこれからの「総合的な学習の時間」をさらに発展させていくという観点から重要であると思われる事項についていくつか報告をする。

①「新聞を読むことは生活を豊かにし人間形成に役立つと思いますか」という質問に対して

1、よく役立つと思う	91	67%
2、ある程度役に立つ	31	22%
3、役立つしない	17	12%

圧倒的に多くの生徒が、新聞を読むことの大切さを認識している。ところが、実際に読んでいる程度はどうかと言うと、

②「あなたは家庭で新聞をどの程度読みますか」という質問には

1、よく読む	13	9%
2、ある程度読む	19	13%
3、あまり読まない	36	25%
4、読まない	77	53%

「新聞を読む」と回答した生徒は22%に過ぎない。新聞を読むことが大事であると認識していながら、78%の生徒は読まないと回答しているのである。

さらに

③「新聞を読む時間はどのくらいですか」という問いには

1、1時間以上	5	3%
2、30分～	2	1%
3、15分～	14	10%
4、15分以内	48	34%
5、読まない	74	52%

であり、ほぼ前の②の結果と同じ数字になっている。

④「どのような記事を読みますか」という問いには

1、社会面	21	16%
2、地方面	0	0%
3、マンガ	10	8%
4、テレビ欄	50	39%
5、スポーツ面	27	21%
6、コラム・社説	1	1%
7、その他	19	15%

となっている。テレビ・スポーツ欄が圧倒的に多い。予想通りともいえるが、もう少し社会的な事を考える比率がほしいところではある。

さらに、新聞記事やニュースが家族での話題になっているかどうかを質問してみた。

④「あなたは新聞や他の方法で入手した情報をもとにして、家族や友人と話をする機会がありますか」という質問には

1、よく話をする	14	10%
2、機会がある	60	42%
3、機会は少ない	57	40%
4、機会は少ない	13	9%

と回答しており。新聞ばかりではないものの、社会的な問題が、家族間の話題の一つになっていることが読み取れる。

⑤「学校図書室」に新聞が置いてあることはいいことだと思いますか」という質問には

1、複数あるのがよい	70	65%
2、2紙がよい	10	9%
3、1紙でよい	13	12%
4、不要である	14	13%

生徒たちは、実際には新聞を読む機会は少ないが、いろいろな立場から書かれた新聞を読みたいと思っているのである。

さらに

⑥「あなたは、ニュースレポートの取り組みや学校図書館においてある新聞購読などを通して、新聞を読むことは重要であると思うようになりましたか」と重ねて聞いたところ

1、とても大事だ	12	8%
2、大事だ	64	45%
3、あまり大事ではない	37	26%
4、大事ではない	29	20%

前掲①と同じような傾向である。やはり新聞を読むことは重要であり、この取り組みがそのことを認識する一つのきっかけになっていることが読み取れる。

5、今後の課題

私は、生徒たちのニュースレポートの取り組みや、アンケートなどを通して、新聞をはじめとする活字を読む習慣が、生徒たちの環境から遠のいていっていると感じていたが、数字で見てもその通りである。

しかし、新聞などを読むことの重要性は、生徒たちも認識しており、これに合うような、学校の取り組みも必要であると考えている。

たとえば、レポートを毎週3人ずつ、家でまとめて来なさいではなく、月に1回でもいいから、全員が新聞紙1部を持ってきて、クラスで読んで、レポートをまとめ話し合うというような形にしてみたらどうかと考えている。

いろいろな機会をとらえて、新聞に親しめる機会を作ることが重要だと思うので、23年度も、「一緒に読もう！新聞コンクール」に出来るだけ多くのものが参加できるようにしてみたいと考えている。今回の実践指定は、今までの本校の取り組みを見直し、発展させていくいい機会になったと思っています。

「研究テーマ」

N I E と論作文 ～新聞写真を使った小論文指導～

兵庫県立柏原高等学校 教諭 島村香苗

◇はじめに

本校は、丹波市に位置する進学校であり、全校生約800人のうち、95%近くの生徒が進学を希望している。三年前より、全校を上げて十分間の「朝の読書」に取り組んでおり、「読書は学びの基本」との認識の上に読書指導に当たっている。また進学に当たって、小論文が必要な生徒も多く、生徒が新聞と接することで、①読解力、語彙力、文章力を養うとともに、②社会を知り、③社会の様々な分野に目を向け、④ひいてはそこにある様々な事象に興味を持ち、⑤問題点を見つけ、⑥考える力を養う、ことを目指していきたい。そして、小論文のための「基礎知識」を身につけると共に、思索能力・自己表現能力の育成をすることを目標とする。

◇実践内容

- ・国語（現代文）…コラムを使っての読解力、語彙力（漢字力含む）、要約力、表現能力の育成をする。（すでに数年前より実施）
- ・国語表現 …記事の読み比べ、スクラップ作成、広告分析等による、社会事象の考及び、小論文作成に至る。

神戸新聞「ジュニア神戸新聞」子ども記者講習会へ参加・スクラップ（朝日・新聞スクラップコンクール応募・朝日新聞「大学入試小論文対策パワーシート」で小論文作成・読売新聞 朝刊一面コラム編集手帳見出しコンテスト応募

- ・家庭科 …記事を使って、身の回りの様々な事象に気付き考察を深める。



- ・英語 …英字新聞を読み、英語の読解力を深めると共に、世界情勢及び、世界の国々の文化についても、知識を深め、視野を広げる。



- ・現代社会 …コラム、社説から、現代社会の実情・情勢を考察する。
- ・小論文講座（補講夏四回）…新聞記事を使って、小論文のイロハから入り、記事に対しての論説の仕方、意見のまとめ方を学ぶ。
講師 朝日新聞社記者
- ・N I E 巡回セミナー（記者派遣事業）
講師（派遣記者）朝日新聞阪神支局長 中村正憲 氏
テーマ「新聞社説はこうしてできる」

◇配置

新聞6紙は、図書室と教室棟を結ぶ渡り廊下に配置。ゆったりと広く、日当たりも良く明るいいため、生徒達は図書室や図書室の下にある職員室への移動の際や休み時間などに閲覧していた。

また、新聞がとどけられるまでは、同じ場所に、各紙のコラムを日々掲示して、6紙それぞれのコラムを読み比べる楽しみを紹介するとともに、NIEへの関心を高めるように工夫をした。



◇具体的取組・実践例その一～現代社会～

『新聞記事を活用した現代社会の授業』

新聞記事を授業に持っていき、導入の5分～15分を使って解説をする。その際、新聞記事の音読、板書や自作の視覚教材を黒板に掲示し、わかりやすく解説をする。その頻度は、週一回程度。

第1回 11/2 実施 11/2 の毎日新聞

『露大統領北方領土訪問』を活用した授業

第2回 11/8 実施 11/7 の朝日新聞

『TPP 各国と協議入り』を活用した授業

第3回 11/9 実施 11/3 の朝日新聞

『オバマ政権 痛打』を活用した授業

第4回 11/17 実施 11/16 の朝日新聞

『スー・チーさん 解放』を活用した授業

第5回 11/24 実施 11/24 の朝日新聞

『北朝鮮、韓国に砲撃』を活用した授業

第6回 12/6 実施 11/17 の朝日新聞

『裁判員裁判 初の死刑』を活用した授業

アンケート結果

①政治や経済・国際情勢に興味はあるか？

(研究実施前) (研究実施後)

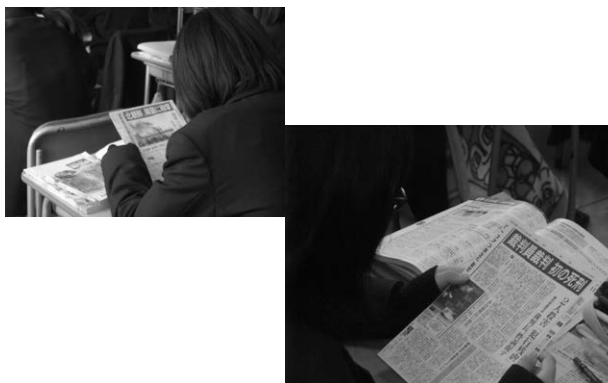
とてもある	4人	10人
少しある	14人	19人
ほとんどない	16人	8人
ない	5人	2人

②現代社会の授業は好きか？

(研究実施前) (研究実施後)

とても好き	3人	13人
好き	15人	17人
普通	20人	9人
あまり好きではない	1人	0人
嫌い	0人	0人

新聞記事を活用した授業をおこなうことで、政治や経済・国際情勢などに対して興味を持たすことができ、また現代社会の授業を好きにさせることにもつながったことは事実である。生徒に求めた「1年間の授業の感想」では、「現代社会の授業を受けていくことでニュース・新聞を自ら見るように少しなった」「大学生になったら新聞を毎日読もうと思う」「新聞を使っただけではわからない知識も一緒に吸収できて興味深かった」などの非常に前向きな感想が多かった。



◇具体的取組・実践例その2～国語表現Ⅱ～

単元とねらい 「小論文の技術」

- ①小論文の様々な型（課題文型・データ型・写真等の素材などの融合型など）を学び、出題者の意図を読み取って、自分の意見をまとめる。
- ②意見の根拠となる具体的な知識を集める練習として、新聞を扱い、新聞の記事の構成や見出しについて学ぶ。

指導計画

- 第1時 意見・主張はどのようにして自分の中に生まれてくるか考えさせる。
- 第2時 課題1 論題について、意見と根拠を短文で書く練習させる。
- 第3時 課題1をグループで発表・共有し、代表が発表させる。
- 第4時 課題2 論題について、問題提起できるような疑問文を作成し、意見と根拠を短文で書く練習させる。
- 第5～6時 課題文型小論文を書かせる。
- 第7時 データ型小論文のデータを読む。
- 第8時 新聞写真を読み、新聞読み取り文を書く。(本時)
- 第9～10時 融合型（写真と課題文）小論文を書かせる。

本教材

「朝日新聞」2010年11月27日（土）
第一面写真「エコと共に去りぬ」

本時の目標

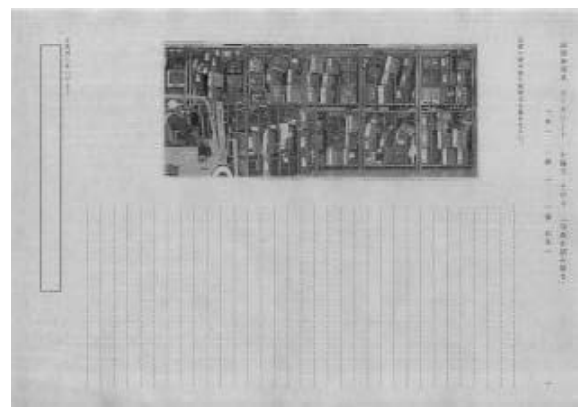
新聞写真を読み取り、短い言葉で言いたいことをまとめる

学習指導案

学習事項	指導上の留意点
・本時のめあてを確認する。	・課題文やデータ型以外の小論文の型として、写真などの

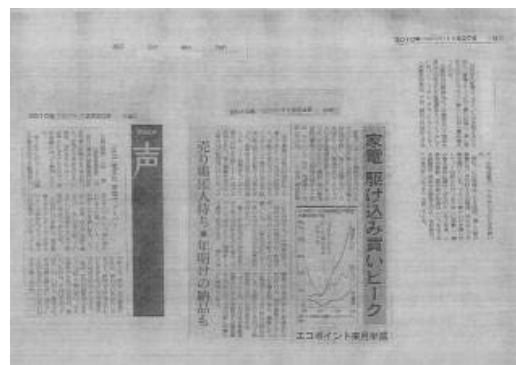
<ul style="list-style-type: none"> ・新聞写真を見て、何の写真か考える。 「最大」万博閉幕 食べ歩き田園ストリート 	<ul style="list-style-type: none"> 素材から意図を読み取って自分の意見をまとめるケースがあることを理解させる ・新聞写真には事件を知らせる性質と記者の意図が強く、その意図を訴える両面を持つことを理解させる。 ・事実と意見を区別させる。
<ul style="list-style-type: none"> ・新聞写真（タイトルや記事なし「エコと共に去りぬ」）を見て、何の写真か考える。 ・写真に写真読み取り文をつける。 ・説明文の要素を学び、読み取り文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを用意して、まず、自由に読み取らせる。 ・5W1H「いつ、どこで、だれが、何を、どうした、なぜ」を書く。 ・ヒントを与えながら考えさせる。（新聞発行日時など） ・写真の情報を読み取るポイントも、データの読みとりと同じであることを理解させる。
<ul style="list-style-type: none"> ・写真についていた記事を読んで、自分の書いた写真読み取り文と比較する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・より詳しく様子が伝わる説明文にするために、何が必要か考えながら、写真についている記事を読み、社会的な背景を考えさせる。
<ul style="list-style-type: none"> ・写真に小見出しをつける ・見出しの付け方を学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見出しづくりのポイント 「記事を適切に表現すること」 「10字以内で作ること」 「言いたいことを入れること」 「無駄を省くこと」 「〇〇について」という表記はない

<ul style="list-style-type: none"> ・自分の書いた小見出しを班内で発表して交流する。 ・各班の優秀作品を発表する。 ・記事につけられた見出しと自分の書いたものを比べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・班は、何度か活動をしている班を使う。机間巡視により交流を促す。 ・代表によいと思う見出し一つ、板書させる。 ・報道記事についていた見出しを提示する。 ・短い言葉で伝えたいことを書く難しさとおもしろさを理解させる。
<ul style="list-style-type: none"> ・関連記事「家電駆け込み買いピーク」と関連投書「『エコ』考えた家電フィーバー」を読む 	<ul style="list-style-type: none"> ・データの読み取りをさせる。記事や投書文にサイドラインを入れながら読ませる。 ・一つのテーマにも多様なものの見方と意見があることを理解させる。
<ul style="list-style-type: none"> ・次回「家電エコポイント制度と地デジ化」について自分の意見を書くのを促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・カメラマン（記者）はどのような意図でシャッターを押し、記事にしたのか考えさせる。



ワークシート
エコと共に去りぬ

(2010/11/27 朝日新聞)



関連記事「家電駆け込み買いピーク」

(2010/11/24 朝日新聞)

関連投書「『エコ』考えた家電フィーバー」

(2010/12/20 朝日新聞)

導入プリント

「最大」万博閉幕 (2010/11/1 朝日新聞)

「食べ歩き田園ストリート」

(2010/11/19 朝日新聞)



◇課題と成果

生徒は、実践を進める上で、論文を述べる際にも、曖昧であった論点に具体性が出てきた。NIE実践は生徒をはじめ担当する教師側にも興味を持ってとり組めるものである。何より面白い。課題は、教師側にプリント作成や実際の新聞の準備等が、教科書を扱うだけの授業よりも労力がかかることであろう。

そういう状況の中で、4ヶ月間も各社の新聞が届けられるという大いなるバックアップ体制がありがたかった。

N I E(教育に新聞を)事業 3 年目を終えて

県立星陵高等学校 地歴公民科教諭 高田 恭一

平成20年度から3年間、本校はN I E(教育に新聞を)事業に参加して、授業における新聞活用に取り組んできた。

初年度においては、兵庫県N I E推進協議会の格別の配慮をいただき、幸いにも5月から新聞6紙を入れていただくことができた。そのおかげで、本校のN I Eは大変スムーズに始めることができた。

新聞の配置場所としては、職員室前スペースに机を用意して6紙を並べることにした。教室に配置する等の方法を取らなかったのは、職員室に用事がある立ち寄る生徒や質問に来た生徒が、来たついでに新聞をちらっとでも読める雰囲気大切にしようと考えたからである。



今回の学習指導要領の改訂では、問題解決能力の伸長を図る探求活動の一環として、他者と共同して問題を解決しようとする学習活動が重要であると指摘されている。じっくりと新聞を読んで考えをまとめる作業やクラスメートの前で発表する機会を通して、さまざまな効果を発見することができたと同時に、学校全体で組織的に取り組んでいく難しさや

今後の取り組むべき課題を確認できた。

以下、3年間の取り組みをまとめながら振り返ってみたい。

1 授業を通した新聞活用

(1) 平成20年度

1年生現代社会では夏季休業中の課題として新聞の切り抜きによりスクラップブックの作成を始めた。この課題は、地歴公民科の先生方の協力によって毎年恒例の課題として定着している。

2年生においては、新聞を継続的に読むという習慣を養い、学問研究の最先端の動向や様々な職業に関わる記事に気をつけながら、自己の進路に関する情報を収集する作業を積ませる試みを「総合的な学習の時間」において2年生全クラスで取り組んだ。

この取り組みの成果として、生徒が抱く夢や憧れに対して、現実的に何をどのように取り組めばよいのかということに気付かせることができたということがあげられる。

発表を相互に傾聴する姿勢を養うことを通して、普段接しているクラスの友人が何を考えているかを知り、それを通して感じた驚きや発見は貴重な体験であり、日々の自己の生活を見つめ直す契機となった。

(2) 平成21年度

実践2年目の平成21年度は、「新聞を読もう」という当初の目的をさらに浸透させ、「新聞を読むことの習慣化を図る」ための意識づけを行うと同時に、「新聞を活用した思考力や情報活用能力を高める」ことを目標とした授

業実践を中心に取り組んだ。

① 総合的な学習の時間（3年生1講座）

「社会問題研究」と題した少人数講座を設定した。この講座は、新聞を通してテーマを模索しながら、文献調査やインターネットによる検索・調査を行い、その調査結果と自分の考えをまとめて発表するというものである。

情報を収集して分析する力や課題を解決する力だけでなく、考えをまとめて発表するプレゼンテーション力を向上させる良い機会とすることができた。

また、新聞の記事見出し作成や4コマ漫画の吹き出しを考える作業を授業に取り込んで記事構成について学ぶとともに、NIE記者派遣事業の実施、県弁護士会を通した弁護士による講話会を行った。

② 国語総合（1年生7クラス）

11月初旬の2週間、6紙の読者投稿欄記事を各自で読み、「それぞれが興味を持った意見」、「同感だと感じた意見」、「全く反対だと感じた意見」の3種類の記事を切り抜いて提出用紙に貼付し、「全く反対だと感じた意見」に対して自分の意見を書いて提出するという内容で授業を展開した。

国語科の担当教諭からは、「この授業を通して、時間をかけてじっくりと自らの意見を構築し、他の人に向けて発信することができる表現力を養うことができた」という声が聞かれた。

（3）平成22年度

最終年度は、奨励校としてNIE事業に取り組んだ。新聞を手にするのは当たり前という状態からさらに「積極的に自ら新聞活用を行う応用力の向上」を図り、「学校をあげて組織的に新聞活用に取り組む体制作り」を築くという目標をもって取り組んだ。

① 総合的な学習の時間（3年7クラス）

時間割の枠外に設定されている「総合的な学習の時間」を活用し、5月下旬から6月下

旬にかけて毎日、新聞を読む作業を行った。

そして、掲載された記事から各自の興味・関心に応じて自然科学、社会科学等のテーマを選択し、各人の課題をそれぞれ設定させた。

そのうえで、生徒が選んだ記事の感想や選んだ理由、共感する筆者の考え等をまとめ、記事に関して身近な友人や家族に意見を聴いたり、意見を交換するという作業を行い、最終的に自分の考えをまとめるという手順で学習を展開した。

この学習は、2年生においても夏季休業中の課題として同様に実施した。その結果、2・3年生全員分のレポートを応募した日本新聞教育文化財団主催の第1回「いっしょに読もう！新聞コンクール」において、学校賞を受賞するとともに、特別賞・着眼賞と考察賞、奨励賞を受賞するという成果を上げることができた。

また、担当者である学級担任からは、「作業を通して、普段の生徒からは想像できない考え方や豊かな感性を持っていることに驚いた」という声が聞かれた。



日々新聞に触れながら、テーマに沿った記事を選び、考えをまとめるという地道な作業の積み重ねであったが、新聞を読むことで、社会への関心を広げ、社会の課題に対する気づきを促すとともに、家族や友人とのコミュニケーションを通して、自己の考えを深める姿勢を身につけることができた。それぞれが調べた情報や知識を共有するために、学年集会において相互に発表する機会を設ける等の工夫も効果的であった。

② 総合的な学習の時間（3年1講座）

「社会問題研究」2年目の取り組みとして、昨年度同様の手法を土台としながら、租税教育推進協議会から税理士を招いた租税教室と県司法書士会による高校生消費者講座を新たに開催した。



住本真知子司法書士による講話会

また、昨年度同様、NIE記者派遣事業と弁護士による講話会を実施し、記者派遣事業では本校卒業生（58回生の田中宏樹神戸新聞記者）による講話を実施した。弁護士による講話会では昨年度と同じ講師（安原浩弁護士）を招聘し、新聞記事をもとにした裁判員制度の学習を行った。



田中宏樹記者による講話会

3 成果

(1) 生徒の変化

3年間のNIE事業の取り組みは、生徒にさまざまな気づきを与えた。高校生の活字離れが指摘されて久しいが、メディアの中でも高校生が敬遠しやすい活字メディアにじっくりと向き合い、しっかりと記事を読み、要旨をまとめて考察する学習を繰り返すことで、読解力や表現力を身につけることができた。

また、それだけでなく多くの情報の中から問題点を整序し、洞察する力を身につけて豊かな感性を磨くことができた。

生徒の潜在的な力や可能性を引き出すことが出来ると実感できたことが、最大の成果であったと考えている。

- 朝日新聞社「朝日スクラップコンクール」
 - 第15回（平成20年度） 4点応募
 - 佳作（39名）に1名入賞（応募1201点）
 - 第16回（平成21年度） 10点応募
 - 優秀賞（8位）に1名 佳作（40名）に2名入賞 （応募929点）
 - 第17回（平成22年度） 40点応募
 - 佳作（23名）に1名入賞（応募1137点）
- 日本新聞教育文化財団 第1回「いっしょに読もう！新聞コンクール」
 - （応募総数12290）
 - 学校賞 受賞（小中高全体で3校）
 - 高校特別賞・着眼賞 1名（2名受賞）
 - 高校特別賞・考察賞 1名（3名受賞）
 - 高校奨励賞 3名（50名受賞）



○神戸新聞社特集ページ「ジュニア神戸新聞」
(平成22年9月30日発行、別刷り特集、
12頁)の子ども記者として、3年生男子1
名が参加した。

この特集は、子ども記者が、行政やスポ
ーツなど各分野を取材して記事を執筆した
ものであり、若い視線から見た「兵庫のいま」
を満載した紙面であった。

神戸、阪神、姫路、但馬、淡路、丹波の
小学4年生から高校3年生まで男女計21
人が子ども記者となり、事前研修の後、8
月に取材を行ったうえで記事を作成した。
なお、本校生徒の担当は井戸兵庫県知事へ
のインタビューであった。余談であるが、
神戸新聞社の企画担当者は本校の卒業生
(40回生)であった。



○ NIE記者派遣事業(20~22年度の
順)

福山絵里子記者(日本経済新聞社)

藤元真理子記者(共同通信社)

田中宏樹記者(神戸新聞社東播支社)

(2) 教師の変化と学校の変化

NIE事業の取り組みは、教師や学校にも
大きな影響と変化をもたらした。

「読む」「聞く」「考える」「まとめる」「伝
える」という作業を通して、時間をかけなが
ら生徒に取り組ませる工夫が大切であり、正

解を提示するのではなく、生徒の気づきを「待
つ」という姿勢の重要性を学ばせてくれた。

高等学校においては、従来から講義形式の
授業が中心である。しかし、大学受験を意識
した、いわゆる受験対応の学力向上を図る授
業は、ともすれば教師を「正解を与える教師」
に陥れ、一方通行の授業になりがちであった。
そうした指導法に工夫をする必要があると感
じながら、なかなか取り組めないのが本校の
現状であった。

そうした中で、新型インフルエンザによる
学年閉鎖が明けた平成21年11月に、コラ
ム学習を取り入れた当時の1年生国語総合担
当の先生方の工夫は興味深かった。

授業の進度を気にしながらも、じっくりと
物事を考える姿勢を育てようとコラム学習を
取り入れられた。コラム学習のレポートから、
生徒の感性の鋭さを改めて感じる事が出来
たことはいままでもない。

4 今後の課題

3年間にわたって、「メディア活用力の習慣
化」、「考える力の深化」、さらに教育効果を向
上させるために「指導の組織化」と目標をも
って取り組んできた。

NIE事業は、生徒が深く物事を考え、自
分の意見をまとめて表明するという力を身に
つけるために大変有効な手法である。

私は、今後も新聞という活字メディアの活
用を通して、生徒が丸ごと新聞と向かい合え
る姿勢を涵養していきたい。そして、社会や
他人に積極的に関わろうとする意欲をもった
生徒を育成していく所存である。

新聞を通して、人や社会、自然が有機的に
繋がって関連しあう中でアイデンティティを
確立し、自己実現を図ろうとする能動的な意
欲を高めることが期待できるということを実
感できた3年間であった。

新聞を読んで心を耕し、学ぶ力を育てる

兵庫県立武庫荘総合高等学校 教諭 川村道雄

1 はじめに

本校は、県立武庫工業高校と県立武庫荘高校との発展的統合によって平成15年度に設置された総合学科高校である。創立7年目を迎えた平成21年度、生徒間の学力差が広がり学習意欲の乏しい生徒が目立つようになった実情をふまえ、自主性を育てる仕掛けを模索するプロジェクトチームが発足した。自己管理のための手帳（MC手帳—Mukonosou Comprehensiveの略称）の活用、朝のSHRでの学力向上に向けての取り組みと合わせて、NIEの実践から学ぼうという声があがり、平成22年度奨励枠での実践校指定をいただいた。そして、NIE実践の窓口を、新たに設置された「まなび支援部」が受け持って活動を始めることになった。

2 活動対象と場所

集団での学びの機会を随所に取り入れ、対話の機会を多く持って「見えない学力」（樹の根っこに相当する部分）に働きかけていくという方針で、22年度の取り組みが始まった。対象は主として入学してきた1年次（8回生）とし、活動が軌道に乗ってからは、2年次（7回生）に対する取り組みも行うことにした。（※単位制である本校は、学年のかわりに年次と言い表している。）

また、HR教室棟の1階東端に位置する、生徒が立ち寄りやすい教室を提供してもらって「まなび支援室」と名付け、長机と丸いす

を入れて部屋の体裁を整えていった。平日の昼休みと放課後を開放し、総合的な学習の時間（2年次は月曜の5限または6限）、3年次は金曜の1・2限）にも担当を決めて対応できるようにした。

3 記者派遣事業講演会を終えて

年間の活動報告をするにあたり、3月4日に実施した講演会後の感想をまずとりあげる。当日、日本経済新聞神戸支社の宮崎義夫支局長をお迎えし、1年次生全員でお話をうかがった。取材現場や編集現場の苦労話に始まり、コーヒーの値上げの記事を例に、小さな記事でも興味をもって継続して追いかけていくことで世の中の動きが見えてくるという示唆に富むお話であった。

《生徒感想》

僕が今まで新聞を読まなかった理由として、色々な場面でネットの方が優れていると思っていたからです。実際に質問をして、いただいた答えは、新聞はインターネットに速度、量では確実にかなわないが、確実さでは勝る、ただしネットの力は大きいらしく、うまい共存の方法を探しているというものでした。僕としては、速さや量は重要なので、やはり新聞を読むことは増えないのではないかと思います。

… 講演後手を上げて質問をした生徒の感想である。必要な情報を入手する手段として、ネットに押されがちな新聞の存在意義

を問うものだった。誠実に語られる宮崎氏のことばをきちんと受け止めながら、自分の考えをごまかさずに述べる姿勢がすがすがしく、こうした生徒をNIEの活動を通して育てていきたいという思いを強く持った。

4 22年度の活動

(1) 新聞を通して社会を知る、そして自分を知る

入学して1週間後にオリエンテーション合宿がある。最初の仕掛けをこの合宿でやっておきたかった。推薦入試合格者対象に、新聞の切り抜きと400字の感想を2日分課しており、そのいくつかをプリントして1年次生全員に読ませながら話をした。新聞に掲載されている具体的な「人」を通して社会を実感し(社会を知る)、その事実を自分がどう受けとめ何を思うか問いかける(自分を知る)。そして考えを共有することで刺激しあい、学びあうこと(協学)を意図したものである。

生徒からは「あの漢字こう読むんやな」「この感想すごくよかった」「勉強も大事やけど、コミュニケーション能力磨かなあかんねんな」といった感想が聞かれた。事実に対する関心もさることながら、同級生がその事実をどう受けとめているかに強い関心を抱いている様子が見て取れた。

(2) ^{マナabee} Morning

～朝のSHRに新聞記事を

連絡事項や個々の生徒への対応に時間がとられることが多い中、担任がクラスの生徒と同じリズムで呼吸し、記事を一緒に読む時間を大切にしたい。だから、何を読ませ何を書かせるかには心を砕いている。朝のひとつき、ざわついたところを鎮め、前向きな気持ちで授業に臨んでほしいという願いをこめて、新聞をめくる日が続く。

回数は、忙しい時期でも担任が無理なく続けられるようにと、週2回に設定した。時間は、読んで考えて書く一連の活動をなるべく3分程度でこなせるようにと考えて記事を選んだ。用紙はA5に統一し、1回の分量が多くなりすぎないように配慮している。

この活動のねらいは次の3点である。

- ① 新聞に慣れさせて親しみを持たせる。
- ② 自己肯定感への働きかけを念頭に置く。
- ③ 授業前に落ち着いた雰囲気を作る。

副次的には、担任と生徒とのコミュニケーションの一助となることも期待している。入学してしばらくは、投書欄などから、特に、こわばりがちな心を解きほぐし、気持ちがあたたかくなるような記事選びを心がけた。

(3) 定期的に新聞課題に取り組む

① クラス壁新聞

新聞委員(クラスで3名選出)が、各自クラスの友人に読んでもらいたい記事を選び、選んだ理由と一緒に教室の後ろに掲示する。(連休課題へのステップ)

② 連休課題

関心のある新聞記事を切り抜いて課題用紙に貼り付け、感想(400字)を書いて提出。

③ 第2回課題(6月)

「輝いている人」というテーマで記事を選び、切り抜いて課題用紙に貼り付け、その感想(400字)を書いて提出。

④ 廊下掲示(7月)

問題意識を持って記事を選んでいて、なおかつ感想がしっかり書いているものを各クラス数点選び、模造紙に貼り付けて廊下の窓に掲示した。多くの生徒の目に触れる形で紹介し、夏の課題への意識づけを図った。

⑤ 第3回課題(夏休み)

「いのち」というテーマにそって記事を3つ選び、それぞれ400字の感想を書いて提

出。

⑥まなび合宿でのグループワーク(8月4日)と報告発表会(10月8日)



まなび支援部主催で、1年次希望者対象に夏の合宿を行った。「なりたい自分になる」を合い言葉に、自分と向き合い、少し年上の憧れの対象となりうる他者と関わる絶好の機会と位置づけ、卒業生をまじえたグループワークを取り入れた学習合宿である。

生徒には、新聞記事を一枚持参するように言っている。前に出て記事の紹介と感想をまとめたスピーチを行い、その後、共通するテーマごとにグループ分けをした。その中で感想を回し書きして、グループ内で話し合ったことを発表するという手順で「新聞を使った学習」を展開した。

また10月初旬には、合宿に参加したメンバーのうち4名が、「いのち」について学んだこと、調べたこと、考えたことを発表する役目を買ってでて、「死刑について」「大麻について」という題で、パワーポイントを用いた4分間の発表を年次全員の前で行った。

⑦第4回課題(11月)

11月6日(土)のNIEワークショップで、岡本光子先生(宝塚市立宝梅中教頭)から教わった「ニュースウォッチング」の手法を参考にし、400字感想をただ書くのではなく、内容の紹介(書かれているメッセージ

の要約)、記事を選んだ理由(60字)、感想・意見(100字)の3つの欄を設けて記述させ、「私の選んだHAPPYニュース」のテーマで、心が温かくなった記事を探して貼り付ける課題を出した。

⑧まなび企画LHR(12月)

第4回の課題を生徒にフィードバックし、いろいろな記事を読み合って考えを深めるねらいで実施した。



まず、スタッフ集会を放課後に持ち、自分の選んだ記事の1分間プレゼンテーション原稿を作らせた。隣の人に記事を紹介し、感想を聞く活動を何度か行い、他の人の感想を取り込んで原稿を作らせておいてから、全員がスピーチ練習を行って当日に備えた。

当日は、スタッフ(3名)が最初にプレゼンを行い、活動の概要を説明したあとで、グループを組み、その中で記事を見せながら、順番にスピーチをする。

スピーチが終わると、記事を1本に絞り、その記事や当人の感想に対するコメントを思いつくまま付箋に書いて真ん中に置かれた紙に貼り付けていく。

最後に、感想や意見を集約してスピーチの組み立てを話し合い、代表者が他のクラスメートに班員の考えを発表するという展開であった。

グループワークの間、教師も付箋を持って机間を移動して回り、班員が選んだ記事を読んで考えたこと、感じたことを書いて貼り付けていく。進行はすべてスタッフに委ね、生徒の自主性をひきだすねらいもあった。生徒たちはのびのびと発言しながらスタッフの誘導で発表までの活動をこなしていった。

⑧ 第5回課題（冬休み）

「ぼかぼかニュース」（心が温まる記事）か「ぷんぷんニュース」（何か言わずにはおれない、怒りなどの感情がわきおこって、表現意欲がかきたてられる記事）のどちらか一方を選んで、内容紹介と感想を書いて提出させた。「ぷんぷんニュース」を選んだ生徒は約3割。「ぼかぼかニュース」の方が生徒には選びやすかったようだ。

⑨ 総合学科発表会（2月）での発表



舞台発表（年間の新聞課題の取り組みについての発表）と、展示発表（「ぼかぼか」ニュースを選び出し感想を葉っぱの形に切った画用紙に書いて「ぼかぼかの木」として表現）それぞれを志願して集まった生徒は、時間をかけて準備を進めた。舞台発表では、話題になったタイガーマスク現象に着目し、ランド

セルを背負いマスクをした教員をゲストで登場させるなど、工夫を凝らした発表を行った。



5 成果と今後の課題

Manabee Morning（SHRで新聞を読む活動）や新聞切り抜き課題、発表活動を繰り返すなかで、具体的な「人」を通して社会を感じ、感じたことを分かちあう楽しさを生徒は味わっていたようだ。樹の根に働きかける目的で水やりを続けた成果は上がったと考えている。しかし、感じたことを掘げ、深めるには、記事の編集過程や表現の仕方にまで思いをはせ、複数の紙面を見比べるなどして考え抜く時間が必要になる。感覚的に受けとめてよしとしている生徒がまだまだ多い。

思いがけない震災が起こり、私たち一人一人何ができるのかを問い続ける年度が始まる。生徒の心に種をまき、育てる教育を進めるうえで、新聞をどのように活用していけるか、さまざまな授業で教室に新聞を持ち出してもらい、学校をあげての取り組みに発展させていくことが課題だと考えている。

【 大 学 】

「高齢者のこころ」の理解 国際教育への展開

近畿医療福祉大学・教授・勝田 吉彰／講師・黒木 利作

I. 概略

近畿医療福祉大学では平成20年度に大学として全国初の実践校指定を受けて以来、今年度は3年目の実践となった。初年度・二年目に試みた実践を定着させつつ、新たな試みを加え仕上げの一年となることを目指した。

新たな試みとして、留学生クラスにおける国際教育の場でNIEを導入した。本学では、平成22年度よりサテライトキャンパスにて福祉経営ビジネス学科として中国を中心とする留学生約100名の受入れを開始したものである。この場で、NIE導入に向けた予備調査を経て「ご近所のニホン人フォーカス」などをおこない、高齢化社会の理解をめざした。

また、本学姫路キャンパスにおいても、前年までの流れを引き継ぎ、「高齢者のこころの理解」「記者派遣講義」「NIEコーナー」等を定着させた。

II. 国際教育でのNIEの試み

筆者は留学生クラスで「医学概論」を担当している。入試面接時に語られる留学生の将来の希望として「祖国に帰り、高齢者施設の経営を行うこと」が多く表明される。これら、福祉施設経営者・管理者を目指している、「医者になるわけではない人々」に対して医学の講義を行うねらいとして、「心身の加齢変化にともなう高齢者心理の理解」「高齢化に関連する社会事象の理解」「医学知識の基本的プラットフォームの形成と医学関連の情報の収集方法の会得」がある。高齢者施設経営の上で医学知識が日常的に要求されるわけではないものの、その運営上、折に触れて効率的に情報収集する能力や施設利用者の心理を理解する能

力は重要となる。そこでこれらの会得を目標にNIE実践を試みることにした。

1. NIE導入に向けた予備調査

1) 調査概略

NIEを導入するにあたり、効果的な教材作成のためには留学生の新聞“利用力”の把握が必要である。そこで、その把握を目的に予備調査をおこなった。

調査項目は、

- ニュースを知る主な方法
 - 健康情報を知る主な方法
 - 日本の新聞を読む頻度
 - 日本の新聞を読まないとした場合、その理由
 - 母国で新聞を読んでいた頻度
 - 現在読んでいる母国語の新聞
 - 日本の新聞で知っているもの
 - 日本の新聞で読んだことがあるもの
 - 新聞でよく読む面
 - 日本の新聞をストレスなく読める量
 - 新聞に書いていることをどの程度真実と思うか（日本・母国それぞれの新聞について）
 - テレビを視聴する頻度と理解の程度
 - ラジオを聴く頻度と理解の程度
- を択式で回答させたほか、
- 特に興味をもった日本のニュース
 - 特に知りたい医学・健康情報
 - 日本のマスメディアへの要望
- を自由記入させた。

2) 結果

留学生がニュースを知る方法はネットが最も多いものの、新聞（日本語＋母国語）とテレビとロコミがほぼ同数で拮抗しており、情報収集手段

として主要な一角を占めていた（図1）。

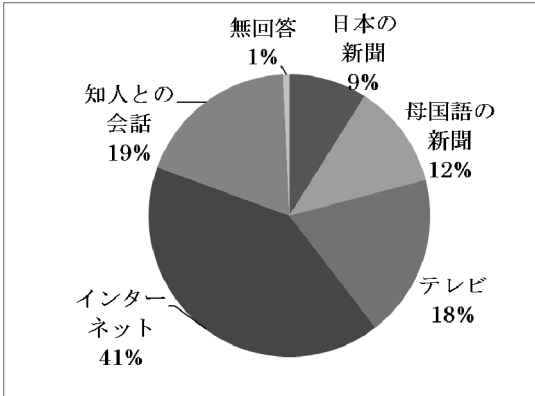


図1 ニュースを知る方法

また、日本の新聞を読む頻度は「週1回以上」の合計で54%と過半数が読んでおり（図2）、さらに、留学前に母国で新聞を読んでいた割合は週1回以上が83%と高率を示した（図3）。すなわち、もともと新聞を読む習慣が定着しており、本邦に留学中も、日本語や内容を理由にいくぶん減少するものの（図4）ほぼ変わらず新聞に目が向いているといえよう。

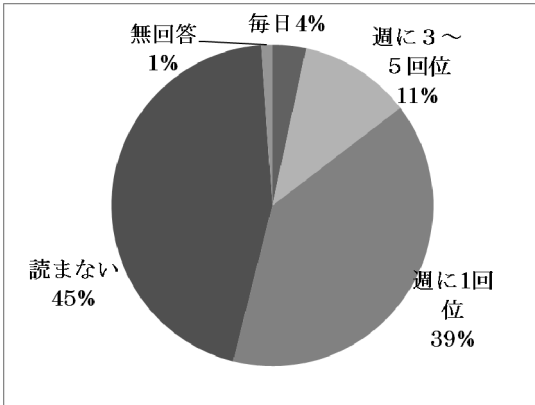


図2 日本の新聞を読む頻度

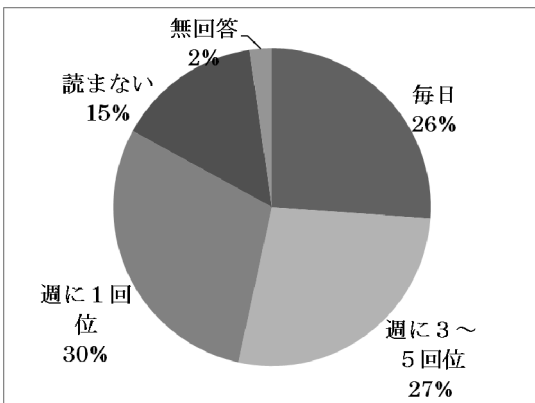


図3 母国で新聞を読んでいた頻度

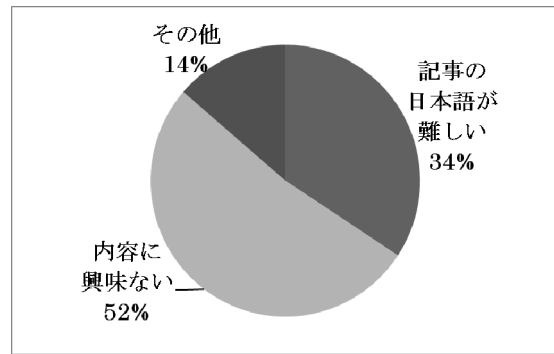


図4 日本の新聞を読まない理由

新聞のなかでよく読む面は図5に示すごとく満遍なくバランス良く読まれていた。

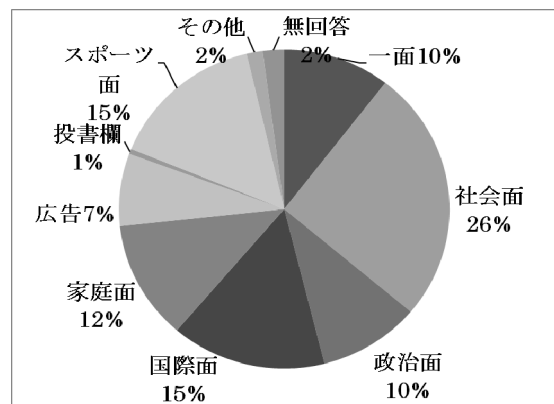


図5 よく読む面

また、日本の新聞をストレス無く読める量は新聞半分ぐらいが多く、1ページぐらいまで入れると67%と大勢を占めた。（図6）

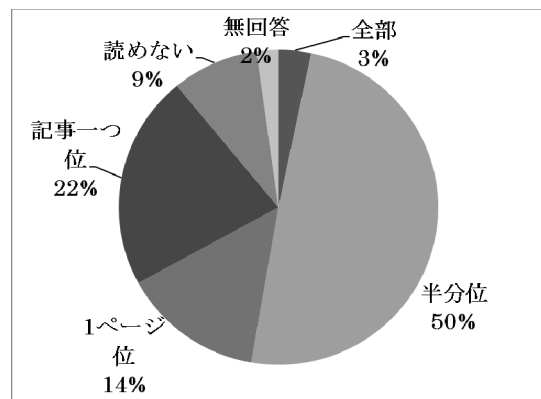


図6 日本の新聞をストレスなく読める量

メディアリテラシーとして、新聞に書いてあることがどれぐらい真実と思うかとの設問をもうけた。日本の新聞については「全部真実」「大部

分真実」あわせて54%で、母国語の新聞の同40%より高く、日本の新聞が信用されていると思われた。(図7、図8)

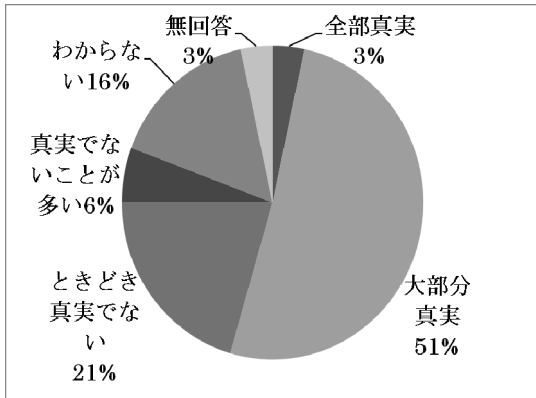


図7 日本の新聞の記事どれぐらい真実と思うか？

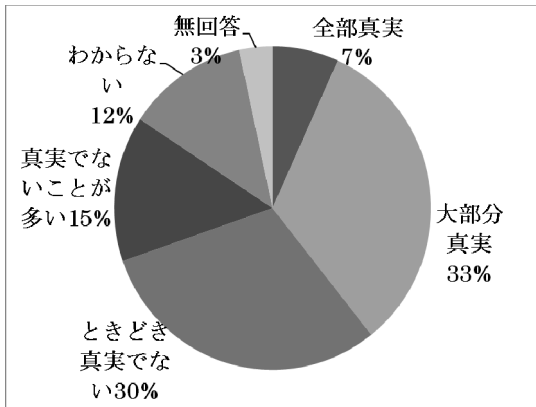


図8 母国の新聞の記事どれぐらい真実と思うか？

以上の結果より、①留学生は新聞を読む習慣が根付いており、情報収集手段の主要な一角を占めている。②新聞を半分程度まではストレスなく読める者が多く③日本の新聞の記事を信用していることがわかり、したがって、留学生教育の場はNIE導入するのにふさわしいと考えた。

これを受けて、留学生クラスでも実践をおこなうこととした。

2. ご近所のニホン人フォーカス

留学生クラスの新たな実践として「ご近所のニホン人フォーカス」を試みた。平成22年11月頃、高齢者虐待問題が各紙紙面を賑わしてきた。

この問題の背景には少子高齢化、介護負担など現代日本の高齢社会が抱える難題が様々に内包されている。日本より一歩二歩遅れながらも、将来、確実に高齢化社会を迎える中国にその背景知識を持ち帰っていただくことは有意義と考えこれをNIEのテーマとした。

まず高齢者虐待に関する新聞記事を配布し読みこんだ。次に、①高齢者虐待問題が起こる理由②高齢者虐待問題の自分なりに考える解決策を考え記入させ、続いて③身近な日本人に「高齢者虐待」に関する意見や解説を求める④これらをもとに自分の意見を400字で書くという課題に取り組みさせた。③の、市井の日本人の生の声を聞いて実際的な理解を深めるところがポイントである。彼らが実際に協力を求めた日本人を記入させたところ、「バイト先の人」が圧倒的に多かったものの、「近所の店の人」「日本人の彼氏」と幅広く協力が得られていたことがわかった。

3. 前年度までの実践で実績を重ねてきた、「新聞の読み方オリエンテーション」「高齢者のこころの理解」も留学生クラスでも実践おこなった。

この中で、気に入った記事を選択し自分の意見を書くレポートでは、朝日新聞投書欄(「声」欄)に採用いただき、留学生クラスとしては初の掲載となった。

若い世代

親の「望子成龍」背に頑張る

朝日新聞 留学生 陳 喜
2010.11.19 (大阪市西淀川区 22)

10月21日の声欄に掲載された「『勉強しい』祖母の言葉実行」という女子高生の記事を読みました。同居しているおばあさんに「勉強しいや」と言われてイライラしていた彼女は、大学進学を意識してからその言葉のありがたさに気づきました。

この投稿を読んで、中国で中学生だった頃を思い出しました。私も母から勉強する

ようくどくどと言われていたからです。自分でも勉強しなければとは思っていたのですが、当時の私には、勉強することの意味や将来の目標がよく分かりませんでした。父と母は、そんな私をとて心配していました。

中国には、親が子供の出世を願う「望子成龍、望女成鳳」という言葉があります。かつて将来の進路がはっきりせず、両親を心配させてしまった私ですが、今は自分の意思で日本に来て学んでいます。これからは、両親に「勉強しなさい」と言われなくても、自分の力で頑張っていきたいです。

Ⅲ. 福祉授業における実践 (黒木)

福祉授業のテキストは大学においてもそれぞれの分野の専門書を使用するが多い。しかし、福祉の現場はまさに生活の場であるがゆえに、「今ここ」の情報が重要な位置を占める。そうした中であって新聞はまさにリアルタイムで分かりやすい、格好の教材である。

現在、福祉授業における、「地域の支え合い」や「つながり」を考えさせる部分で、朝日新聞の4コマ漫画「ののちゃん」を使っている(朝日新聞「声」に採用いただいた)。

また、本学は社会福祉士、精神保健福祉士等の養成校でもあり、施設等における相談員としての進路を希望している学生も多い。そのため、相談員の基本的姿勢について学ぶ目的で読売新聞の「人生案内」を使用し、学生それぞれに自分なりの回答を作ってもらっている。新聞の誌上回答者とは違った視点で自分なりの回答を考えるなかで、自らの体験に基づいた、読む者の心に響く回答を書く学生もいる。その回答がまた、次の教材になる。福祉の学びは机上のみでは完結せず、実践を伴ってはじめて完結する。こうした過程において福祉の現場に必要な「正解」のない課題について考え、行動する姿勢が養われるものと考えている。

Ⅳ. 記者派遣講義

今年度の記者派遣講義は、日経新聞神戸支社の田中文成支社長に講義をいただいた。日経新聞ホームページも供覧しながら、世界情勢と経済の関連など含め新鮮かつ興味深い話をうかがい、質疑応答盛り上がった。



Ⅴ. 学会発表・論文発表

平成22年11月28日、第7回日本NIE学会(京都教育大で開催)にて発表をおこなった。「留学生専門教育におけるNIE実践に向けての予備調査—留学生の新聞利用実態調査—」

活発な質疑をいただき、ディスカッション盛りあがるなか、NIEの効果測定をどうするかなど宿題もいただき、今後の研究に活かしてゆく予定である。

また、同発表の内容を中心に加筆したものを日本NIE学会誌に投稿、採用通知をいただき本稿執筆現在印刷待ちである。

平成23年1月29日には兵庫県NIE推進協議会実践発表会にて実践校指定をいただいた3年間の発表をおこなった。

「大学NIE実践報告—全国初の大学実践校の足跡—」

満場の出席者、そして、講評をいただき大変励みになった。あらためて感謝申し上げる。

Ⅵ. 取材

実践発表会の当日は各紙から取材をいただいた。また、神戸新聞では後日2月6日付で教育欄でも紹介いただいた。



MEMO

A series of horizontal dotted lines for writing, spanning the width of the page.

MEMO

A series of horizontal dotted lines for writing, spanning the width of the page.

2010(平成22)年度
『兵庫県NIE実践報告書』

—2011（平成23）年6月発行—

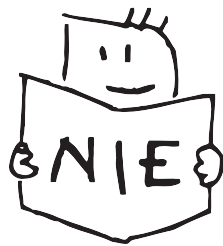
兵庫県NIE推進協議会 編

〒650-8571

神戸市中央区東川崎町1-5-7

神戸新聞社読者サポートセンター内

TEL 078(362)7054 Fax 078(362)7424



Newspaper in Education